佐賀県農業基盤整備事業に係る 文化財確認調査報告書

佐賀県教育庁文化課

昭和52年3月 佐賀県教育委員会

佐賀県農業基盤整備事業に係る 文化財確認調査報告書

昭和52年3月 佐賀県教育委員会

はじめに

この調査報告書は、佐賀県農業基盤整備事業の施行に先行して昭和51年度に国庫 補助金を得て実施した文化財確認調査の記録でありまして、第1部は、文化財が確 認されなかった地区を中心に 概観し、第2部は土生遺跡群、第3部を東宇木遺跡と してまとめたものであります。

土生遺跡は国指定史跡地を包含するものでありますが、前回までの調査に倍して 貴重な資料の出土があり、弥生文化の究明に必ずや期すものがあろうかと存じます。

また、土生遺跡および土生遺跡に北接する土生B遺跡は計画水路等を除き、保存される処置が講ぜられたことは文化財保護の立場から誠に喜ばしい限りでありまして、県農地林務部をはじめとする関係機関のご協力に対し厚くお礼申し上げます。

また、本報告書がより多くの方々にご活用いただけることを願ってやみません。 なお、本書の刊行にあたり調査・整理および執筆を担当された方々にも感謝申し 上げます。

昭和52年3月31日

佐賀県教育委員会

教育長 池 田 武 生

(総) も く じ

Day.	12	1
1.4	NO.	
10	0.7	
	C	じめ

第	1部	佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財確認調査報告	1
第	2部	土生遺跡群	25
第	3部	東宇木遺跡	133

第 1 部

佐賀県農業基盤整備事業に係る 文化財確認調査報告

佐賀県教育庁文化

第1部 目 次

Ι	農業	基盤整備	事業に係る	る埋蔵プ	文化財の訓	司查		3
П	佐賀	東部地区・						9
Ш	佐賀	西部地区·						12
IV	佐賀	南部地区						13
				挿	図	目	次	
第	1図	県内圃	場整備地[区全図·				5
第	2区	佐賀東	部地区…					8
第	3区	土層図	(1)					9
第	4図		(2)					10
第	5図	Į.	(3)					10
第	6区		(4)					11
第	7図		(5)					11
第	8図	小城周	辺図					12
第	9図	武雄周	辺図					13
第	10区	土層図	(6)					14
第	11図	馬ノ谷地	也形図					14
第	12図	集石遺植	冓					15
第	13図	土器実施	則図					15
				-	版			
1	Ξ	田川力田・						19
2	神	埼猪面…						19
3	東	脊振村						20
4	Ξ	養基西部・						20
5	=	根西·大坂	間					21
6	晴	田南部…						21
7	旌	雄東部…						22
8	馬	の谷遠景・					••••••	22
9	集	石遺構…						23
10	馬	の谷出土	上師壺					23

Ⅰ 農業基盤整備事業に

係る埋蔵文化財の調査

1. 圃場整備事業と埋蔵文化財

県内における圃場整備事業は、昭和40年度から始まり、年々その施行地区・面積が増大している。対象面積は、県営、団体営地区あわせて3万haを超え、県内水田面積の60%、奈良時代の条里制施行以来の一大土地改革事業である。

圃場整備事業と埋蔵文化財との関係は、昭和46年三日月町土生における鉱害復旧工事中に遺跡が発見されて以来である。従来の農業開発が干拓と、傾斜地農業振興策としての密柑園造成であり、山麓部、段丘の開拓は、弥生・古墳時代の諸遺跡に壊滅的打撃を与えた。一般の開発と異なり、農業サイドの開発は県内全域に渡り実施される。土生遺跡の発見は、圃場整備事業が、平坦部に存在する遺跡の面的破壊の因という認識を保護部局に焼付けた。昭和48年度より鏡久里地区の圃場整備事業が実施されるという計画に対応して、事業に先行した調査を昭和47年度から実施、昭和49年度に三日月北部地区を組み入れ、昭和50年度には小城地区を合せ県内3地区の確認および本調査を実施してきた。

調査に伴う費用は、事業側で負担してきたが、農民負担分について地元から不満がでていた。そのため、文化庁と農林省との協議により文化財の確認調査については、保護担当部局が負担する(協議事項 I - (4)) という合意に達した。そして本年度からは県内全域へと確認調査を拡大しつつある。

2. 確認調査の仕方

圃場整備事業の工事工程には、通年施工と秋工事、春工事がある。通年施工とは、裏作(麦、タバコ、野菜、ハウス栽培等)終了後の梅雨あけに工事発注されるもので、水稲耕作を休耕するものである。秋工事とは、水稲耕作終了をまって行なうものである。そして、春工事は水稲耕作前に、前年実施した地区の仕上げ工事である。

確認調査は、この工程の違いにより、試掘方法に充分な配慮をし、地元農家の理解が 得られるように行なう必要がある。以下その方法を記す。

	秋工事区	通年施工区
1. 試掘地点	20m 方眼状を原則とする	同 左
2. 試掘形状	2×1.5m	同左
3. 試掘深さ	当地区の遺構レベルの確認 切土厚を参考に決定	同,左
1. 試掘方法	耕土、心土を分けて掘る	必要なし

5. 天	候	雨天、その翌日は避けた方 がよい	作業にきたさないなら決行
6. 埋	戻	心土以下は30cm厚で埋め振動コンパクターランマー、 人カタコ等を用いて充分に 転圧をする。	別になし

秋工事区の確認調査では、埋戻に充分な配慮を要する。これは、試掘調査により耕盤が破砕されたり、地下水位より深く掘る為、湧水を伴なったりする。その場合、安易に埋戻を行なうと、地盤が軟弱となり、耕耘に際して農業機械が試掘個所に落込むことになる。埋戻には、以上の点を考慮して、転圧により耕盤をつくりなおさねばならない。

次に圃場整備事業には、「表土扱」を行なう地区と行なわない地区とがある。表土扱とは整地工事によって、耕作土が15cmを保つことができない場合行なうもので、表土を集めておいてそれ以下を整地する方法である。表土扱をしない地区とは、おおむね国鉄長崎本線を境にそれより下の地区である。そこでは、水路敷以外には埋蔵文化財の破壊は生ぜず、線的作業の調査で済む。しかし、それ以北から山麓までは、水田間の落差が顕著となり、表土扱が必要となる。この場合、切土部に存在する遺構は面的に破壊をうけ、盛土部に遺構が残るものの、遺跡の性格を知ることは困難になる。そのため、表土扱を行なう地区は、切土高に至る迄の遺構の有無を事業が行なわれる前に全面的に確認調査を行ない、保護処置について事業担当側と協議をしなければならない。本年度実施した地区で佐賀東部の三田川、神埼、三養基西部、三根西では水路敷の調査を行ない、その他は、地区全面にわたる調査であった。

3. 調査の原則

確認調查

圃場整備事業年次計画に対応して行なう。

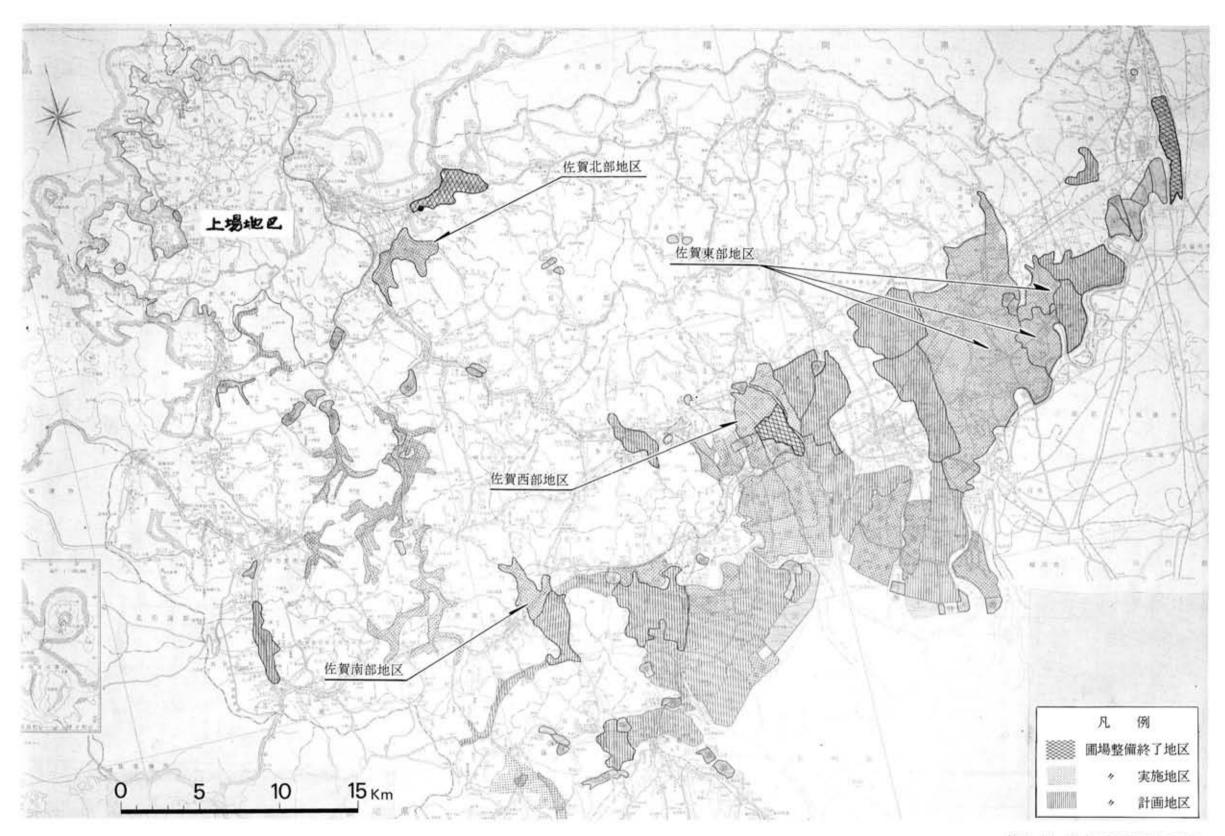
設計協議

事業地区内で確認された遺跡について、調査方法、保存方法、工事方法等、事 前に検討する。

本格発掘調査

工事上やむなく破壊される遺跡に対しては、事業の進行に支障なく発掘調査を 行なう。

費用負担については、文化庁一農林省の協議事項により、確認調査費を県教育委員会 直営事業費(国庫を)として計上している。本年度確認調査費として、1,800万計上し ている。



第 1 図 県内圃場整備地区全図

4. 発掘調査団

農業構造基盤――圃場整備事業に係る埋蔵文化財の発掘調査は、佐賀県教育委員会が 担当し、事務局を文化課において実施された。発掘調査団は次のとおり編成された。

調 查 主 任 木下 巧 県教委文化課文化財調査係

調 査 員 服部 二朗

〃 原田 保則 〃 嘱託

調査補助員 森 繁晴

協 力 農地林務部農地整備課・各農林事務所・市町村教育委員会・各土地改

良区事務所



1	戦場が谷遺跡	(14)	荒堅目貝塚	27	切通襲棺遺跡	(40)	帯限山神籠石
(2)	岩田弥生遺跡	(15)	杏の木貝塚	28)	上地 。	(41)	天神尾古墳群
(3)	櫟の木遺跡	06	高志神社貝塚	29	西寒水 〃	(42)	猿岳。
4	四本黒木遺跡(甕棺)	07	詫田西分貝塚	30	姫方遺跡	(43)	伊勢塚
(5)	二子遺跡(甕棺)	08)	上地貝塚	(31)	姫方原 >	44)	下三津西前方後円墳
6	八子甕棺遺跡	(19)	下神代貝塚	(32)	米多貝塚	(45)	目達原古墳群
7	上黒井貝塚	20	下藤貝塚	(33)	南里ケ里貝塚	(46)	山田古墳群
(8)	西大石貝塚	21)	三津永田遺跡	(34)	神輿塚貝塚	(47)	姬方前方後円墳
9	東大石貝塚	(22)	西石動溶范出土遺跡	35)	本分貝塚	(48)	姉川城址
00	姉 貝 塚	(23)	西石動弥生遺跡	36	かけ塚貝塚	49	辛上廃寺
(11)	費別当神社弥生遺跡	(24)	横田弥生遺跡	(37)	石井貝塚	(50)	塔の塚廃寺
(12)	下直鳥貝塚	(25)	吉野ケ里丘陵遺跡	(38)	持丸1号貝塚	(51)	東部工業団地内遺跡
(13)	柴尾弥生遺跡	(26)	二本黒木貝塚	(39)	* 2号 *		

Ⅱ 佐賀東部地区

1. 佐賀東部地区

育振山地を源とする、寒水川、田手川、城原川の主要三河川の浸蝕による三神段丘の うち、高位段丘は佐賀平坦部に長く尾根状にのび、その中、低位段丘面は広くなり、そ の南縁は、標高 5 m 付近であるが、沖積世の海進海退によりその境は不明瞭となってい る。

山麓、段丘部には、縄文時代から歴史時代に渡り数多くの遺跡が知られている。とり わけ上峰村の屋形原から坊所へかけてのびる最も大きな段丘には、二塚山遺跡、旧陸軍 飛行場整地時に消滅した6基の前方後円墳を含む目達原古墳群があり、この地一帯が弥 生時代から古墳時代にかけて文化の一大中心地であったことを示す。また、これらの段 丘縁辺部は、現在水田として利用されているが、丘陵に比べて遺跡の所在が判明してお らず、今後の調査が期待される。

なお、平坦部には、北茂安町から佐賀市へかけて、弥生時代の貝塚が帯状に埋蔵されている。これは、当時の海岸線の状況、漁捞摺俗を知るうえで重要な遺跡である。そして、佐賀平野開発を物語る、神埼を中心とした条理制遺構や、中世の荘園、近世のクリークや農業諸施設も見逃してはならない遺跡である。

2. 三田川地区

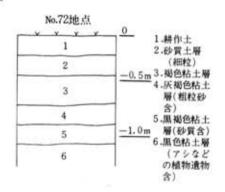
所在地 神埼郡三田川町大字田手字力田

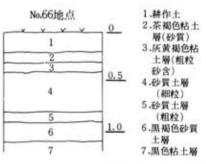
面 積 41ha

試掘数 73ケ所 (水路敷のみ)

期 間 昭和51年5月10日~18日

田手川左岸標高8mの三角洲性低地にある。当地区は各水田間の差はほとんどないため、水路予定線について、確認調査を行なった。その結果、右図に代表されるように耕作土下の状況は、砂層と粘土層が入り混り、160cm以下は、黒色粘土の厚い堆積層が存在している。この層中には、アシのような、湿原状態を示す植物遺物が存在していた。他の層における遺物の包含は認められなかった。なお、現況地形からは、当地区に条理制がしかれていたことを示すような地割が残存しているが、明確にはできなかった。





第3図 土層図(1)

3. 神埼地区

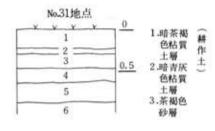
所在地 神埼郡神埼町猪面

面 積 16ha 試掘数 49ケ所

期 間 昭和51年11月24日~31日

城原川右岸の国鉄長崎本線と、県道小城〜北茂 安線にはさまれる三角形地帯で、この付近を標高 5mラインが通る。一帯は、低平で水田間の落差 がほとんどないため、水路敷だけの調査を行なっ た。調査結果は、右に代表されるような地層断面 をなし、当地は城原川の氾濫による砂層と、湿原 状態だったことを示す厚い黒泥とが堆積しており、 遺構、遺物は確認できなかった。

No. 3 地点 0 1.畸茶灰 色粘質 土聯 3 2.暗香灰 0.5 色粘質 4 土廢 3.茶灰色 5 砂質土 4.赔茶机 色粘土 5.里色粘 十級



第4図 土層図(2)

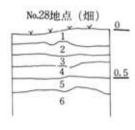
4. 東脊振地区

所在地 東脊振村三津庄尾分

面 積 3 ha 試掘数 66ケ所

期 間 昭和51年11月15日~25日

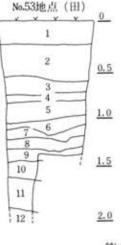
神埼町志波屋から三田川町吉野ケ里へとのびる 段丘の東側に小規模の段丘がある。田手川の支流 西光寺川によるものであり、三神段丘の中位に属 し、水田と樹園地に利用されている。工事の対象 となったのは、西光寺川右岸ぞい標高25m~30m にわたる狭小な水田地帯である。吉野ケ里へと続 く丘陵の随所には、弥生から古墳時代にかけての 墳墓を主体とした多くの遺跡が在り、当地区内に おいて遺跡の存在が予想された。調査の結果、砂 質土と粘質土とが互層をなしており、遺物の包含 層や遺構の所在は確認できなかった。しかし、西 側のさらに高い段丘の樹園地内には、甕棺が埋蔵 されている。



1. 淡橙色土屬 (耕作土) 2. 腻色土屬 3. 暗褐色粘質 土屬

4.淡青灰色砂 質土層 5.茶褐色土層

6.暗茶灰色 砂質土層



1.暗青灰色粘 土層(耕作

土) 2.暗茶灰色土 屬 3.茶灰色土屬

4.淡黄土色砂 屬 5.灰茶色砂質

6.暗青灰色砂 屬 7.白茶色砂層

土屬

8.黑褐色粘土 層 9.黄灰色砂層 10.黑色粘土層

11.暗緑灰色砂 層 12.黒色粘土層

第5図 土層図(3)

5. 三養基西部地区

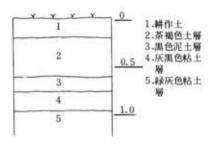
所在地 三養基郡上峰村野間口

面 積 25ha

試掘数 43ケ所

期 間 昭和51年5月31日~6月5日

三根西市武地区と隣接しており、地区内の水路 敷部分について実施した。その結果、黒色系の粘 土層及びその下部に緑灰色の粘土層が堆積してい た。遺構、遺物の所在は確認できなかった。



第6図 土層図(4)

6. 三根西地区

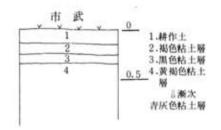
所在地 三養基郡三根町大坂間及び市武

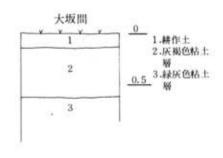
面 積 市武12ha 大坂間13ha

試掘数 77ケ所 (水路敷)

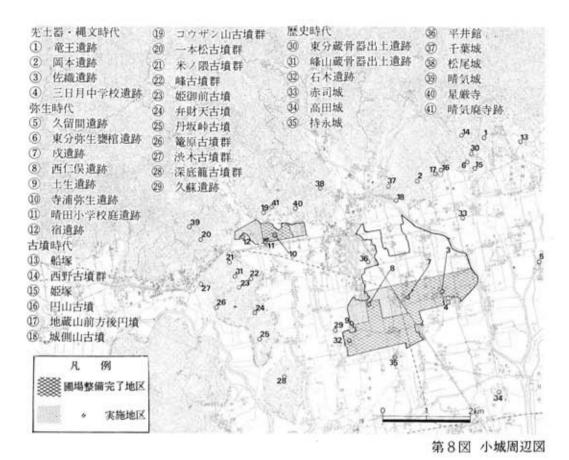
期 間 昭和51年1月13日~18日

本年度より着工される地区で、三根町の西半分536haを対象としている。当地区には、クリークが縦横にめぐらされており、計画水路は、その統廃合を意図し、幹線水路は、貯水池的役割をもつため幅10mをこす。三根町には貝塚線が知られているが、未だ明確ではない。本年実施した地区では右のような土層を示し、貝塚その他の遺構は確認しえなかった。





第7回 土層図(5)



Ⅲ 佐賀西部地区

1. 晴田南部地区

所在地 小城郡小城町畑田鷺ノ原、寺浦、宿

面 積 20ha

試掘数 385ケ所

期 間 昭和51年4月12日~5月14日 12月12日~1月20日

佐賀平野の西北部に位置する当地区は、脊振山地の秀峰天山(標高 1,046m)から流下する晴気川がつくる扇状地の扇頂部であり、標高20m~40mに展開する、狭小な水田地帯である。昭和50年度から当地区41haを対象に小城町営圃場整備事業が実施されている。この地区内には、晴田小学校校庭遺跡、宿遺跡の弥生時代墓地が営なまれ、周辺には、山麓部の古墳群、寺浦廃寺跡が知られている。50年度実施地区では、晴田小学校校庭遺跡の北限と、寺浦廃寺下一帯の弥生住居趾を確認した。本年度は、寺浦東の鷺ノ原地区と晴気川両岸、計20haが実施されることになり、確認調査の結果、晴田小学校校庭遺跡の西北端部が確認された。

N 佐賀南部地区

1. 武雄地区

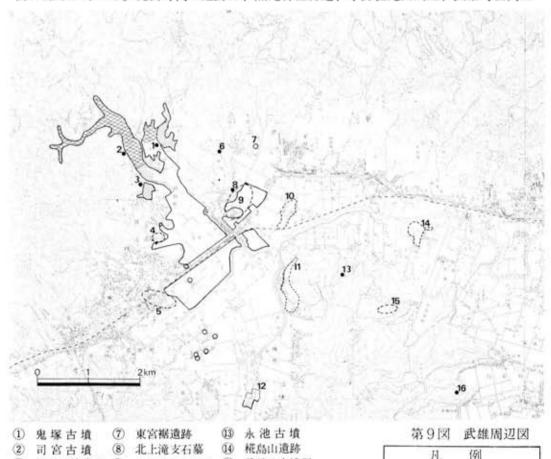
所在地 武雄市朝日町大字中野字黒尾、中期、川上

面積 22ha

339ケ所 試掘数

期間 昭和51年6月7日~14日 7月6日~14日 26日~28日 10月25日~11月8日

八幡岳山系の徳蓮岳 (444m)、黒尾山 (264m)、柏岳 (239m) を、繁昌川、 杉ノ 岳川等が流下し、武雄市朝日町中野地内で高橋川となる。これはさらに武雄川、潮見川 と合流し六角川となり、白石平野を大きく蛇行して有明海へと注ぐ。確認調査の対象と なった地域は、高橋川が、その上流の山地谷底を埋積した谷底平野であり、一部段丘も 含んでいる。当地区周辺の山麓、小丘陵には、先土器から歴史時代にわたる数多くの遺 跡が知られている。縄文時代の遺跡は、黒尾神社付近、中野笹尾山周辺、武雄町富岡の



- ③ 黒尾神社遺跡 ⑨ 上滝遺物散布地 ⑤ 勇猛山古墳群
- ④ 笹尾山遺跡 〔0〕 久津具遺跡
- (16) かぶと塚古墳

- ⑤ 祇園社遺跡
- ⑪ 鳴瀬古墳群
- ⑥ 須惠器窯跡 02 納手遺跡

圖場整備完了地区

実施地区

杉ノ岳No.171地点

1	1.耕作土
2	2.淡黄褐色土 層
3	3.明灰粘土層 4.黄褐色土層
5	5.青灰色粘土
6	6. 灰色粘土層 (礫含)

黑尾No.12地点

1	1.耕作土
2	2.黒灰色土層3.青灰色粘質
3	土層
4	一 4.礫混茶灰色 砂層

第10図 土層図(6)

祗園山一帯に分布している。弥生時代の遺跡は、朝日 ダム周辺から支石墓、甕棺内出土の細形銅剣、北方町 東官裾甕棺遺跡の巴型銅器、同町樺島山遺跡から素環 頭刀子、内行花文明光鏡等、橋町上野の粘土採土場か ら中広形銅鉾等の出土が知られている。古墳時代には、 山麓、丘陵上に多くの古墳群が造営されたが、蜜柑園 開拓によりそのほとんどが姿を消した。弥生古墳両時 代とも墳墓の所在はよく知られているが、当時の生活 跡に関しては、未だ判然としておらず丘陵縁辺、低地 にその所在が予想される。

本年度調査した杉ノ丘地区では、左図のような、黄 色系の礫を多く含んだ粘土層が広く分布している。黒 尾周辺の高橋川右岸では砂質土の堆積が著しい。両地 区とも、地表面の遺物散布は認められたが、遺構、遺 物の所在は確認できなかった。馬ノ谷地区でも杉ノ岳 地区と同様な地層であった。ここでは、一ケ所で集石 に土器の混在した遺構が確認された。(服部二朗)

2. 馬ノ谷遺跡

黒尾神社東側の段丘を利用した標高20mの狭小な水田で確認された。

遺構(第12図 図版)

約32m の水田に2本のトレンチを直交させ、遺構とその範囲 を確認した。

遺構は集石で、それに混在し た形で土器片の出土があった。

集石遺構は大小さまざまの礫が4×2m程の範囲で並び、西側より土師器壷が底部を欠損した状態で出土した。これは、現在の表土下20cmが耕作土として利用されたためかと思われる。土器片は、殆んど全てが土師器であると考えられる。

遺物 (第13図)

電形土器(第13図1 図版10)

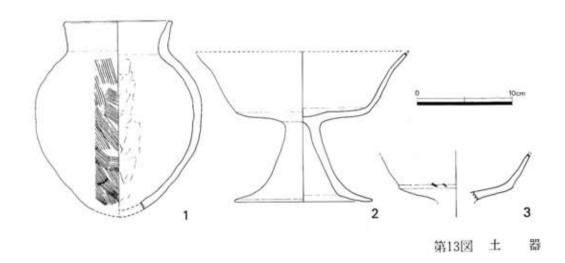




やや外反する口縁部に倒卵状の丸 底底部を有する形態である。体部 外面は刷毛目調整を行なっており 上部は粗く、下部は細い刷毛を使 用している。内面は下から上への 箆削りが施されている。胎土には 砂粒をほとんど含まず、焼成が悪 いためか非常にもろく暗褐色を茶 呈する。口径11.6cm、復原器高20.5 cm。

高坏形土器 (第13図2・3) 2 は脚と口縁部を欠損したものであ り、杯部外面中位以下は回転箆削 りしたものと思われ、刷毛目のあ

と撫調整で刷毛目を消し、内外面とも磨研されているようである。3は口縁がやや外反する形態である。脚部外面はヘラ削り、杯部内面底の部分には刷毛目が残る。胎土は赤褐色で砂粒を含まず精緻であって、赤褐色を呈する。(原田保則)



第 1 部



版

佐賀県教育庁文化課



1. 三田川カ田(田手川より)



2. 神埼猪面(国鉄高架上より)



3. 東脊振村



三養基西部(三根町境より)



5. 三根西・大坂間(切通川堤より)



6. 晴田南部



7. 武雄東部遠景(朝日小学校付近より)



8. 馬ノ谷遠景(黒尾神社より)



9. 集石遺構



10. 馬ノ谷出土土師壺

第 2 部

土生遺跡群

(小城郡三日月町)

もくじ

Ι	序	説	
		発掘調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
		土生遺跡の位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
Π		生遺跡群の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
		土生遺跡群の範囲・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
	2. ±	土生遺跡	
	(1)	住居址	
	(2)	貯蔵庫・・・・・・	
	(3)	工房址	
	(4)	小川址	
	3. ±	±生B遺跡·····	
	(1)	弥生時代の住居址・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
	(1		
	(2		
	(3		
	4	④ 井戸址	74
	(2)	弥生時代の墳墓・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
	(3)	平安時代の墳墓・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
	4. ±	t生C遺跡······	
	(1)	土壙墓	
	(2)	孤状溝墓	
	(3)	井戸址	80
	5. ±	±生第5号住居址出土木製漆器の理科学的分析	83
	(1)	解剖学的性質の特徴・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	83
	(2)	塗膜の同定・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	84
	6. 発	発掘された木材の保存処理の実際	84
Ш	結	論	87
	1. 土	上器の分類	87
	2. 土	上生遺跡の時代	89
		生活址······	
		大製品	
	5.石	5製品	91
	6. 3	ミニチュア十器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	92

挿図もくじ

第1図	土生遺跡の周辺32
第2図	土生遺跡群分布図・・・・・・36
第3図	第1号住居址出土土器実測図・・・・・38
第4図	第 1 号住居址周辺実測図・・・・・・39
第5図	第 2 号竪穴住居址 A 出土土器実測図 ·······42
第6図	第2・3・4 号住居址実測図43
第7図	第 2 号竪穴住居址 B 出土土器実測図 ·······45
第8図	第 3 号竪穴住居址出土土器実測図 ·······46
第9図	第 4 号竪穴住居址出土土器実測図 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
第10図	第 5 号竪穴住居址出土土器実測図 ······48
第11図	第5・7・8・9号址実測図
第12図	第7 · 8 号竪穴住居址Pit 11 · 12出土土器実測図 ······50
第13図	第 9 号竪穴住居址出土土器実測図51
第14図	第13·14号貯蔵庫実測図
第15図	第16号貯蔵庫実測図・・・・・・53
第16図	木製織具等実測図・・・・・・54
第17図	第15号工房址実測図・・・・・・55
第18図	第 4 号址出土三又鍬、第 9 号出土杓子実測図56
第19図	平鍬・杓子・盤実測図
第20図	工房址出土木製品実測図 (第5·15号址出土) ······58
第21図	第10号竪穴住居址・川址実測図・・・・・・59
第22図	川址出土木製品実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
第23図	第14号貯蔵穴出土木製品実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
第24図	川址断面実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
第25図	第12号竪穴住居址周辺実測図
第26図	第14 · 16号住居址実測図 · · · · 63

第27図	第18号住居址実測図64
第28図	第14号住居址出土土器実測図 ······65
第29図	第16·18号住居址出土土器実測図······66
第30図	第19号住居址実測図
第31図	第21~24号住居址及び第21~23号貯蔵庫実測図68
第32図	第16号貯蔵庫実測図70
第33図	第17~19号貯蔵庫実測図71
第34図	第16~20号貯蔵庫出土土器実測図72
第35図	第21~24号住居址・貯蔵庫出土土器実測図 73
第36図	柱址実測図73
第37図	井戸址実測図74
第38図	石製品実測図75
第39図	大形土壙墓実測図・・・・・・・・・・ 76
第40図	壺形土器実測図・・・・・・・77
第41図	平安時代の墳墓址実測図78
第42図	平安時代墳墓址出土土器実測図79
第43図	土弾・紡垂車・ミニチュア土器等実測図79
第44図	井戸址実測図80
第45図	土生C遺跡実測図(Ⅰ・Ⅱ)······81
第46図	孤状溝墓実測図・・・・・・81
第47図	赤外吸収スペクトル曲線84
第48図	土生遺跡出土木製鐵類宝測図(第1・2次調査分)

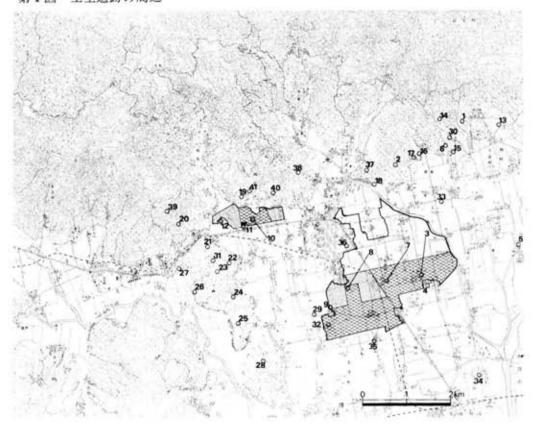
図 版 目 次

1.	土生遺跡から天山を望む95
2.	土生遺跡の遠景(天山より)95
3.	第 1 号住居址 · · · · · · 96
4.	第 1 号住居址土器出土状況 (東南隅)96
5.	第 1 号住居址出土土器97
6.	第 2 号住居址98
7.	第 2 号住居址 B 室炉址の状況・・・・・・・98
8.	第 2 号住居址出土土器99
9.	第 3 号住居址 · · · · · · 100
10.	第 3 号住居址土器出土状況
11.	第 3 号住居址出土土器
12.	第 4 号住居址 102
13.	第 4 号住居址土器出土状況102
14.	第 4 号住居址出土土器103
15.	第 5 号住居址 · · · · · · · 103
16.	第 5 号住居址 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
17.	黒漆高坏出土状況(木製) 104
18.	第 9 号住居址105
19.	第 9 号住居址土器出土状況105
20.	土器の出土状況 (第9号址)106
21.	第 9 号住居址出土の土器・・・・・・106
22.	第10号住居址
23.	第5号址出土の鍬と第9号址出土三又鍬・第9号址出土杓子 107
24.	第13・14号貯蔵庫・・・・・ 108
25.	第13号貯蔵庫の鍬の出土状況と鍬・・・・・ 108
26.	第14号貯蔵庫・・・・・・・・・109

27.	第14号貯蔵庫盤、柱出土状況	109
28.	第14号貯蔵庫出土木製盤・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	110
29.	第14号貯蔵庫出土木製杓子	110
30.	第14号貯蔵庫出土木の葉	110
31.	第16号貯蔵庫・・・・・	111
32.	第16号址木製織具出土状況 ·····	111
33.	第16号址遺物出土状況 ······	112
34.	第16号址織具の出土状況と織具・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	112
35.	第15号工房址·····	113
36.	第15号工房址出土木製槌・鍬・剣	113
37.	小川址と楽器形木製品の出土状況	114
38.	楽器形木製品	115
39.	祭祀遺物(小川址出土)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	115
40.	土弾 (第2号址出土)	115
41.	滑石製石環	115
42.	第12号住居址·····	116
43.	第19号住居址	116
44.	第22号住居址	117
45.	礎板の状態・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	117
46.	第16号住居址出土土器······	118
47.	第18号住居址出土土器	118
48.	第16号貯蔵庫出土土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	118
49.	第17号貯蔵庫出土土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	119
50.	第18号貯蔵庫出土土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	119
51.	第20号貯蔵庫出土土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	119
52.	第22~24号住居址・第22号貯蔵庫の状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	120
53.	組み合せ式牛角把手の出土状況	120
54	組み合せ才生免却手	121

55.	器台形土器	121
56.	石庖丁出土状況	122
57.	紡錘車・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	123
58.	柱 址	123
59.	井戸址	124
60.	井戸址内出土砥石他	124
61.	第14号貯蔵庫	125
62.	第14号貯蔵庫出土鋤・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	125
63.	EW-2T 大形土拡墓	126
64.	合口甕棺	126
65.	Pit 1址	127
66.	Pit 3 址土器出土状況	127
67.	Pit 3 址出土土器······	128
68.	Pit 1址出土土器······	128
69.	Pit 1址出土土器······	128
70.	Pit 2 址出土土器······	128
71.	EW-3T 大形土拡蟇	129
72.	土拡内土器出土状況	129
73.	高杯木材写真(第5号住居址出土)	130

第1図 土生遺跡の周辺



先土器・縄文時代

- ① 竜王遺跡
- ② 岡本遺跡
- ③ 佐織遺跡
- ④ 三日月中学校遺跡

弥生時代

- ⑤ 久留間遺跡
- ⑥ 東分弥生甕棺遺跡
- ⑦ 戍遺跡
- ⑧ 西仁俣遺跡
- ⑨ 土生遺跡
- ① 寺浦弥生遺跡
- ① 晴田小学校庭遺跡
- (12) 宿遺跡

古墳時代

- 03 船塚
- 西野古墳群 040
- 05 姫塚
- 06 円山古墳
- ① 地蔵山前方後円墳
- (18) 城側山古墳
- 19 コウザン山古墳群
- 20 一本松古墳群
- ② 米ノ限古墳群
- 22 峰古墳群
- 23 姫御前古墳 24 弁財天古墳
- 25 丹坂岭古墳
- 26 篭原古墳群
- 20 渋木古墳群
- 28 深底籬古墳群
- 29 久蘇遺跡

歷史時代

- 30 東分蔵骨器出土遺跡
- ③ 蜂山藏骨器出土遺跡
- 32 石木遺跡
- 33 赤司城
- 34 高田城
- 35) 持永城
- 36 平井館
- 37) 千葉城
- 38 松尾城
- 39 晴気城
- 40 星厳寺
- ④ 晴気廃寺跡

I 序 説

1. 調査の経過

三日月北部圃場整備事業は数年前から実施され、農業の近代化が推進されつつある。 これに伴なって埋蔵文化財の保護の見地から昭和49年度には石木遺跡、50年度には戊遺 跡などの発掘調査が実施されてきた。本年度も引続いて遺跡の確認のための発掘調査を 実施したものである。

(1) 発掘調査団

この遺跡の発掘調査は、佐賀県教育委員会が担当し、事務局を文化課において実施された。発掘調査団は次のとおり編成された。

調査主任 木下 巧 県教委文化課文化財調査係

調 査 員 服部 二朗 "

原田 保則 《 嘱託

調査補助 森 繁晴 "

調查助言 木下 之治 県文化財保護審議会委員

協 カ 三日月町土生・仁俣・石木および甲柳などの地元の有志・三日月町・松 尾建設・福元建設などの協力を得た。

(2) 発掘調査の経過

第 1 次調査を 7 月 1 日から10月30日まで実施し、第 2 次調査を翌年 1 月20日から 2 月 20日まで実施した。第 1 次調査は土生地区の遺跡分布の状態とその実態を究明することに主眼をおいて、20m 方眼のグリット(1 ケ所 2 m × 1.5 m)と、幅 6 ~ 10 m のトレンチ方式を併用して調査に当った。第 2 次調査はそれの補足調査を実施したものである。

この結果、国指定史跡である土生遺跡の北方に土生遺跡の延長と考えられる遺構、およびその北方に隣接して広大な集落址・墳墓址および平安時代の遺構を確認した。そこで、前者を土生遺跡とし、後者を土生B遺跡と呼称することにした。これらの遺跡から鋤・鍬などの農耕生産用具、槌・織具などの製品加工用具、竪杵などの食品加工用具、盤・高杯などの食膳用具などの注目すべき木製品の豊富な出土をみた。また小川址から手捏になるミニチュア土器が出土したことは原始農耕社会における祭祀の在り方を承唆する資料として貴重なものであろうと考えられる。

また、弥生式土器に混って無文土器・黒色研磨土器などの朝鮮系土器が出土したが、 これらは県内では初めて発見されたものであり、当時の日鮮の文化交流を思考する上で 貴重な存在となろう。

土生遺跡の東約100mの地点で発見された遺跡を、土生C遺跡と呼ぶことにしたが、 ここには弥生時代の遺構が存在する。この遺跡は上面削平がはなはだしくその全貌を明 らかにすることはできなかったが、孤状溝墓遺構が発見されたことは注目される。

2. 土生遺跡の位置と環境

(1) 地理的環境

三日月町は佐賀平野の西部に位置し、行政区画上では小城郡に属していて、東は佐賀郡大和町に、西は小城郡小城町に境を接している。

当町の北部は天山山系の南麓を形成し、天山(標高1046m)から流下する祇園川が平野部の北西部から南東に向かって流れ、嘉瀬川に合流しているが、過去においてその河道はいくどとなく西流、東流と河道を変えていることは、航空写真による観察によっても明らかである。

県下屈指の穀倉地帯である三日月平野は祇園川の堆積作用によって形成された沖積平 野であり、小城町の馬場を扇頂として、東南方約3kmにおよぶゆるやかな傾斜をもつ扇 状地を形成しているのである。

天山から岩蔵谷を流下するこの祇園川の水資源は、三日月町の農業にとって原始時代から欠くべからざるものであり、これが現代の三日月農業を支え育んできたと言っても 過言ではない。

土生遺跡群はこの扇端近くの西部にあって、標高7m~10mの間に位置している。

(2) 歷史的環境

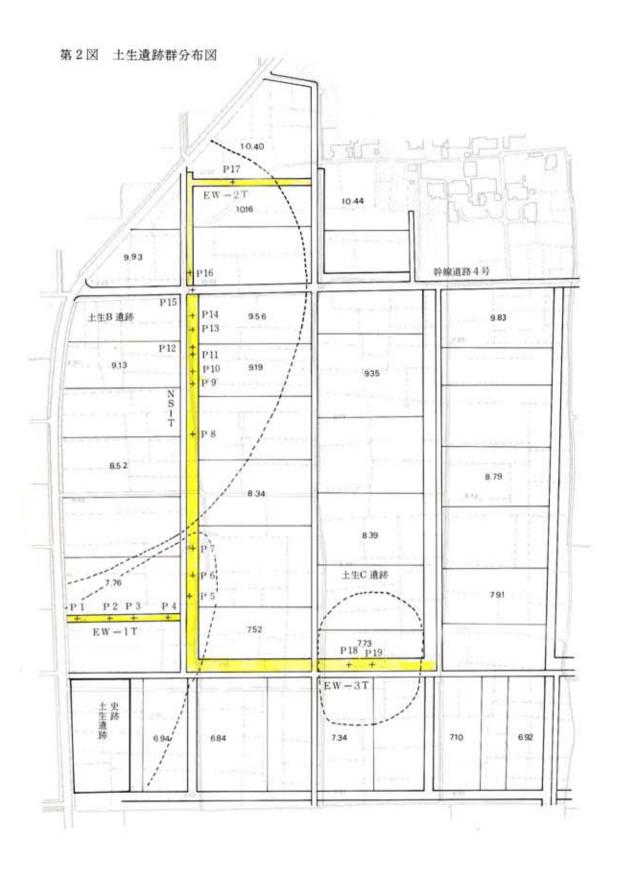
三日月町に人々の生活が展開されるようになるのは数万年も以前であって、東分下古賀・大塚山あるいは岡本先土器遺跡に始まると考えられている。縄文時代晩期には竜王遺跡・三日月中学校遺跡・佐織遺跡などが知られているにすぎない。弥生時代になると遺跡は急激に増加する現象がみられるのであって、土生遺跡をはじめ西仁俣遺跡・寺浦弥生遺跡・久留間遺跡・戊(つちのえ) B遺跡・東分弥生甕棺遺跡・玉竜寺裏弥生遺跡・吉田弥生遺跡・晴田小学校庭弥生遺跡・宿遺跡および秋葉神社境内遺跡などの群集墓が形成されており、この地域に広く稲作農業が普及していたことを物語っている。

古墳時代前期には戊遺跡の方形周構墓が営まれる一方、久蘇遺跡の生活址が展開されるのに続いて、船塚(県史跡前方後円墳)・姫塚(県史跡前方後円墳)・円山古墳(円墳)・地蔵山前方後円墳および宮戸前方後円墳などの単独墳が5世紀後半ごろから山麓部に築造されるようになる。つづいて、コウザン山古墳・丹坂峠古墳・姫御前古墳などを経て、男女山古墳群・西野古墳群が大和町境に、小城町西部の笠頭山から南に延びる峰山山系に一本松古墳群・米の隈古墳群・峰古墳群・鏡山古墳群・坂井山古墳群・山崎山古墳群と続き牛尾山の深底籠古墳群などの群集墓が形成されており、この地域における原始農耕村落の定着を示現している。

しかし、8世紀に入るとその遺跡は姿を消し、中世までの間考古学的には空白時代を 呈する。この間肥前風土記に「小城郡」が登上し、和名抄には「小城郡饗調(美加都岐) あり、名義は上古に土師部住て甕を造りて御調に奉りしなどにて負せたるべし」と記さ れ、10世紀前葉にいたる三日月町の片鱗を知ることができるのであるが、延喜式には肥 前国から焼物を調納した記録はなく「甕を造りて御調に奉り」と言う饗調の地名起源が 何に根拠をおくものか明らかでない。

ともあれ、古墳時代にはすでに農耕集落の原形が基本的に成立しており、それを基盤 として条里制が施行され、農耕集落がほぼ完成されたと言えるであろう。

- ① 七田忠志「原始時代」佐賀県史 昭和43年9月
- ② 志佐輝彦「竜王縄文遺跡調査概報」 教育佐賀 昭和33年12月
- ③ 「佐賀県の遺跡」佐賀県文化財調査報告書第13集 昭和39年3月
- ④ 高島忠平「三日月町佐織夜臼式土器」 新郷土第319号 昭和50年10月
- ⑤ 木下之治・木下巧他「土生・久蘇遺跡」佐賀県文化財調査報告書第25集 昭和48年3月
- ⑥ 松尾禎作・七田忠志「久留間遺跡調査概報」佐賀県史跡名勝天然記念物調査報告 第10集 昭和26年3月
- ⑦ 木下巧「戊遺跡」佐賀県文化財調査報告書第36集 昭和51年3月
- 图 木下巧「原始時代」小城町史所収 昭和49年3月
- ⑤ 吉村茂三郎「宮戸古墳」佐賀県史跡名勝天然記念物調査報告第8集
- ⑩ 木下巧「丹坂峠古墳の調査」 小城の歴史 第14号 昭和48年3月
- ① 木下巧「一本松古墳群」小城町史料 第1号 昭和45年3月 「一本松古墳群調査概報」小城町史料 第4号 昭和46年3月
- ⑫ 木下巧 「古墳時代」小城町史所収 昭和49年3月



Ⅱ 土生遺跡群の遺構と遺物

1. 土生遺跡群の範囲

(1) 土生遺跡

グリット探査およびEW-Iトレンチ(幅 6 m)調査において、土生遺跡は、国指定 史跡土生遺跡の北方約100m 附近がこの遺跡の北限と推定され、約50,000㎡ の範囲をもつ 集落址と考えられる。この史跡に指定された土生遺跡は、この広大なひろがりを持つ土 生遺跡のごく一部分にすぎない。

(2) 土生B遺跡

土生遺跡に北接して土生B遺跡が存在する。この遺跡は土生遺跡と同一時代であり、 規模も相類似した大集落址と考えられる。この遺跡の北限は土生神社南附近、東限は県 道小城牛津線より東200m、西はこの県道より西に広がるものと推定される。(県道西 の圃場は昭和44年鉱害復旧事業が実施されているが、その際削平され消滅しているもの と考えられる。)

(3) 土生C遺跡

指定史跡「土生遺跡」の東方約100m 地点に土生 C 遺跡が存在する。 この遺跡は東西 約100m、南北約100m の範囲にひろがっている弥生時代中期の生活址と墳墓ではないか と推定される。

2. 土生遺跡

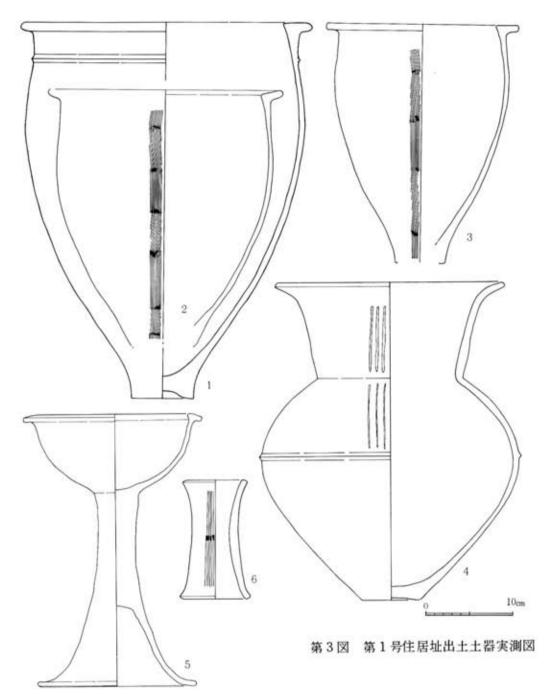
国指定「土生遺跡」の北方50m 地点に、県道から東へ幅 6 m・長さ約100m のトレンチ (EW-1T) を、また県道から東約100m 地点に南北に通ずる排水路に沿って、幅 $10\,\mathrm{m}\cdot$ 長さ約400m のトレンチ (NS-1T) を設定して調査した結果、EW-1Tと NS-1TA区が土生遺跡の範囲であろうと推察された。 (第2図参照)

この2つのトレンチ探査の結果竪穴住居址と推定されるものが10棟、竪穴を伴う貯蔵 庫と考えられる食料・用具・用材等の収納庫の類が6棟、竪穴住居址のプランは確認で きないが柱穴および柱跡が数箇所確認されたのである。

(1) 住居址

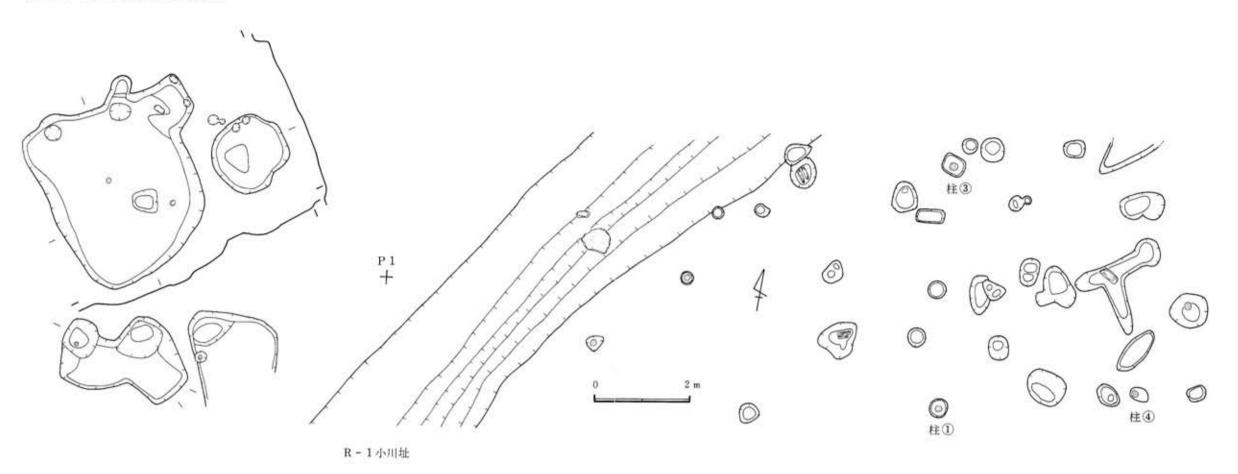
第1号竪穴住居址(第4図)

EW-IT の西端近くに東北から南西に流れるR-1 小川址(幅2.5m)があって、その西に接するようにして第1号住居址があり、その東側に貯蔵庫1棟を附設している。 (この住居址の東側に在る2棟の貯蔵庫と推察されるものは第1号住居址に附設するも



のかどうかは現時点では不明である。)第1号住居址は不整隅丸方形を呈し、長径 $3.6\,$ m、短径 $3\,$ mを測り、東北隅に南北 $1\,$ m、東西 $0.5\,$ mの造り出しがあるがその形は不整形である。竪穴の床面はゆるやかな船底状を呈し、やや南よりの中央部が最も低くなり、その位置にほぼ方形の炉址がきられている。炉の東方 $30\,$ cmと北西 $50\,$ cmに径 $10\,$ cmの柱址があって、いづれも床面を掘り下げることなく立てられているが、北壁に接して存在する $2\,$ 個のピットは柱穴であろうと考えられる。東に隣接する貯蔵庫は径 $1.5\,$ mの不整円形であって浅い船底状を呈する床面である。

第4図 第1号住居址周辺実測図



第1号住居址からは小形甕形土器を主体とし、広口壷・高坏および器台形土器が出土 した。(第3図)

変形土器① 「L字形」の口縁部をもち、やや上位に最大胴部がある上げ底の土器である。胎土に砂粒を含み、焼成も良く黄褐色を呈する。口縁下から底部までの全面に、荒い縦位の刷毛目を施した後、口縁部の内外とも横撫で調整し、更に口縁下4cmに断面 △帯を張り横に撫で附着させている。口縁径33.5cm・高43cm。

響形土器③ 「L字形」の口縁部をもち、①に似た器形である。胎土に花崗岩質の砂粒を含み、焼成も良好である。表面は煤で覆われ、底部はやや赤味を帯びている。土器の外面は刷毛を上から下へ向けて調整しているが、底部の近くは下から上へ刷毛を使っている。また、口縁部の内側から外側の口縁下3cmにかけては横撫で器体を調整しており、刷毛目の上部を撫消している。凸帯はない。口縁径22.2cm・高27.5cm。

壷形土器④ ラッパ状に開く広口、そして球状に張った胴部をもつ土器である。全体的に黒褐色を呈するが、胴部に黒色斑を有する。良く精選された胎土であって微粒砂を少量含み、焼成も良好である。口縁内部は横位の箆調整の後、口縁端部を横撫でして仕上げている。口縁外部は横撫と箆調整が繰返された後、幅3~4mm程度の箆痕を1cm間隔で縦位3条1組で4ケ所に施紋している。下腹部から肩部にかけては横位の箆調整が丹念になされているが、下部は荒いタッチの縦位の箆調整に終止している。器体の調整が終了した後、箆による施文と△帯を附して仕上げている。即ち箆による施紋は広口部と肩部にある。広口部の施紋は幅3~4mmの箆痕を1cm間隔で縦位に3条1組で施し、4ケ所に附している。また肩部から腹部にかけての条痕は幅1mm・長さ8cmを測り縦位に3条1組で4ケ所に施されている。△帯は最大胴部に在って横位に撫こするようにして附着させている。口縁径26.5cm・高36.3cm。

高坏形土器⑤ 「T字状」に近い口縁部と半球状の深い杯部、しかもこの杯部に相対するラッパ状の長い脚をもつ高坏形土器である。精緻な胎土で焼成も良く茶褐色を呈するが、一部に赤褐色と黒褐色の斑点が見られる。杯部の外面は横位の箆による調整、内面は横撫で調整している。脚部の外面は縦位の箆調整、内面は横撫によって仕上げをなしている。口縁径20.6cm高31.1cm。

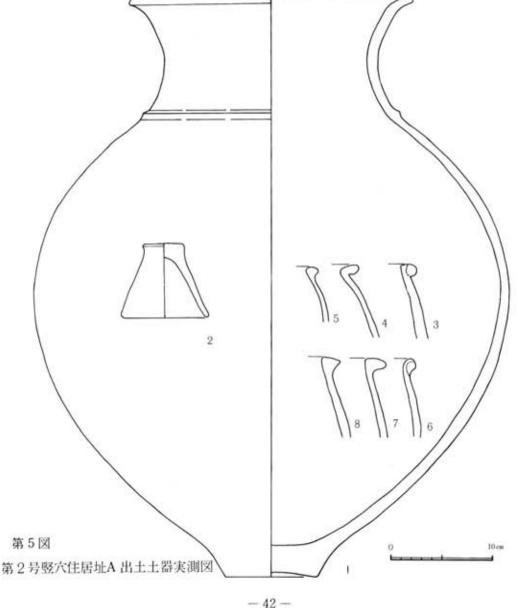
第2号竪穴住居址(第6図)

第2号住居址は、第1号住居址の東方約30m 地点に在る。この住居址は上面の長辺(東西)6.75m・短辺(南北)3.15m の卵形プランをもつ竪穴(A室)と、その南側に接して長径4.35m・短径2mの不整隅丸方形をとるプランの竪穴(B室)、およびこの両者の西側に接して長辺(南北)4m・最大短辺(東西)1.8mの不整形竪穴(C・D室)の3者が組み合わされて1つの棟を形成するものと考えられる。A室とB室の接合点には高さ10cm程度の仕切があり、その仕切上に2本の柱が建てられたものと考えられ、その内の1本は直径12cmの自然木である。この竪穴住居址のB室中央には、上面長辺1m・底面長辺80cm・上面短辺75cm・底面短辺50cmを測る隅丸方形のプランをもち、深さ20cmの炉址と推定されるものがある。C・D室は径2m前後の室であって、用材や桃実な

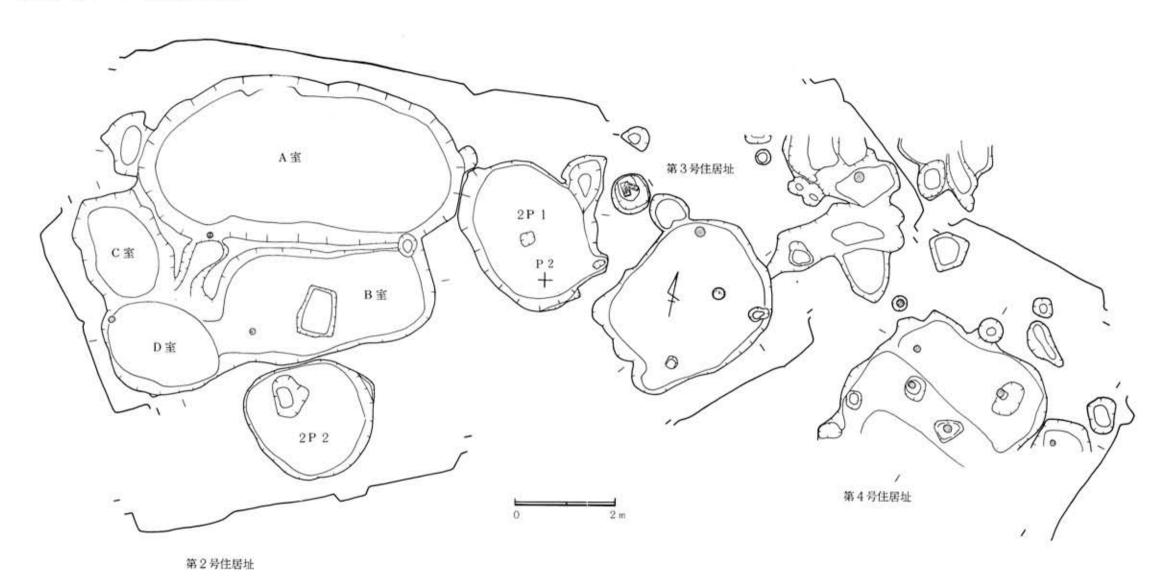
どが出土している点から、食料などの貯蔵庫的機能を果たした建物であろうと推察され る。また、各室とも底面には木の葉が一面に敷きつめられていた。

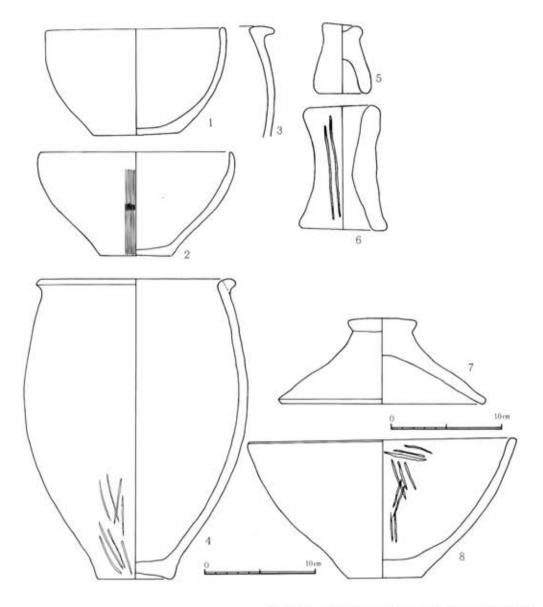
A室の東に接する長径3mの楕円形プランの2P1竪穴はこの住居に附設する遺構で あり、屋外の収蔵庫と考えられる。2B室の南に接する2P2竪穴遺構は後代のもので ある。この住居址からは、甕形土器・壷・器台形土器および無文の甕・黒色研磨高坏形 土器などが出土した。

・電形土器(1) (第5図) や、上げ底の底部と球状の胴部、そして頸部からゆる やかに外反しながら口縁端部は更にそのカーブを強め外方に開く広口の口縁部をもって いる壷形土器である。精選された粘土に花崗岩質砂粒が混入する胎土であって、焼成も 良く竪緻であり、全体的に暗褐色を呈するが、所々に黒褐色の斑点がある。器体の外側



第6図 第2・3・4号住居址実測図



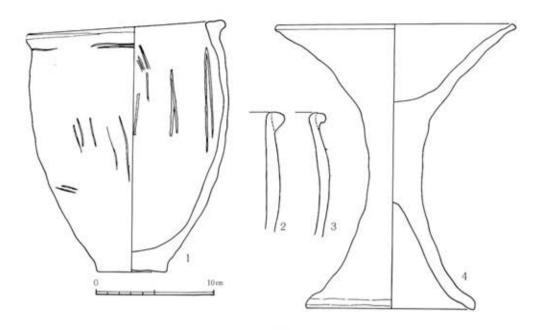


第7図 第2号竪穴住居址B出土土器実測図

は全面に撫による研磨の跡が認められ、口縁端の内外面は横撫による調整が施されている。この調整が終了した時点で頸部に薄い△帯を撫附け装飾化している。高56.3cm。

無文土器③ 甕形土器の破片である。砂混りの胎土で黄褐色を呈する。口縁外部に 直径1cmの粘土紐をまき、口縁上端部が粘土紐を覆うように指圧したあと、横撫で簡単 に調整して口縁部を造っている。その為口縁部の内外とも凹凸痕が見られる。

黒色研磨土器② 胎土は極めて上質であり、焼成も極上であって黒色を呈する器台 形土器である。器体の全面は撫による研磨がなされており、手捏かとも考えられる。



第8図 第3号竪穴住居址出土土器実測図

無文土器系土器(5)⑥ 黒褐色に近い肌色を呈する甕形土器である。口縁外部に粘土 紐をまき、器体の上部を紐に覆いかぶせる手法は無文土器のそれと同様である。しかし、 接着された口縁上部、側面は横撫により比較的良く調整されているが、紐の下面を指で 強く押し上げた指圧痕を残したまま焼成されているところが前者と異なるところである。

襲形土器® 褐色を呈する襲形土器の破片である。口縁部は外方に向って鋭く突き刺さるような三角形の断面を呈している。器体外面は粗い刷毛目を斜めに交錯させた後、口縁部を横なでで調整している。

要形土器④ (第7図) 砂を少量含む精選された胎土で、黄褐色を呈する襲形土器である。粘土紐を口縁部に指圧で張りつけたあと内外を横撫で調整しているが、口縁の外側下面には指圧痕がいくらか残っている。全体的に調整は悪く、下腹部から底部にかけては丸形箆で削った条痕が斜位に施されている。無文系土器であろう。口縁径18.1 cm・高26.7cm。

蓋形土器⑦ 砂混りの胎土で焼成は良好である。褐色を呈する無文土器の蓋形土器 である。器体の整形が不良であって凹凸がみられるが、内外とも横撫で調整はなされて いる。口縁径19.3cm。

黒色研磨土器® 胎土も良く砂を少量含ませたもので焼成も良好な鉢形土器である。 輪積みによる成形であり、器体は内外とも箆による研磨が施されている。口縁径24.3cm ・高12.5cm。

第3号竪穴住居址(第6図)

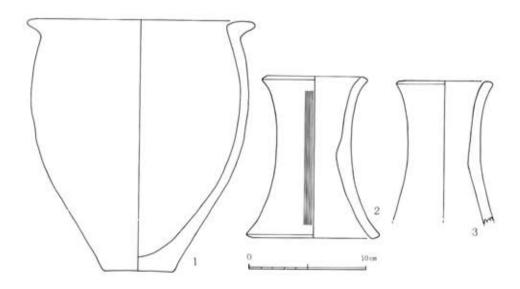
第3号竪穴住居址は第2号竪穴住居址の東側に位置する。住居址は長径(東北辺) 3.2 m・短径 2.8mの隅丸方形に近い不整形のプランである。床面には木の葉を敷きつめているが、南西側が高く東北側が低くなっており約30cmの落差がある。また、床面の北隅に1本、中央や、北東よりに径10cmの柱が残されている。

無文土器① (第8図) 胎土には砂粒が含まれ焼成や、劣る感じで、茶灰色を呈する饕形土器である。整形が充分でなく器体は凹凸が著しい。器体の内外を簡単に撫調整をした後、口縁部は横撫・器体の内外には篦状用具で無雑作に引搔いた様な条痕が縦に附されている。口縁径17cm・高20.8cm

無文土器④ 黒色を呈する高坏形土器である。砂粒混りの胎土であって焼成は良好である。この高坏形土器の坏部は三角形状に上に開くもので、これを脚部と見ても一見不思議ではない。ユニークなタイプの器形である。器体は整形時の調整が充分でなく凹凸がはげしい。坏内部の底部は交錯する箆目、側面は横位の箆磨き、脚内部は横位の箆調整がなされている。器体外面は縦位の箆調整が加えられており、口縁端および脚端は横撫で仕上げている。口縁径20.5cm・高24.2cm。

第4号竪穴住居址(第6・9図)

東西 3.5m・南北3m+αの隅丸方形を呈する竪穴住居址と推定される。床面には4本の柱 (径10~13cm) が立ち、柱穴と推定されるものが1個、プラン外に2本の柱と柱穴1個がある。これらの柱がこの住居址に伴うものとすれば少くとも10本が必要とされるであろう。この住居址から木製三叉鍬1丁が出土した。刃先を欠損しているが保存状態は良好である。



第9図 第4号竪穴住居址出土土器実測図

第5号竪穴住居址(第11図)

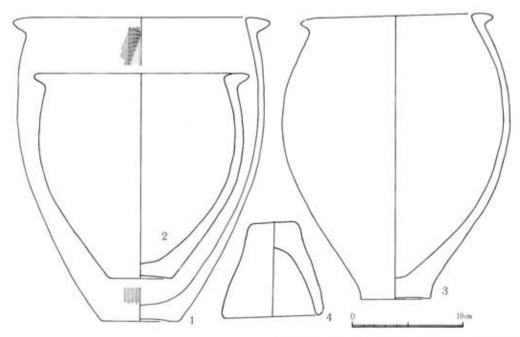
第5号竪穴住居址は第4号址の東北3mにその南側壁がある。この住居址は長辺(北東方) 3.9m、短辺のうち北部が狭く2m、南部で2.9mを測る隅丸台形を呈するプランである。この住居址の床面の北側は一段低くなって、ピット状を呈する落ち込みがある。即ち、北壁に沿って1.6m・幅80cmの部分が床面から約20cm窪んでおり、ここから木製鍬が出土している。(第20図)また、東壁の中央部に造り出しがあって、そこには土器が堆積され、黒漆塗りの木製高坏が出土している。炉址は確認することができなかった。

襲形土器① (第10図) 砂粒を多く含んだ胎土であって焼成良好である。口縁部は三角形状を呈し外方に尖っている。胴部のふくらみは殆どなくゆるやかなカーブを描いて底部に至っている。底部はや、上げ底を呈する。器体外面は斜位の刷毛調整をなし、口縁部内外は横撫によって仕上げている。口縁径23.2cm・高27.5cm。

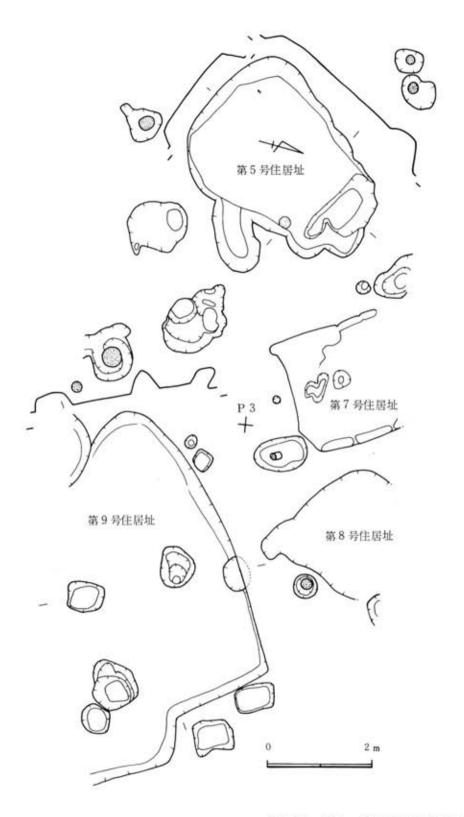
変形土器② 鉢形土器とも見られる背の低い甕形土器である。二次焼成のため赤紫を帯びた褐色に変色している。花崗岩質の砂粒を多量に含んだ胎土であって、焼成や、良。L字形の口縁部に近い様相を呈し、や、胴に張りがみられ低い上げ底である。口縁部内外は横撫調整であるが、器面が剝げていて、他の部分の調整は不明である。口縁径19.4cm・高18.6cm。

3 胴に張りが見られ、狭められた口縁部にや、丸味を加えた三角形口縁を附している。器体には全面に不規則なタッチで撫調整をなし、最後に口縁内外部を横 撫で調整し仕上げをしている。口縁径17.4cm・高25.7cm。

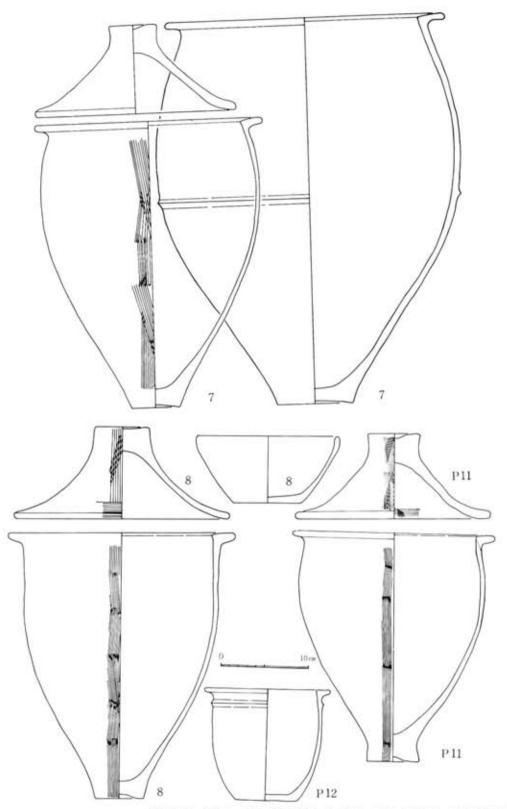
器台形土器④ 砂質の多い粘土を胎土とし、手捏で造られた器台形土器である。器



第10図 第5号竪穴住居址出土土器実測図



第11図 第5~9号竪穴住居址実測図



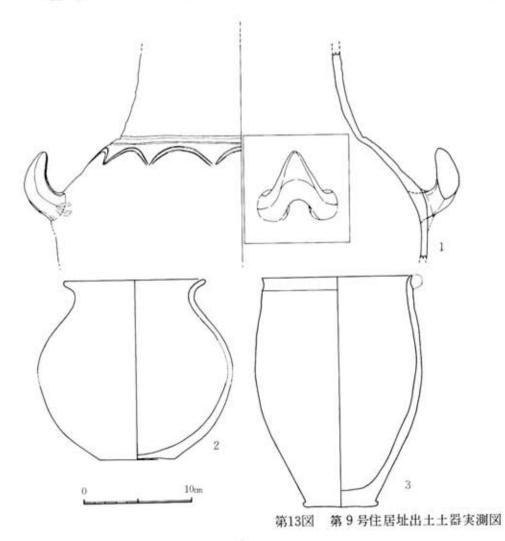
第12図 第7・8号住居址およびPit 11・12出土土器実測図

体全面が撫で調整され焼成も良好で暗黄褐色を呈しており、無文土器系と考えられる。 高 8.6cm。

第9号竪穴住居址(第11図)

第9号竪穴住居址は、第8号址の南に隣接している。この住居址の南側を調査していないため全体のプランは不明であるが、東西辺約5.5mを測り、かなり大形の不整形住居址であろうと考えられる。東南壁にはベッド状の造り出しがわずかに残存している。この住居址から木製黒漆の長手杓子1丁が出土した。(第18図)この杓子は一木造りであって柄の長さは33.5cmあり、身部の現存長9.5cmをはかり卵形を呈する。柄部と身部が接合する部分には幅0.9cm・厚さ1.5mmの造り出しをもうけて、あたかも柄と身をひもで縛った感じを受ける形式であり、初現的な杓子の形態を模倣したものであろうと考えられる。

壷形土器① (第13図) 胎土に砂粒を含み焼成は良好であって、赤褐色を呈する 壺形土器であるが、口縁部と胴部下は欠損している。頸部に幅4mmの沈線を上に、その 下6mmの位置に幅1.5mmの沈線を平行させてめぐらせており、その直下に沈線による重



-51 -

孤文を配置している。また、最も張り出した肩部に1対の組合せ式牛角把手が角先を上 向きにして附されている。

黒色研磨土器② 肩部より上は黒色を呈し箆による研磨が施されているが、肩部より下は二次焼成を受けているため赤桃色を呈する所謂黒色研磨の壷形土器である。微粒の砂の混じった胎土であって焼成は良好である。口縁径13.2cm・高16.5cm。

無文土器③ 砂粒を多量に含んだ胎土であって、焼成はや、良好。二次焼成を受けているために本来の色彩を失っているが、胴部下は赤褐色、胴部より上位は黒褐色を呈する。口縁部の粘土紐は欠落しているが、断面円形であろうと考えられる。器体外面は凹凸があるが、立てた篦で縦位に撫て調整しており、口縁部は内外とも横撫で仕上げている。口縁径14cm・高21.4cm。

第10号竪穴住居址(第21図)

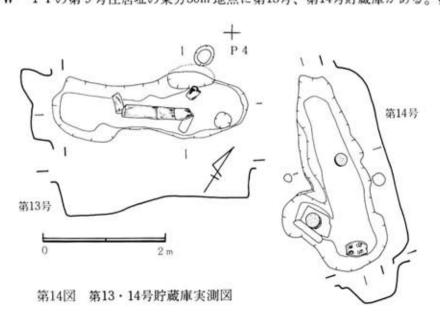
NS-1TA区の川址北側に隣接して第10号住居址は位置する。この住居址が土生遺跡の最北端に位置するものと考えられる。この小川址は、EW-1Tの小川址と連続するものと推察され、この小川が土生遺跡と土生B遺跡を原則的に分離する境と目される。

(2) 貯蔵庫

独立した不整形プランで竪穴を伴うもの(高床式ではなく、屋根をもつもの)を貯蔵庫と規定する。住居址に隣接して存在する小竪穴址も貯蔵庫であるものもあるであろうが、出土遺物がない限り断定は困難である。ここでは、貯蔵庫としての可能性が強いもののみを取上げることにする。

第13号貯蔵庫(第14図)

EW-1 Tの第9号住居址の東方30m地点に第13号、第14号貯蔵庫がある。第13号貯

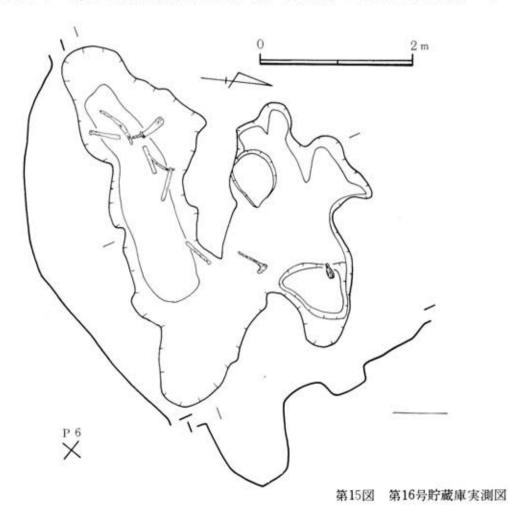


蔵庫は長辺 3.1m 短辺は東部で1m、西部で70cmの北東方向に長軸をおく竪穴で長楕円形を呈する。この竪穴の側壁と床面には木の葉が数cm敷きつめられていた。この中央部に直径10cmの柱が長軸方向に沿って横倒しとなり、その西側の下部に平鍬があった。この平鍬(第19図)は、刃部を欠損しているが現長36cm、幅14.5cm、厚さ2cmであって柄着装穴の左右に三角形の穴が穿たれており特色ある形態となっている。この1対の穴は装飾穴か、あるいは柄を補強する為に添木を挿入する為の穴であろうか。

第14号貯蔵庫(第14図)

第13号址の東80cmに隣接して長軸を北西方向にとり第13号址と直行するように、存在するのが第14号貯蔵庫である。

長辺3m、幅80cmの長楕円形ないしは隅丸長方形を呈する。この中央部に長径10cmの柱が建てられている。南の柱には幅30cm、長さ50cm、厚さ3cmの板を礎盤として用い柱の沈下を防止している。この竪穴にも床面に木の葉を敷きつめ、側壁には小枝を張りつけていた。ここから出土した木製盤は長辺33cm、短辺21cm、厚さ6cmであって、4本の脚を有している。この盤は未製品と考えられる。(第19図)この竪穴のほぼ中央に一木

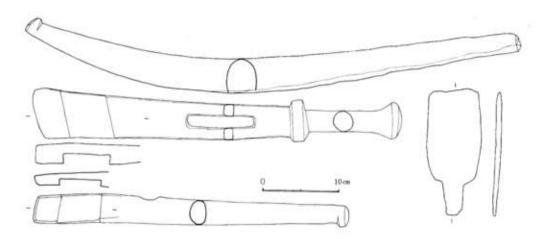


造りの杓子形木製品が出土した。(第19図)この木製品は直径16cm程度の木材を用い、 柄先は枝の部分を利用して整形している。柄は荒削りであるが、断面円形を呈し、身部 の一部に整形のための削り跡が見られる。また身部の側面に径 1.3cm、深さ 1.5cmの穴 がある。この穴は、自然の穴か虫喰い穴か人工的な穴かは不明である。

第16号貯蔵庫(第15図)

第16号貯蔵庫はNS-1TA区にあって、第10号住居址の南20m地点に存在する。この竪穴は2つの部分からなっている。すなわち、その一つは方向を東北にとる長楕円形の深い竪穴であり、この北部に接する不整形の浅い竪穴からなっている。前者は長軸4.7m、幅1m、深さ約1mの竪穴である。この竪穴からは筵などを織る器具の部分品が出土した。

北部遺構は不整形プランであって、木製の着柄、手匙形木製品を出土した。(第16図)



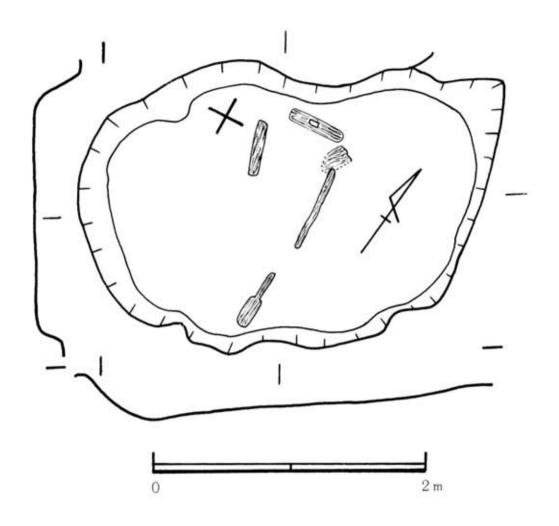
第16図 木製織具等実測図

(3) 工房址 (第17図)

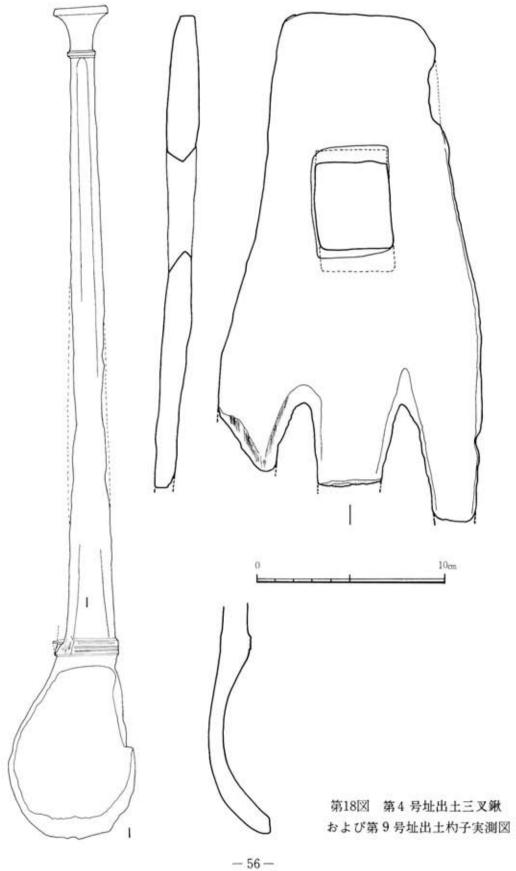
第15号竪穴址であって、木製品加工工房址と断定できるか確定しかねるのであるが、 貯蔵庫ないしは住居址とみるより工房址とみるのが妥当性があると考えられる。すなわ ち、この竪穴は長軸を東北にとる長さ3m、幅2mの楕円形プランを呈し、深さ20cmを 測る。床面には、他の住居址と同様に木の葉を敷きつめてあり、その上部に木を刻んだ り、けずったりした木の端片が無数に残存していた。この竪穴址からは木製横槌、平 鍬、木製短剣未製品などが出土した。この木製短剣は大陸系青銅製剣の模倣であること はその把手部分の造りから明白であろう。

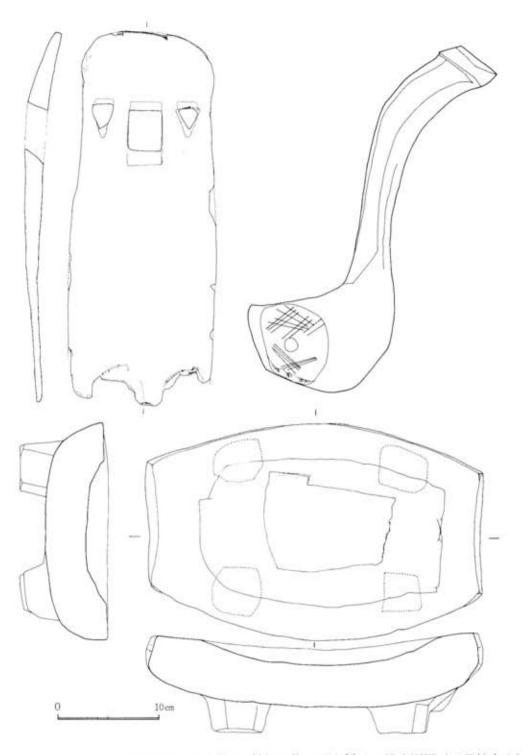
(4) 小川址 (第21図)

第10号竪穴住居址の南に接して、上面幅約 3.3m・深さ60cmの小川が東から流れ、EW-1 T西部の小川址に連続するものと推定される。この小川址は砂質土がほぼ川の端上にまで達していて、この砂質土の堆積によって川の機能を喪失したものと推定される。この砂質土層内には弥生式土器片とともに小形手捏土器・楽器形木製品(未製品)など注目される出土品を見た。(第43・22図)

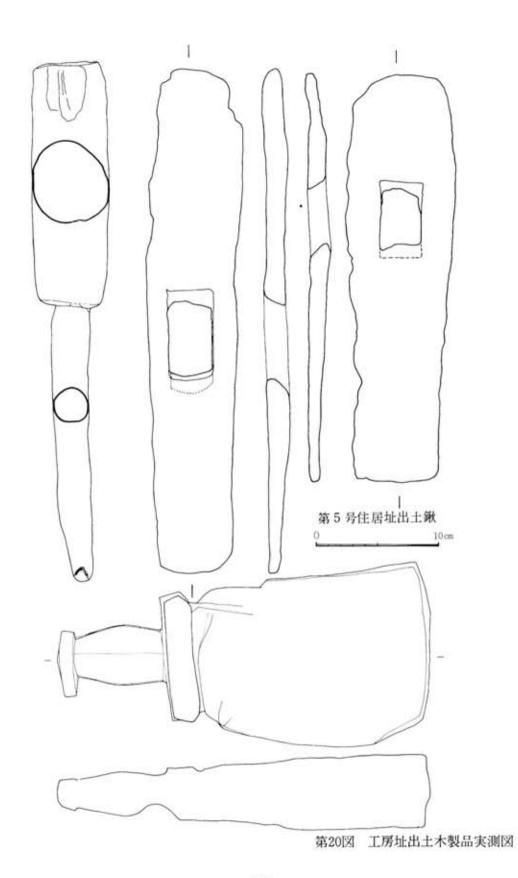


第17図 第15号工房址実測図

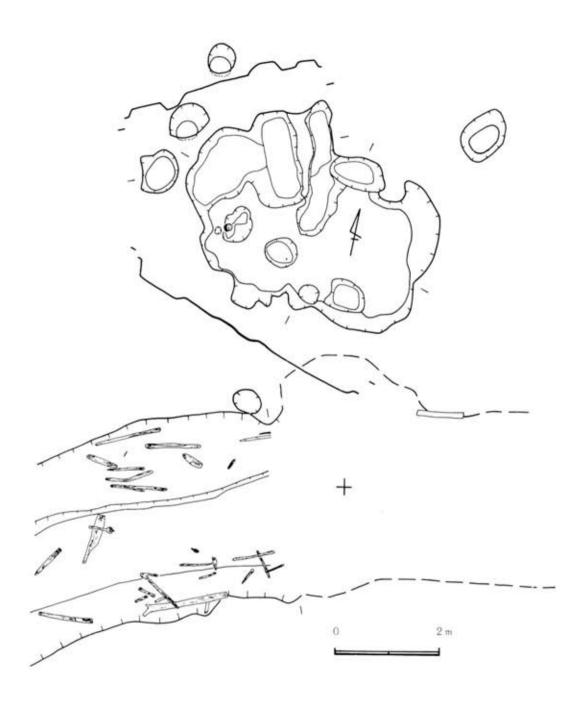




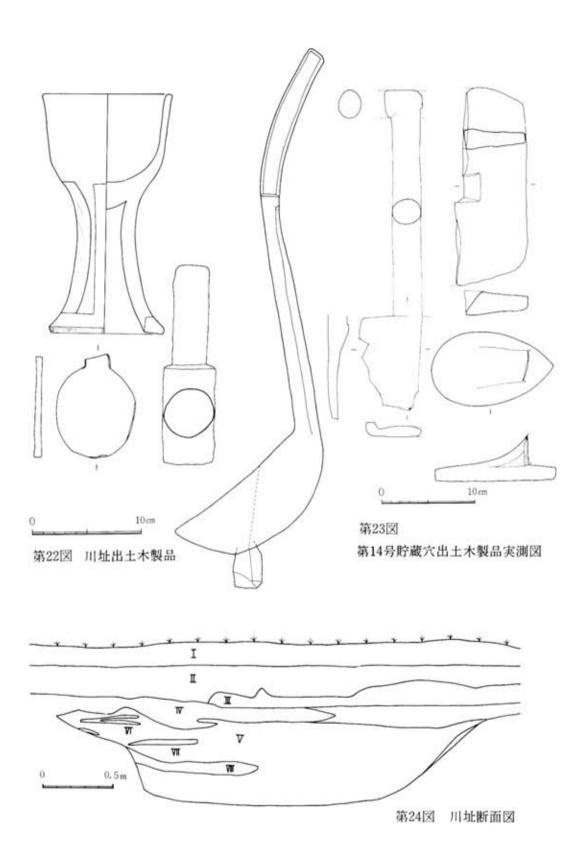
第19図 平鳅 (13号址) ・杓子形未製品・盤実測図 (14号址出土)



-58-



第21図 第10号竪穴式住居址·川址実測図



3. 土生 B 遺跡

NS-1TA区の小川址辺りが土生遺跡の北端であろうと推察されるのであり、この小川が土生遺跡と土生B遺跡を原則的に分離する境になっていたものと目される。NS-1Tで見る限りにおいては、この小川址周辺から北約50mの間は無遺構となっている。

土生B遺跡はこの地点を南限としほぼ小川址の流れにそって南西方向へとその南限を延長するものと考えられる。このNS-1Tより東部においては、この南限線がそのまま孤を描いて北上し、幹線道路4号地点で最東端となる。NS-1Tから約100m東にあたる。更にそれから西へその境界孤線を向けながら北上するものと推察される。

土生B遺跡は弥生時代の竪穴住居址群と墳墓、および平安時代の遺構からなる複合遺跡である。しかし、この遺跡は後世における削平が著しく遺構の上面が相当カットされており、その全貌を明らかにする事はできない。

- (1) 弥生時代の住居址
- ① 住 居 址

第12号住居址 (第25図)

第12号竪穴住居址はNS-1TA区の小川址から北へ約100m 地点 (NS-1T Point No.8) に位置する。この住居址は現時点で長辺 2.1m、短辺 1.5m の不整形を呈する竪穴状プランであって柱が3本残されている。この柱および柱穴群は南西方向に2列に並べられ約70cmの間隔で北列が3本、南列が4本立てられていると考えられる。この柱群の中には建て替えの際の柱も含まれていると推定される。従って当初の住居址は東西3m、南北2mを越える平面プランであったことが推察される。この住居址の周囲には無数のピット群があり、また柱も数本残っているがその実態は不明である。

第12号住居址の南 3 m地点に第14号貯蔵穴、南東 2 m地点に第15号貯蔵穴があり、また北方 4 m地点に井戸址がある。

第14号住居址 (第26図)

井戸址の北方約45m (Point No.9) 地点に16号住居址がある。この住居址は南部を第13号、北部を第18号住居址から、それぞれ切られているため、その全貌は不明であるが、東西 4.5m の不整丸形を呈するプランと推察される。床の東部に径30×50cm、深さ13cm の柱穴があって、柱の沈下を防止する横木が残っていた。この住居址からは無文土器系 甕形土器の底部、黒色研磨土器の高坏形土器が出土した。(第28図)

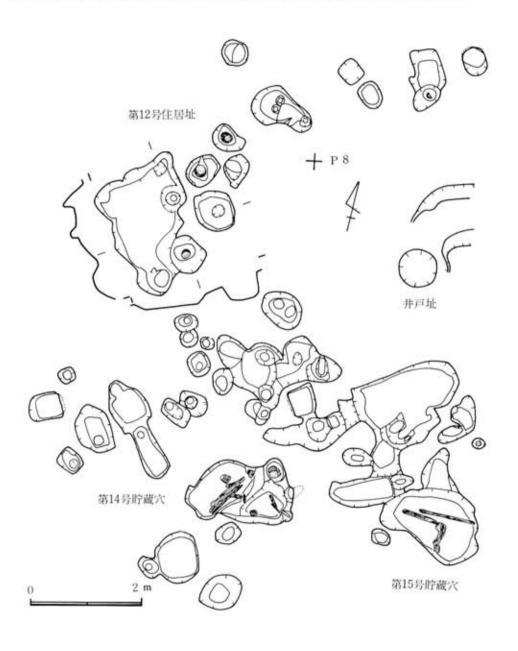
高杯形土器① 精選された粘土に極微粒砂を含む胎土であって焼成良好である。器体外面の坏部は斜位の、脚部は縦位の箆研磨による調整がなされ脚端は横撫によって仕上げられている黒色研磨土器である。③の器体は荒い縦位の刷毛目、口縁部は横撫で調整した菱形土器。④も甕形土器の口縁部であって、嘴状を呈する。器体は縦位の刷毛調整であって口縁部は横撫、口縁下に沈線を一本横にめぐらせている。

この住居址の東部から東方向に幅45cmの小溝が約5mにわたって存在し、その端の部

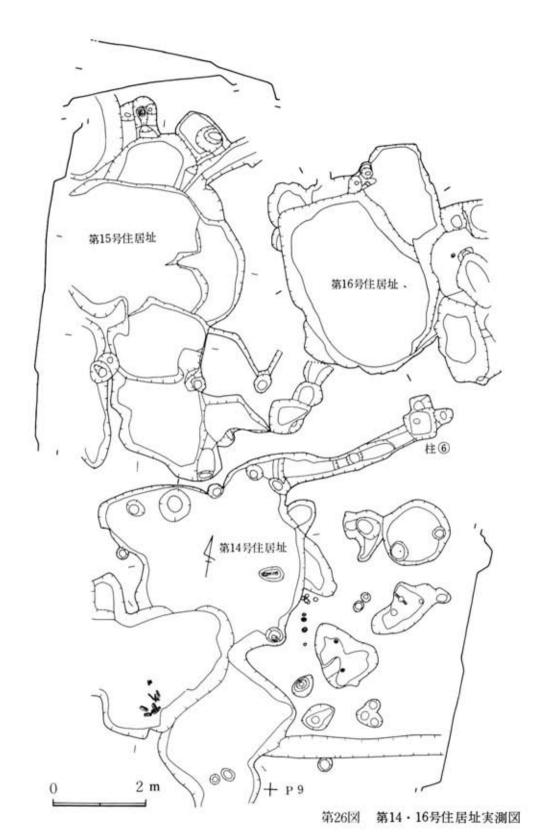
分には柱が立てられている。(第36図6) これに似た溝は第18号址にもその存在が認められるところからみて、住居への通路として設けられたものではなかろうか。

第16号住居址 (第26·29図)

第16号住居址は、第15号址の東に隣接し長辺4m、短辺3mの楕円形を呈する。東北隅には長辺2m、短辺1.2mの造り出しがあって、ベッド状を呈する。この住居址の東側に存在する小竪穴群はこの住居址が廃屋となった後に掘られたものである。



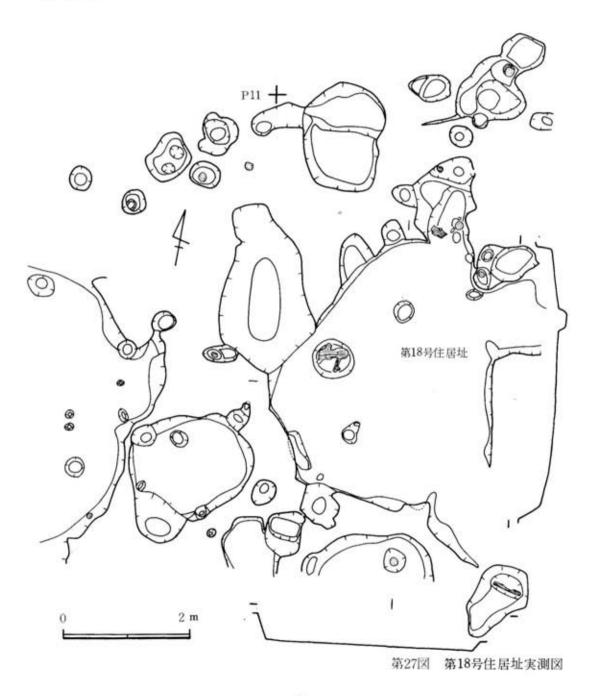
第25図 第12号住居址周辺実測図

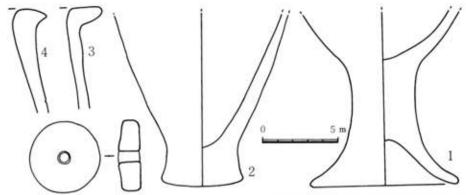


- 63 -

3要形土器① 大形の3要形土器であって褐色を呈するが、所々に黒斑がある。精選された粘土に砂粒が少量含まれた胎土であって、焼成良好である。器体全面に不規則の方向をとって無調整がなされ、口縁部は横撫で仕上げられている。

鉢形土器⑥ 白黄褐色を呈する鉢形土器である。精選された粘土に微砂粒を少量含む胎土であって焼成良好である。口縁部は内側に嘴状に突き出して整形し、特色ある鉢形土器となっている。器体は全面に縦撫、口縁部は横撫で調整している。口縁径18.1cm.高 9.5m。





第28図 第14号住居址出土土器実測図

第18号住居址 (第27・29図)

Point No.7 地点に、第18号住居址が位置する。この住居址の東壁は相当に攪乱されている。長辺4m、短辺3m程度の竪穴式住居であろうと推察される。床の西北部に径60cmの柱穴があって、その底部には柱の沈下防止の為の大木を加工した横木があり、さらにその下に径5cm、長さ40cmの小木を横木の両端に敷き補強している。柱の実数は不明であるが、南壁に沿って、柱の中心を 1.8m間隔で3本が建てられていることは注目される。

腰形土器① 黄褐色を呈する無文土器系の腰形土器と考えられる。や、胴に張りが見られ、極端に薄く「く字状」に外反する口縁部、手捏状に荒く整形された底部である。器体の外面は篦を立てた状態で主として横位に粗雑に調整されている。口唇下面には指先きで押圧した跡が残り、横撫で調整している。花崗岩質の砂粒を少量含む胎土であって、焼成良好である。器高26.8cm。

第19号住居址 (第30図)

Point No.10地点に第19号住居址がある。長辺 3.5m、短辺 2.8mを測る隅丸長方形を呈する。

南西隅には直径 1.1m、深さ 6.5cmの貯蔵穴を附設している。東壁部分は攪乱されており、その原形をとどめていない。貯蔵穴からは桃実および瓜科の種子が数点出土した。

第21号住居址 (第31図)

第21号住居址は、Point No.18地点に存在する。長辺3.5m、短辺2.9mの楕円形を呈する。北壁と南壁に柱穴があるが、他の柱は不明である。この住居址から組み合せ式牛角把手が出土した。

第22号住居址 (第31図)

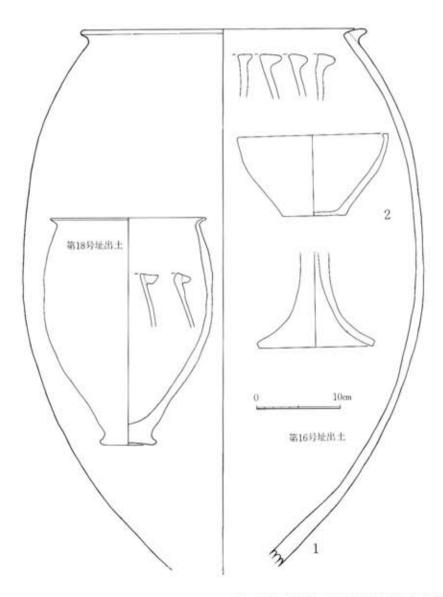
第21号址の北に隣接して第22号址がある。長辺 3.2m、短辺 2.6mの楕円形を呈する 竪穴である。北壁には幅50cmの小溝が床面より約10cm低く穿たれている。南壁中央に柱 が建てられており、その基部が残存している。

第23号住居址 (第31図)

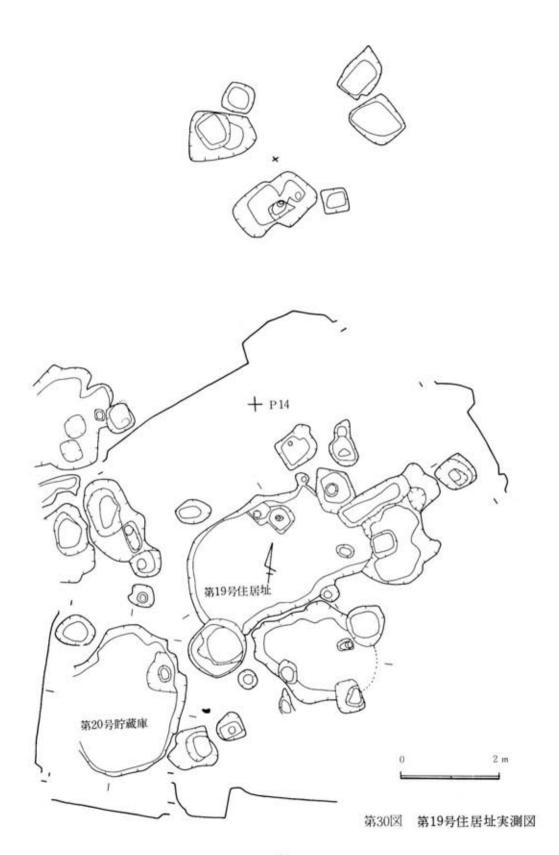
第24号址の北方に第23号住居址がある。径 4 m の不整円形を呈する竪穴であって北壁に 2 本、東壁に 1 本、南壁に少くとも 1 本の柱穴がある。北壁の 1 本は横木を敷いた柱が残り、南壁の 1 本には礎板を敷いた柱址がある。

② 貯 蔵 穴

食料や用具、用材を保管する穴であって、長辺径2m以下のプランで、比較的深い竪 穴を貯蔵穴と称することとする。



第29図 第16・18号住居址出土土器実測図



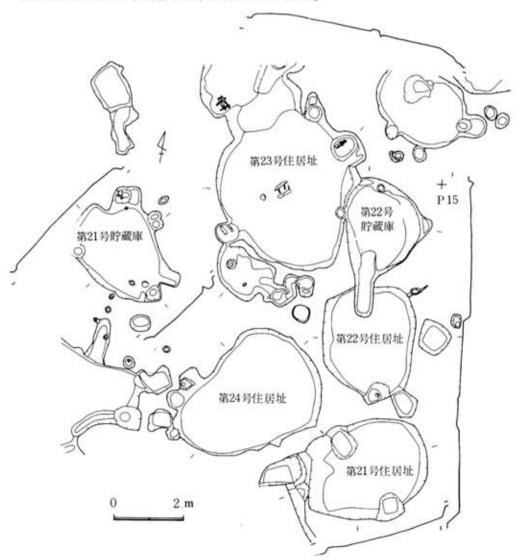
第14号貯蔵穴

第12号住居址の南 3 mに位置する。長辺径 1.9m、短辺 1 mの不整形を呈する竪穴であって、深さ80cmを測る。この竪穴の側壁と床面には木の葉が厚く敷きつめられていた。側壁の落下を防ぐために杭を数本打っている。また、この貯蔵穴には屋根の施設があったらしく柱が残っている。この貯蔵穴には木製竪杵・鋤が貯蔵されていた。(第32図)第15号貯蔵穴

第1号貯蔵穴の東方2mに位置する。長辺1.8m、短辺1.1mの不整形プランで深さ55cmを測る竪穴である。この貯蔵穴には長さ1m前後の杭木が十数本収納されていた。

③ 貯 蔵 庫

住居址に近い構造をもつ竪穴址であるが、や、平面プランが小さく住居址とするには 狭少と推察されるものを貯蔵庫とすることにした。



第31図 第21~24号住居址及び第21~23号貯蔵庫実測図

第16号貯蔵庫 (第32図)

Point No.8 地点に位置する。長辺 1.7m、短辺 1.5m の円に近いプランである。その南東隅には、長辺1m、短辺70cmの隅丸方形の凹所が設けられている。この貯蔵庫からは壷形土器が主体をなして出土するところからみてこれらに収められた食飲料が保管されたものであろう。

董形土器① (第34図) 胴が球状に張り、平底を付し、引き締まった頸部に「く字状」に外反する口縁を付している。赤褐色を呈するが、胴部から底部にかけ一部分に 黒色斑点がみられる。砂粒を含んだ胎土であって焼成良好である。頸部から胴部にかけ ては斜位の刷毛目、底部は縦位の刷毛目で調整し、器体内部の頸部から胴部には斜位の 撫を施し、最終的に口縁内外を横撫で仕上げている。

電形土器② 球状の胴部から引締った頸部をもち、鋭角に外反した頸部は、更に「逆く字状」に内側に反りをみせる口縁部である。頸部から下位には堅い刷毛を縦位に用いて調整し、肩部に△凸帯を撫つけ最後に口縁部を横撫で仕上げている。

第18号貯蔵庫 (第33図)

第18号貯蔵庫は、Point No.13地点にあって、直径2.7mの半円形の竪穴に南壁が直線で結ばれ、第14号址でみたような小溝が南に向って穿たれている。上面幅70cm、住居址の床面より約10cm低くなっていて住居への出入口と思考される。住居の床面の北寄りに80cmの間隔で2本の柱が建てられ、南東隅と南西隅にそれぞれ柱が建てられていたものと考えられる。

第17号貯蔵庫 (第33図)

第18号址の北に接するようにして第17号貯蔵庫がある。この貯蔵庫は直径 2.5mの円 形プランを呈する。床面のや、南よりに長辺 1.2m、短辺90cmの隅丸方形を呈する小竪 穴があって、東部は二段底状になっており、床面から約35cm低くなっている。地下冷蔵 庫の機能をもつものであろうか。小形の2つのピットは柱穴であろう。

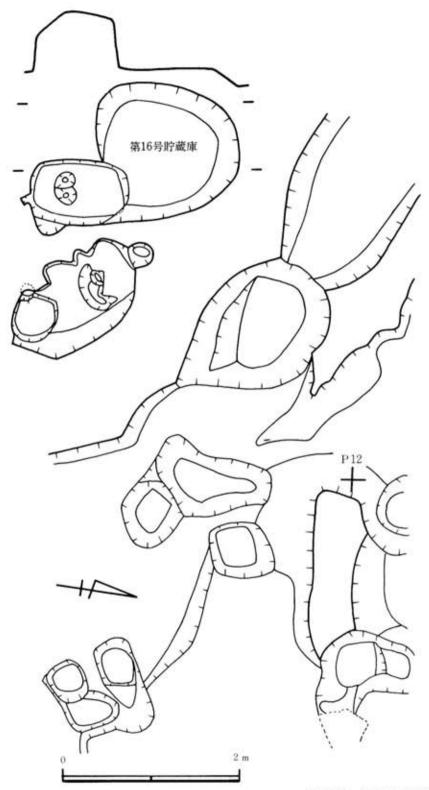
饗形土器① 「く字状」に外反する口縁をもつ甕形土器であって、口唇下部がや、 下ぶくらみの状態である。

電形土器③ 球状に張った胴部からゆるやかな曲線を描いて底部に至るが底部でや や外反して平底となっている。口縁部は「〈字状」に鋭角に外反し、口唇上面は水平に 近くなっている。精選された粘土に砂粒を含む胎土であるが、焼成や、良と言える。器 体外面は箆で研磨された後、丹彩を施した形跡がある。

第19号貯蔵庫 (第33図)

第19号貯蔵庫は第17号貯蔵庫の西2mに位置する。長辺2.6m、短辺1.7mの楕円形を呈する竪穴である。

饗形土器 二次焼成を受けている為に暗褐色を呈する。胴部にや、張りがあり、口唇下部に指圧痕が見られ、その上から横撫で調整している。器体には刷毛目が付されて



第32図 第16号貯蔵庫実測図

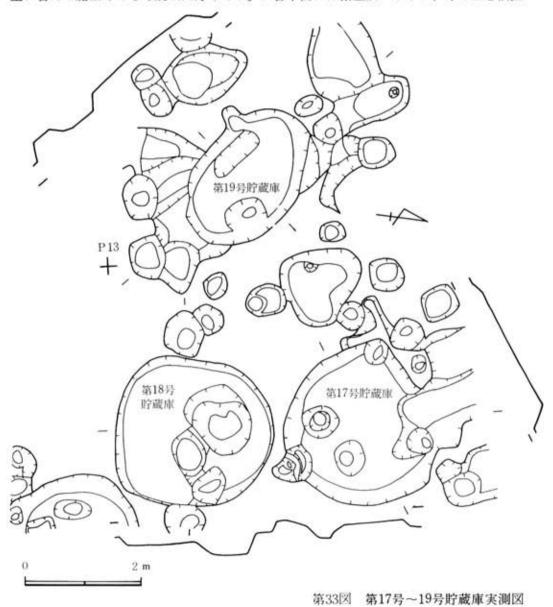
いるようである。高16.5cm。

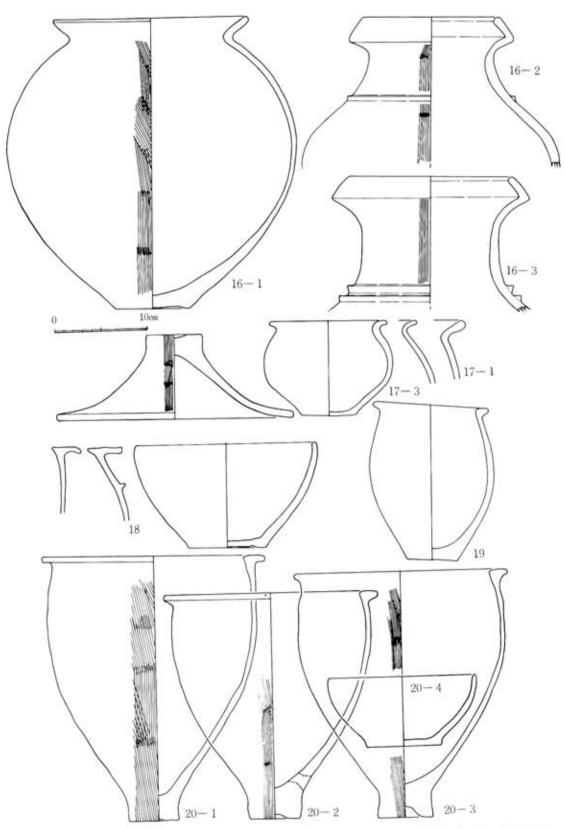
第20号貯蔵庫 (第30図)

第20号貯蔵庫は、第19号住居址の西に隣接して存在する。長辺3m、短辺2mの楕円形を呈する竪穴址である。床面の東北隅にピットがあるのは柱穴であろうか。

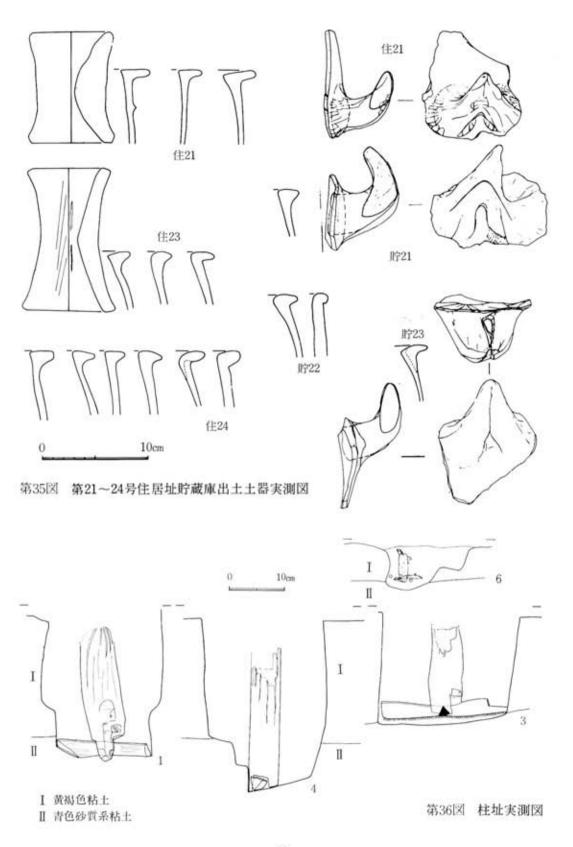
遷形土器① 小砂粒を多量に含む胎土であって、赤味を帯びた黄燈色を呈する。(二次焼成の為か)器体には全面に斜、縦位の刷毛調整を施し、その後口縁部を横撫によって仕上げを行っている。高27.9cm。

変形土器② 全体的に暗褐色を呈しているが、口縁部は赤褐色を呈する。砂粒を多量に含んだ胎土であって焼成良好である。口唇下面には指圧痕がみられ、その上を横撫





第34図 第16~20号貯蔵庫出土土器実測図

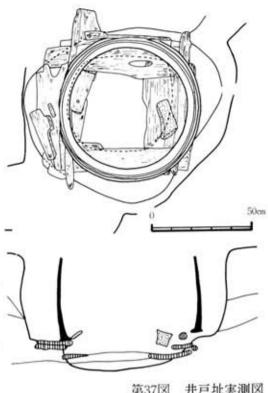


で調整し、器体はおもに縦位の荒く長い刷 毛目が付されている。底部付近に両面から の穿孔になる径1cmの穴があり、 骶に使用 されたものであろう。器高23.8cm。

鉢形土器④ 黒褐色を呈する鉢形土器 である。砂粒の含有が少ない胎土であって 焼成良好である。器体の内面は主に縦撫に よって調整し、外面の下部は縦撫、胴部か ら口縁部は横撫によって調整している。口 縁部内側で器体から一担手(指)を離した 痕跡が残されている。

第21号貯蔵庫 (第31·35図)

第23号住居址の西2mに第21号貯蔵庫が ある。長辺 2.6m、短辺 2 mの楕円形を呈 する竪穴である。この貯蔵庫にも南壁に2 本、東壁に1本の柱が確認された。この貯 蔵庫から組み合せ式牛角把手が出土してい 30



第37図 井戸址実測図

第22号貯蔵庫 (第31·35図)

第23号住居址の東に接して第22号貯蔵庫がある。長辺 2.7m、短辺2mの楕円形を呈 する竪穴であって、第22号住居址と幅50cmの小溝で連結されている。

④ 井戸址(第25・37図)

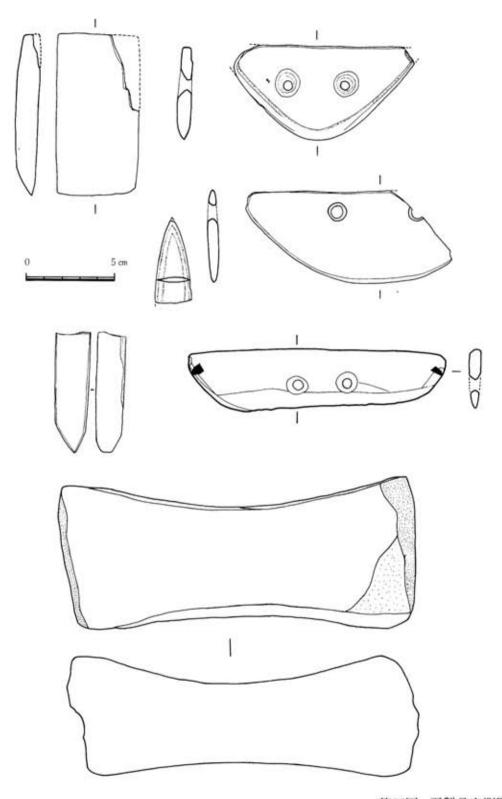
井戸址は、第12号住居址の東方3m地点に位置する直径1mの円形プランであって、 深さは70cm前後である。60cm前後掘り下げると青色粘土層となるが、この粘土層を更に 15cm程度掘り下げて砂を敷いている。水の濁りを防止する為であろう。その敷砂の上に長 さ70cm程度の板を「井字状」に3~4段積み重ね、その上に底部を打ち欠いた口縁径70 cmの大形甕形土器を逆に固定して井戸枠としている。本来の高さは不明であるが現在高 60cmである。この井戸址内から砥石(荒砥)が1個出土した。

(2) 弥生時代の墳墓

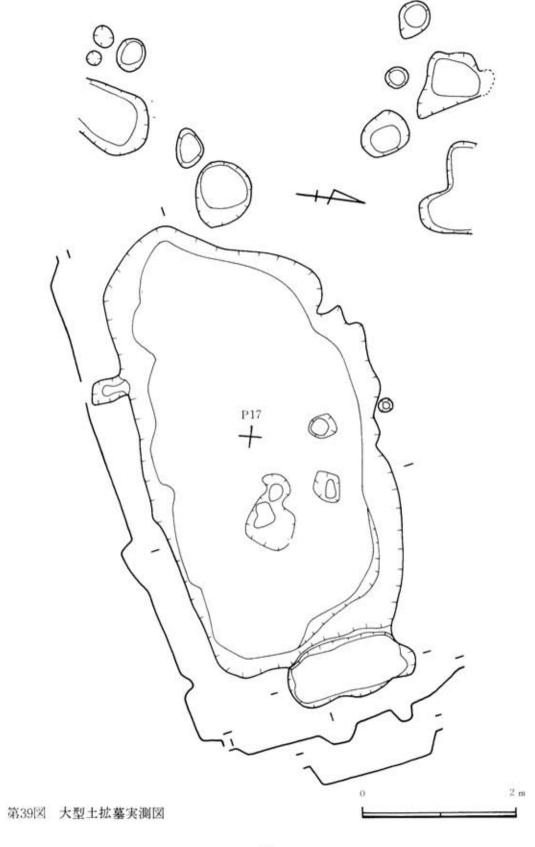
土生B遺跡の北端部にEW-2Tを設定して調査したところ大形土拡蟇1基、その東 壁に接して土拡蟇1基が確認され、また、NS-1 T北部でも土拡蟇1基を確認した。

大形土拡募 (第39・40図)

大形土拡蟇は、長辺 5.9m・短辺 3 mを測る楕円形を呈し、約30cmの深さをもってい

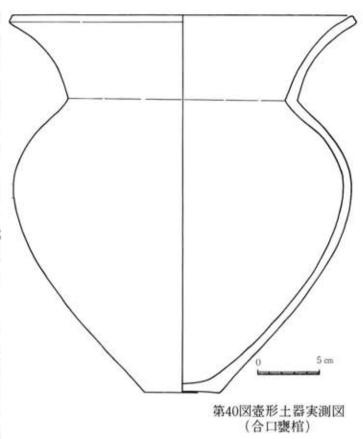


第38図 石製品実測図



る。土拡内には供献用土器であろうか、甕形土器を主体とし、鉢形土器・器台形土器などが破壊された状態で散乱している。土器は赤褐色・淡道L字形」を全し、口縁部は「逆L字であって、弱い「く字形」を呈する。口縁下には△凸帯を無付けたものとそれが無いものがある。口縁部より下部には縦位の刷毛目、口縁部は横撫によって調整しているのが一般的である。

この大形土拡蟇の西端位に 甕・壺形土器の組み合せにな る小形合口棺が主軸をN65E において水平位に埋置されて いた。甕形土器は砂粒を含む 胎土であって、やや脆弱な焼



成であって、黄褐色を呈する。器体外面は粗い刷毛調整をなし、口縁部は横撫によって調整している。壺形土器は、胴部の張りが上位にあって、ラッパ状に開く口縁部をもっている。器体は全面撫て調整しているらしい痕跡がみられる。口縁外部には幅2mm程度の箆線が縦位に10条程度を1組にはしり、6ケ所にそれを配して装飾している。

大形土拡の東壁に接し、長軸 1.7m・短軸80cmを測る隅丸長方形の土拡蟇が、主軸を N22Wにとって存在する。

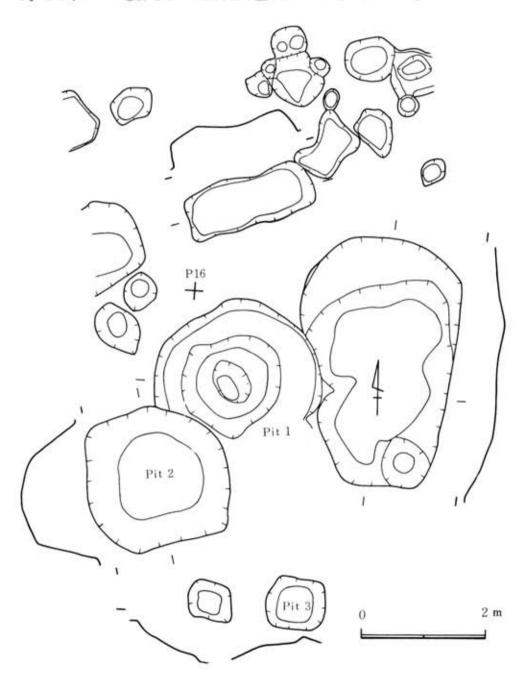
また、NS-1T北端にも長軸 2.1m・短軸80cmの土拡墓が主軸をN72Eにとって存在する。この土拡墓にも供献された土器群があって、すべて破壊された状態であった。 土器類は甕形土器を主体として、鉢・器台形土器などがある。土器類は赤褐色、または 淡黄褐色を呈し、「T字形」口縁をもち、口縁下に△凸帯を有するものもある。器体外面は縦位の刷毛調整のあと横撫で仕上げる手法をとるものもある。

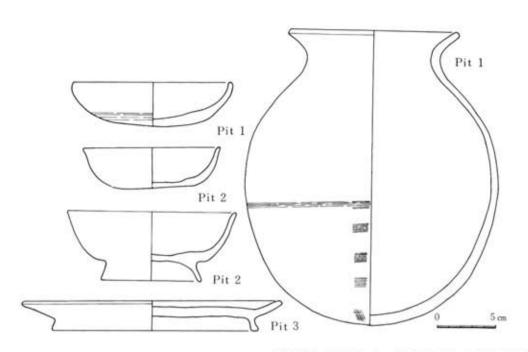
(3) 平安時代の墳墓(第41・42図)

NS-1Tの北端部に平安時代の墳墓遺構と推定されるものが存在している。直径2.7mの円形を呈し、中央の最深部で55cmを測る。このPitの中央底部から20cm浮いた位置に須恵器系壷形土器が横倒しの状態で、また、東端部に暗褐色を呈する須恵器系坏形土器が各々1個づつ出土している。

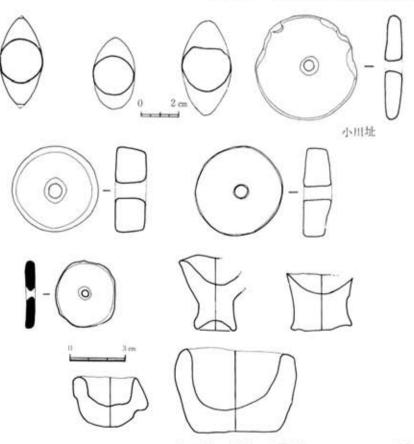
Pit 2 Pit 1の南西に接して穿たれた竪穴であって、一辺 2.2mの隅丸方形を呈し、深さ1mを測る。この大形Pit から底部に板目をもつ坏形土器が、また、下方に開く高台を付した坏形土器が各々1個出土した。いずれも土師器系土器である。

Pit 3 大形ピットの南東 1 m に位置し、一辺95cmの隅丸方形を呈し、深さ56cmを測る。この小Pit の底部近くから土師器系盤が伏せた状態で出土した。





第42図 平安時代の墳墓址出土土器実測図



第43図 土弾・紡垂車・ミニチュア土器等実測図

4. 土生C遺跡

国指定史跡「土生遺跡」の東限から東 100m地点に土生 C遺跡の西限がある。EW-3 Tを中心として南北約 100m・東西約 100mのほぼ円形の範囲内が土生 C遺跡と推定される。

EW-3Tの探査によると弥生時代の大形土拡蟇と孤状溝蟇と推定される遺構および 井戸址が確認された。

(1) 土拡墓(第45図)

EW-3 TのPoint 1に位置し、長辺 4.3m・短辺 1.6mの長方形を呈する土拡蟇であろうと推定される。拡内には甕・鉢・高坏・器台形土器などが破壊された状態で出土した。これらの土器群は「逆L字形」の口縁部をもち、その口縁部は横撫で調整、口縁部より下位は刷毛目調整を施している。

(2) 孤状溝墓(第46図)

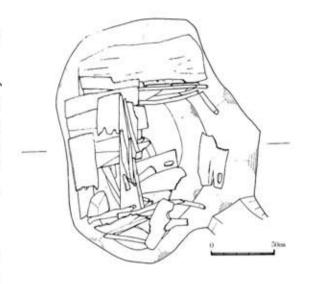
大形土拡墓の東方12m地点に孤状溝 墓と推定される遺構がある。

のこ孤状溝は、南東で袋状に終了し、幅 2.5mで約8m西へ進み、その地点から溝の幅を 1.5m狭めて北西方向へ孤を描くように穿たれている。この溝状遺構は南北(内径)10m余の馬蹄形プランをとる孤状溝であろうと推定される。

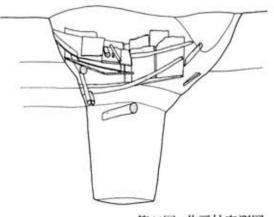
溝内には破壊された土器が群をなして堆積している。甕・鉢・高坏・器台および筒形器台などがある。この土器類の口縁部は「T字形」をなし横撫で調整、器体外面は縦位の刷毛調整をなしており、内側はその上から横斜位で撫上げているのもみられる。

(3) 井戸址(第44図)

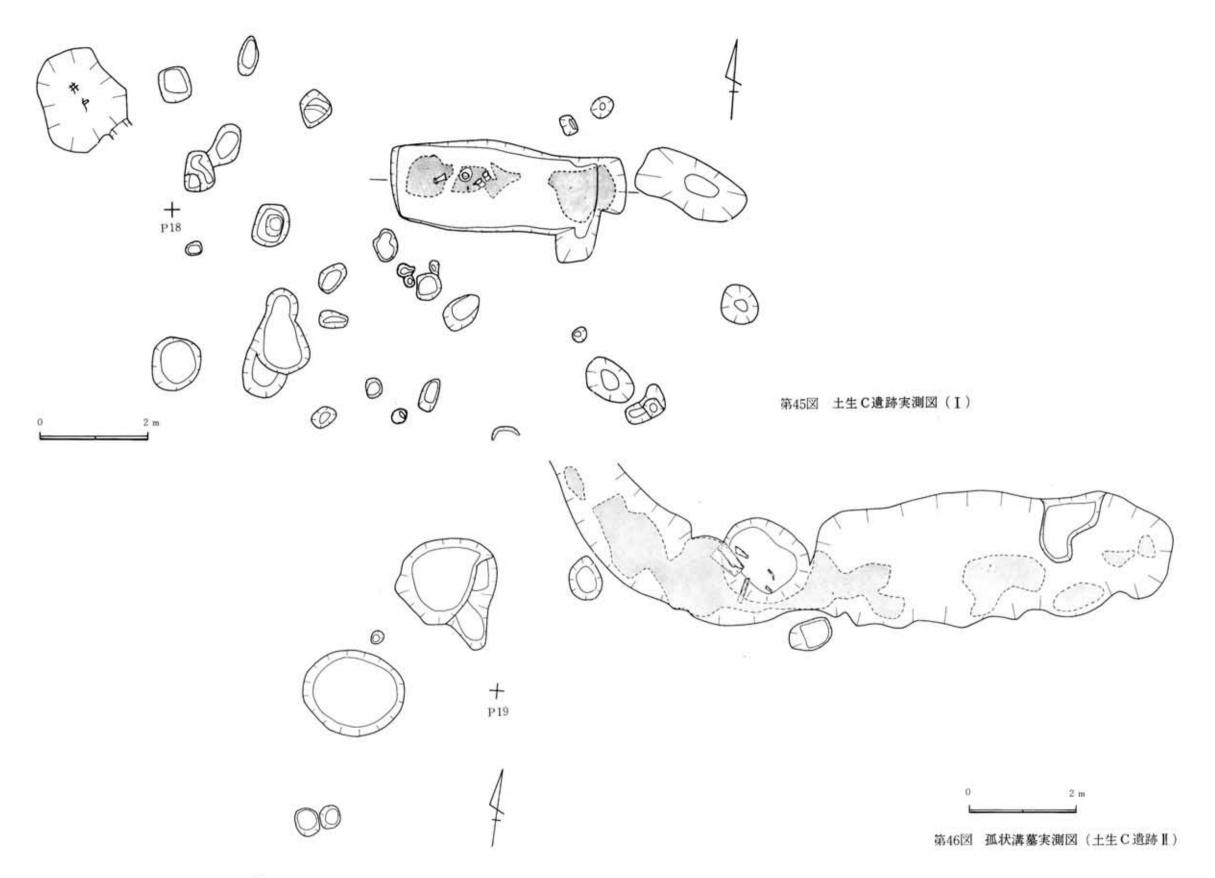
土拡蟇の西北5m地点に井戸址がある。この井戸址は構造的に2つの部分から成っている。上部構造は、上面径1.5m×1.9mの楕円形で、ほぼ垂直に約80cm掘り下げてあり、幅20cm・厚さ1.5cm程度の板材を幾重か並べて、倒壊を防止する為に径5cm程度の



H-7.60^M



第44図 井戸址実測図



丸材で輪を作ったものを内側にはめこんで補強し、井戸枠となしている。水溜場は上部 構造の下面で径60cm・底部で径50cmの円筒形であって、その深さは70cmであるが、下部 構造は素掘りのままとなり、枠組などの施設はない。技術的に高度な造りの井戸であろう。

5. 土生第5号住居址出土木製漆器の理科学的分析

(1) 解剖学的性質の特徴

散孔材、管孔はやや斜めに配列する。管孔は単獨又は複合、複合管孔は 2-4 個宛放射方向に連結するものが多い。単獨管孔の最大接線径 110μ 、最大放射径 130μ 、切口は楕円形乃至円形、穿孔板は傾斜し、穿孔は単一および階段状、横線の残存する部分が極めて少なく最高のもので $5+\alpha$ 本で、割合に太い。導管内壁に、残っている部分は少ないが細かい螺旋紋が存在する。導管相互間の有縁膜孔は交互状で、直径 7.5μ 前後、導管と放射組織との接する部分の膜孔は階段状、棚状、楕円形、そして細長い半月形とさまざまである。ストランド柔細胞は周風状で、その存在数は比較的多く、直径 $13-40\mu$ 、直径 105μ 大の大形の油細胞が多く存在する。木部繊維細胞の直径 $15-20\mu$ 、時に隔膜繊維細胞が存在する。

放射組織は異性で 1 - 2(3)細胞列、多列放射組織は 780μ に至る。複色物質が多く充填している。

導管の穿孔板が単一と階段状とを交えることと、油細胞が存在することから、クスノキ科のものであることは間違いない。資料は径30cm程の板材であることから、この科のもので樹幹が30cmを越える程の高木になるものではクスノキ属のクスノキ、ヤブニッケイ、タブノキ属のタブノキ、アオガシ、これに次いで、シロダモ属のシロダモ、イヌガシ、ハマビワ、バリバリノキおよびカゴノキ属のカゴノキなどが考えられる。シロダモ属およびカゴノキは導管相互間の膜孔が小径で、かつハマビワ以外は管孔が小さい。しかしハマビワでは放射組織の単列のものの存在数が少ない。従ってクスノキ属とタブノキ属のものに絞られるが、クスノキは管孔の大きさが 200μ 、 300μ と極めて大きく、かつ多列放射組織の高さが 410μ 止り位で低い。

なお、ヤブニッケイを含めてこの属のものは単列放射組織の存在数が少ない。タブノキ属のタブノキおよびアオガシでは前者が後者より、油細胞が多く存在し、かつ導管内堅の螺旋紋も明瞭であり、従って細胞膜の損傷していることの多い発掘材などもで残存する可能性が高い。また管孔の大きさも、タブノキでは最大接線径 120μ 、最大放射径 130μ 、アオガシでは同じく 115μ 、 120μ でタブノキがやや大径であり、資料のものに近い値を示している。以上のことなどを考察してMachilus thunbergii Sieb et Zucc. タブノキと鑑定した。

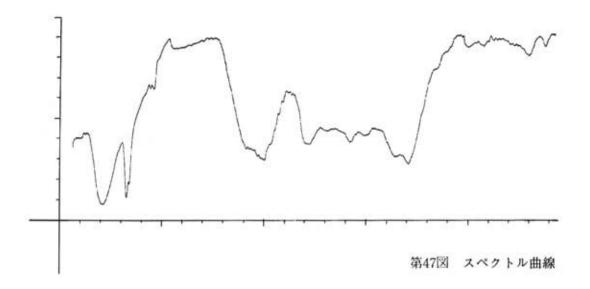
(2) 涂膜の同定

赤外吸収スペクトルの吸収曲線をみると (第45図) 硬化した漆塗膜の特徴である3400 cm-1付近、1700~1600cm-1、1460~1430cm-1、1265cm-1、1200cm-1付近に吸収がみられる。従って、明らかに漆塗膜であると断定される。

そしてこの漆塗膜は上記の各特性吸収が比較的はっきりみられる点から、劣化が極めて少くないことがわかるし、長年空気中、若しくは紫外線(日光)に曝露された場合に起る1700cm-1付近の吸収の増加が殆んどない点から、塗膜は殆んど光にあたらなかったか、酸素不足の環境下で、硬化したとも推定される。

事実この塗膜の外観は極めて、光沢がすぐれ、強靱性であって、とても、弥生時代の 漆塗膜とは考えられないほどである。

漆塗膜の初期重合過程は、包囲環境の湿度、酸素濃度によって著しく影響され、最適 条件下で硬化した場合には堅牢な塗膜になるが、条件が悪い場合には劣化しやすいと考 えられるので、このような完璧に近い状態で出土したのは、硬化環境が最適であり、し かも保存環境も前記したように、ほぼ理想的であったためと考えられる。



6. 発掘された木材の保存処理の実際

昭和46年9月、佐賀県三日月町土生遺跡第一次調査において多量の木材(製品)が出土したことによって木材処理の機運が高まったことは事実である。しかし、実際には各遺跡における木材の処理方法の不始末から乾燥させ、資料的価値を無にしてきているのが現状ではなかろうか。

昭和47年3月、奈良国立文化財研究所の沢田技官に「木器のP・E・G処理」について高説をたまわる機会を得たのは佐賀県立博物館においてであった。氏の理論は「木材に内蔵されている水分をP・E・Gと置換することによって樹脂加工する」ことであった。(もちろん、その時点で「真空冷凍乾燥法」による木材処理が可能であったが、設

備等に多大の費用を要することが懸念されたのであった。) そこでポリ風呂にP・E・G1800番を溶解して木材の処理に当ったのであった。(しかし、その結果は水分とP・E・Gの置換はなされなかった――処理方法に間違いがあったのかも知れない。)

その年の八月、県教委に文化課が創設されるとともに文化財係に赴任、同年10月土生 遺跡の第二次調査を担当することになったのである。

木材処理の実際(1)

木材処理についての研究機関は前述の奈良文研、奈良県元興寺文化財研究所などに限られ普及していないのが現状である。発掘調査は日毎に増加し面的にも拡大されつつあるとき「発掘現場で木材をいかに現形保存をなすか」ということが調査担当者の第一の課題であり責務であろう。結論から述べると、「土中に保存された状態に――環境にすれば木材保存は理論的に可能である。」簡単なことである。そこで、

- ①空気中に直接木材を露出させないこと。
- ②できれば密閉して空気の流通を阻止すること。
- ③木材の組織が破壊されている資料が多いので現形保存につとめること。
- ④腐蝕しない様にすること。
- などが調査現場等で処置しなければならない必須条件である。

これらの条件を満たす一つの処理方法として私は

- ①木材等が出土した場合は、すみやかにその資料の調査を終了させるように心掛ける。
- ②調査終了までは水分を補給し、ビニール等をいつも覆うようにする。
- ③調査が終了したら、ベニヤ板等で添木をつくり(板には必らず防湿加工をすること)、ポリエチレン袋に密閉するようにする。(できれば防腐剤を数滴落したい。) この処理方法をとれば数年間現状保持ができるのである。

木材資料を水に浸しておく方法があるが、その管理が難しいばかりか、資料の移動 (水流など)によって端々が破壊されていくのが現状であって保存処理方法ではさけたい ものである。

ともあれ、ビニール袋梱包、水槽水処理のいずれにしても、長期間における資料の保 存処理ではない。この間にあって前述の研究機関に依頼して永久保存処理を行うべきで あろう。

しかし、近々の木材資料の出土例は急激に上昇し、前述の機関だけでは処理し得ない ことは明白であろう。しからば地方における木材資料は?ということになるのである。

木材処理の実際(Ⅱ)

ともかく、発掘現場から持参した木製品 (木材)をいかに永久保存するか。この命題 の解決策を考慮するのも考古学を学ぶものの一つの課題ではなかろうか。 P・E・Gの水槽処理――暖かければ溶解し、寒いと溶液は凝固する。水槽内における溶液の密度は一定ではないはずである。溶液が凝固する状態に近まれば沈澱するし、溶液の上下の密度の差がある。要するに、温度を一定にしてP・E・Gの密度を一定にすれば、その処理の可能性は高まる。

そこで、溶液の温度を一定・濃度を一定に保つということは難しい問題であるが、この時点で「夕吹流恒温対流式木器処理器」を考案したのであった。昭和49年度末のことであった。

- ①水糟を用意する。
- ②電気ヒーターを入れる。
- ③水を攪拌するポンプを入れる。

水槽は、厚さ3cmの板材を用いて縦170cm、横170cm、深さ90cmにした。 内側にはトタンを張り防錆のためにバインダー液を塗布した。この場合、ステンレス張りにすることが望ましい。この水槽内に3枚の仕切り板を立てて4室となしその仕切板の片方を水槽壁面から30cmはなすことによって、4室が連結される。

そこで、第1室の奥の壁面にポンプを据え、第4室へ塩ビ管(直径10cm)を配し溶液を移送させる。第4室にサーモスタットのついた電気ヒーターを設置し、各室に水中温度計を配することによって水槽の完成である。

木材処理の実際(Ⅲ)

P・E・G4000番を溶解して水槽に入れ(濃度を測定しておく)運転を開始する。ビニール袋に梱包された木材を水洗して重量を測定しておく。用意された塩ビの小コンテナ(金網は錆びるので好ましくない。)に資料を数点入れ蓋をして水槽に浸す。この場合、資料の現状写真を撮影しておきたい。溶液の温度は摂氏40度から45度の間に維持することが大切である。高温すぎると板材等の薄い資料は極度に変形するからであり、又、低温であると溶液の濃度差が生じるからでもある。

水槽内の水分は刻々と蒸発するので、蓋を用い、更に2日に1度は水を補給して溶液 の濃度を一定にすることに努めねばならない。

現在資料を処理してから 150日間を経過した結果、柱材等を除きやや薄手の資料は、 P・E・Gと水分との置換が終了に近づいていることが判明する。 (重量測定により) こうして処理された木材は空気中に放置しても或る程度はその変形が防止されること

になったのである (硬度テストをしていないのでその実数を明らかにすることはできないが)。

とにかく、初期の目的である暫定的な木材保存処理が可能になったわけである。未だ 処理実験段階であるので処理方法に改良を加えていき、永久的な処理方法をと思考して いる。なお、現在のP・E・G液は木材を黒変させる欠点があるので、P・E・G液自 体の改良が望まれるとともに、処理後の漂白環元についても実験を続けていきたい。

Ⅲ 結 論

土生部落から石木部落にかける広大な範囲の中に土生遺跡群は存在する。国指定史跡 「土生遺跡」は弥生時代の集落址であり、その北部に位置する土生B遺跡は弥生時代の 集落址と墳墓および平安時代の墳墓からなる複合遺跡である。また土生C遺跡は弥生時 代の集落址と墳墓から形成された遺跡であると推定される。

1. 土器の分類

土生遺跡を含めた土生遺跡群から出土する土器の量は実に多量であるが土器はいくつかに分類することが可能である。ここでは朝鮮系土器と弥生式土器に大分類し、それぞれを更にいくつかに細分類したが、その一つの細分類においても更に細々分類が可能と思考されるが、ここでは細分類までにとどめておくことにした。

(1) 朝鮮系土器

日本における弥生式土器とは異質な土器群であって、南朝鮮における無文土器の系統 をひく土器群と黒色研磨土器の系統をもつ土器群とが認められる。

① 無文土器系土器

土生第 I 類無文土器 第 I 類無文土器は南朝鮮における無文土器と同様な形態をとる土器であって第 9 号住居址出土の襲形土器に代表されるものである。やや張りのある腹部がほぼ中央にあって、断面丸形の紐をめぐらせて口縁部をつくっている。

砂質を多量に含む胎土であって、焼成は良好である。器体は凹凸がはげしく箆による 撫で調整がなされたあと、口縁部は指による横撫によって仕上げる手法である。この時 期に板付 II 式大形土器の肩部に組み合せ式牛角把手の角先を上に向けて肩部に2個配す る技法も取り入れられている。

土生第Ⅱ類無文土器 第Ⅱ類無文土器は口縁部を除き、器形・調整等の手法は第Ⅰ類無文土器と変りはない。異るところは口縁部の構造である。即ち口縁部に付着させる 紐帯の断面が丸形から三角形状――嘴状に変化したことであって、第3号住居址出土の 襲形土器、或は第2号住居址出土の襲形土器にその類例を求めることができよう。しかし、第Ⅱ類無文土器も単一の形式ではなく、その口縁部の造り方にはいくらかの相異が 認められる。例えば土生B遺跡第22号貯蔵庫出土の襲形土器は、口縁部に粘土紐帯を附着することなく器体の最上端を外方に折りまげ口唇下面を指で上方に押圧して口縁部をつくり横撫で仕上げた土器(第Ⅱ類a)、器体の上端に粘土紐帯をまき、口唇下面を極端に強く上方に押圧し、口先の短かい嘴状を呈する口縁部を横撫で仕上げた土生遺跡第3号址出土の土器(第Ⅲ類b)、同じく第3号址出土の襲形土器のように三角形凸帯を 附着させて口縁部をつくり、口唇下面を弱く圧した後横撫で調整した土器(第Ⅲ類c)、そして、口縁内側の陵線がゆるやかな曲線をもった前群に比して、「逆L字状」に鋭角 な曲線をもつ第3号址出土の襲形土器に代表される土器群である。この土器群も口唇下面を指で弱く圧して整形した後に横撫で仕上げをしている(第Ⅲ類d)。

このように、第Ⅲ類無文土器はバラエティーに豊んだ器形とその製作技術を包含しているといえよう。第Ⅲ類 c および第Ⅲ類 d 無文土器には弥生式土器の製作技法の導入が考えられるのではなかろうか。

また、第Ⅰ類無文土器が単独に出土するのは第9号址のみであって、第2号址Aでは 第2類 c と共存している。第Ⅱ類無文土器のみを出土する第3号址においては、第Ⅱ類 b・c・dが出土している。

第9号址の第Ⅰ類土器に共件した組み合せ式牛角把手は、第22号貯蔵庫址などの第Ⅱ 類c無文土器にもそれが見られる。

② 黒色研磨土器

精選された粘土に極微細砂粉を少量包含する胎土であって焼成良好である。器面は箆で良く研磨され光沢を発するものもある。無文土器系土器を出土する遺構には必ずこの 黒色研磨土器が共伴するが、甕形土器は見られない。高坏形土器の坏部は漏斗形を呈す るものもあって特色ある高坏形土器である。また、壷形土器や器台形土器などがあるが その量は無文土器系土器に比して少ない。

第Ⅰ類無文土器は第Ⅱ類無文土器に先行することが帰納されるといえる。第Ⅰ類無文 土器に後続する第Ⅱ類無文土器の多様性は、時間差からくる現われではなく、同一時間 帯の中における製作技術の多様性にそれを見ることができよう。また、第Ⅰ類無文土器 は、第9号住居址出土のものにみられるように前期後半に比定される弥生式土器と共伴 するところから、それと同時期に、その技術が導入されたものと考えられる。第Ⅰ類無 文土器を出土する遺跡は、土生遺跡と同じく有明海沿岸である熊本市八幡塚遺跡、玄海 灘に面する福岡市諸岡遺跡や北九州原遺跡などが知られているに過ぎない。

朝鮮式支石墓が玄海灘に面する地域と有明海に面する地域へ同時期に伝播している事実からすると、朝鮮系土器に代弁される朝鮮の文化は玄海灘と有明海の双方から北九州地方にもたらされたものではなかろうか。このことは無文土器や黒色研磨土器の上からばかりでなく、金海式土器・漠式鏡・青銅利器などの導入と合せて思考されなければならないのであって、弥生時代における稲作技術等の導入に次ぐ第二次の大がかりな大陸文化の導入として受け取められるのであろう。

なお、朝鮮系土器は――少なくとも第 I 類無文土器は南朝鮮で、朝鮮人によってあるいは日本人によって作られたものであろうか。それとも、南朝鮮でその技術を修得して来た日本人によって吾が国で製作されたものであろうか。或いは渡来した朝鮮人によって製作されたものであろうか。日本と朝鮮における土器および粘土などの科学的分析のデータができれば更に新しい事実が判明するのではなかろうか。しかし第 II 類無文土器はわが国において日本人が製作した可能性が強いことが土器の形態から予測されるのではなかろうか。とにかく、弥生時代前期後半に無文土器製作の技術(人?)が導入されたのであるが、その製作技術の伝統は永続することなく分岐し、また弥生時代中期を迎える頃までに弥生式土器製作技術と融合して無文土器の終焉をみるものと推察される。

(2) 弥生式土器

弥生式土器においてもいくつかのタイプに分類される。

土生第 I 類弥生式土器 第 9 号住居址から出土した壷形土器をもって第 I 類土器とする。

土生第Ⅱ類弥生式土器 第4・5号住居址から出土する土器を第Ⅲ類土器とする。 この土器類が土生遺跡群の遺構から出土する土器の主体をなすものである。

土生第Ⅲ類弥生式土器 第7号住居址出土の土器群を当てる。木製盤や平鍬を出土 した貯蔵庫や小川址、あるいは土生 B遺跡の井戸址などがこれに入る。第Ⅲ類土器に次 いで出土量が多い。

土生第Ⅳ類弥生式土器 土生 B遺跡第18号貯蔵庫址出土の土器に代表されるものであって、丹途土器もある。

土生第V類弥生式土器 土生B遺跡16号貯蔵庫址出土の土器をこの類形にあてる。

2. 土生遺跡の時代

土生遺跡を形成した人々の農耕生活が始ったのは、朝鮮の文化を伴なった特徴ある生活の場が展開されるようになったころからと考えられる。これは無文土器の時代であり、また土生第Ⅰ類弥生式土器の時代でもあった。この時期は弥生時代前期後半の頃と推察される。従って、この類型の土器群を土生Ⅰ式土器と称する。第Ⅰ類弥生式土器を土生Ⅰ a 式土器といい、第Ⅰ類無文土器を土生Ⅰ b 式土器、および第Ⅱ類無文土器を土生Ⅰ b 式土器と呼称することとする。

土生 I 式土器は時間の経過の中で技術的に改良され融合しながら、第 II 類弥生式土器 を生成することとなったものと推察されるのである。この時期に土生の集落は急速に拡 大されたものと考えられる。この時期を土生 II 式土器の時代と称する。

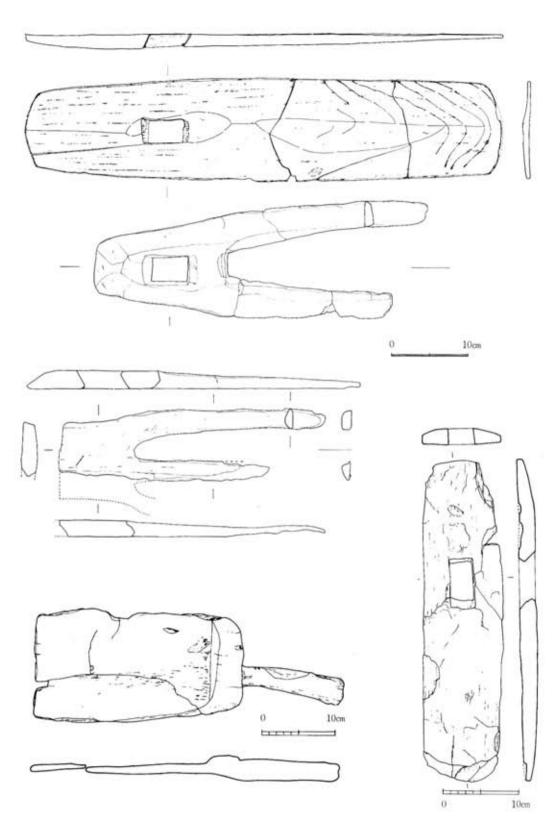
土生遺跡群の人々の生活が最高潮に充実した時期が、土生 II 式土器の時期であり土生 第Ⅲ類土器の生産された時期、つまり土生 III 式土器の時期であったものと推察されるの であって、それは弥生時代中期初頭から中期中葉にさしかかる頃までと考えられる。

土生Ⅲ式土器の時代が過ぎると急に集落はその数を減じ、土生第Ⅳ式土器(土生第Ⅳ 類弥生式土器)、土生V式土器(土生第Ⅴ類弥生式土器)の時期、つまり弥生時代も後期にさしかかるころ所謂土生遺跡は終焉したものと考えられる。

その後、数世紀を経て土生B遺跡においては、その北部一帯に平安時代の墳墓が形成されたものと推察されるのである。

3. 生活址

(1) 住居址、竪穴住居址のプランには一定した規範は認められない。隅丸長方形を基本とするが不整形である。時期差も認められずバラエティに富んでいる。しかし、特色ある住居址は土生 I 式土器の終末頃と推定される第 2 住居址であって、楕円形プランを併置させその端に貯蔵庫を付して一つの屋根で覆う形態をとっているのが注目される。



第48図 土生遺跡出土鍬類実測図(第1·2次調査分)

また、土生Ⅱ式土器を出土する第5号住居址は隅丸の台形状を呈する。住居址の床面には多数の広葉樹の木の葉(楠?)を敷きつめているのが一般的であって、除湿・防湿の工夫がなされている。

- (2) 貯蔵庫、住居址内の一隅に貯蔵庫(場所)を設ける場合と、屋外に独立させた棟 を建てて貯蔵庫(穴)を設ける場合とが見られる。
- (3) 柱址 家屋の柱は、直径10cm~15cm丸材を用いている。木材の先端は伐採したままの状態——鉛筆の如く先端が尖っているもの、或いはそれを二次的に加工してやや平面をなすものとがある。また先端部にはエツリ穴をもつものもある。

掘立柱の据え方には3つの方法がとられている。第1はそのまま埋め込んだもの、第 2は礎板や樹皮などを敷いた上に柱を建て埋め込んだもの、第3は柱の先端に柄をつく り横木をそれにはめ込んだもの、あるいは横木に切り込みを入れ柱の柄と組合せて埋め 込む手法がとられているものなどがある。第1・第2の手法は一般的に見られる手法で あるが、第3の手法は土生Ⅱ式土器の時代に伴って出現している。

4. 木 製 品

木製品には鍬・鋤などの農耕生産用具・織具などの製品加工用具、竪杵などの食料品加工用具・盤・高环・杓子などの食膳用具などがある。農耕生産用具は土生Ⅱ式土器に伴って出現している。この時期に─木製長手杓子が金属利器を駆使して細工されたみごとな形態と、黒漆を塗布して仕上げた様は高度なその技術が出現している。また、タブノキで製作された木製高坏も黒漆が塗布されておりその製作技術の高さを物語っている。

土生Ⅲ式土器の時期には各種の木製品が出土する。この中で第14号貯蔵庫の杓子・盤 および工房址から木製剣などの未完成品が出土したことは、金属利器を使用した木器製 作が土生遺跡で行われたことを物語るものであろう。また、小川址から出土した杓子形 木製品も未製品である。製作上の失敗から投棄されたものかは不明であるが、食膳用杓 子としては機能的にそぐわないと思考される。従って、身の部分に掘りかけがあるとこ ろを抉りその上面に皮をかぶせ、柄の部分へ玄を引いた楽器が起想されるのである。

5. 石製品

石製品には石庖丁・扁平片刃石斧・棍棒頭環状石斧(未製品)および砥石がある。 石庖丁には半月形を呈すものと、三角形を呈し両刃をもつ刃部がその二辺に付けられ、 両面穿孔による穴が2個配されている特色ある石庖丁とがある。また短冊形石庖丁もあって立岩系石庖丁と推定される。

6. ミニチュア土器

土生遺跡と土生 B遺跡の境界と推定される小川址から高坏・壷形土器など手捏になる ミニチュア土器が出土している。この小川址は出土する土器から土生Ⅲ式土器の時期と 考えられる。従って、これらのミニチュア土器もこの時期に使用されたものと推察され る。この土器群は農耕社会に伴う祭祀が既に行われていたことを物語るものである。こ の場合、太陽が化身されたとする雄大な天山が、その祭祀の対象となったのではなかろ うか。また農耕神である天山(太陽・水の神)への祭が終了した時点で祭祀用具を川中 に投棄したのではないかとも推察されるのであって貴重な存在といえよう。

このように、土生遺跡を土器を中心に時代的にまずとらえることに主眼をおいた。 ついで、その各時期に伴う出土品――特に木製品に留意した。中でもミニチュア土器 の出土の上限が弥生時代中期までさかのぼる事実が判明したことは意義深いものである。 厖大な資料と木器処理・行政事務と忙殺されながらの短期間における資料の整理を余 儀なくされたが、大方遺漏のない土生遺跡群の全貌を示しているものと思う。

(昭和52年3月22日記)

【付記】

- この報告書(第2部)は昭和51年度に国庫補助金を得て実施した圃場整備事業にかかる発掘調査記録である。
- 2. 土生遺跡第5号住居址出土の木製漆器の理科学的分析について国立科学博物館の山 内文氏、並びに東京国立文化財研究所の見成敏子氏の玉稿をいただいた。厚く御礼 申し上げる。
- 3. 遺物実測・整図は木下巧が担当した。
- 4. トレースは主として木下巧・川頭久美が当り、服部二朗・原田保則が協力した。
- 5. なおこの報告書に掲載した土生遺跡第1次調査分の鍬類の実測は天本洋一・原田保 則が当り、トレースは松尾直子・藤原新子が協力した。
- 6. 写真関係および執筆・編集は木下巧が担当した。

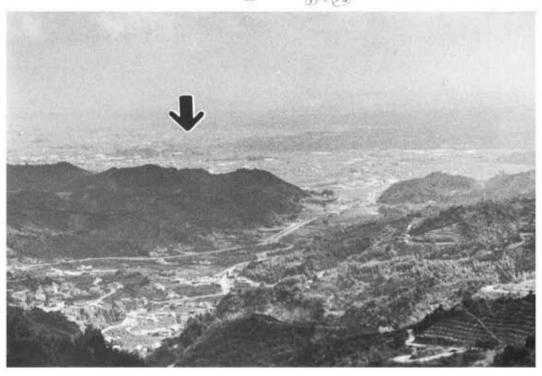
第 2 部

図

版



(計870600) 1. 土生遺跡から天山を望む



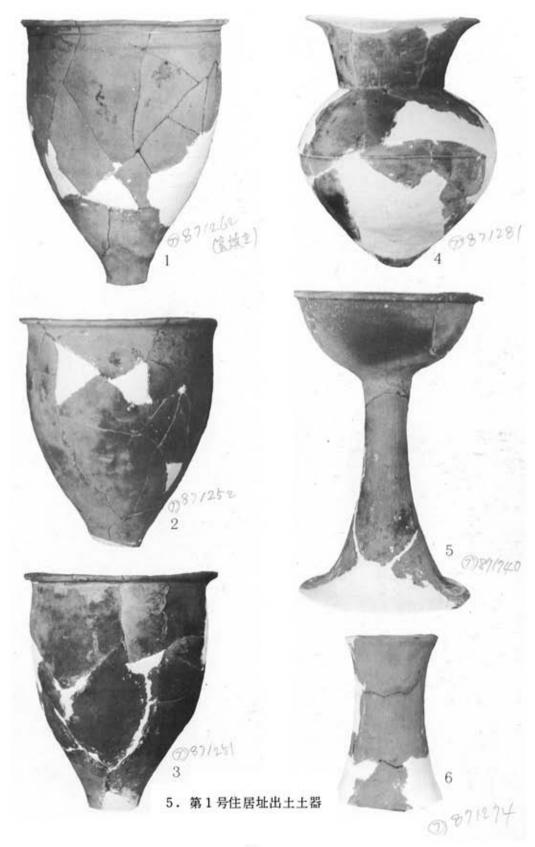
2. 土生遺跡の遠景



(3) 37059733 (3) 47140, 871692 3. 第1号住居址



4. 第1号住居址土器出土状況(東南隅)





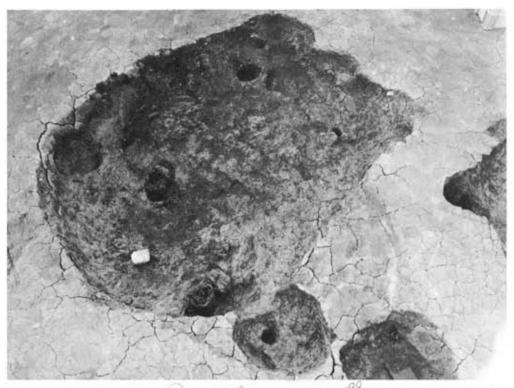
① 87/543 ② 8905 28 6. 第2号住居址



@ 87 1547



8. 第2号住居址出土土器



@97/540 B

® 87° 89 9. 第3号住居址

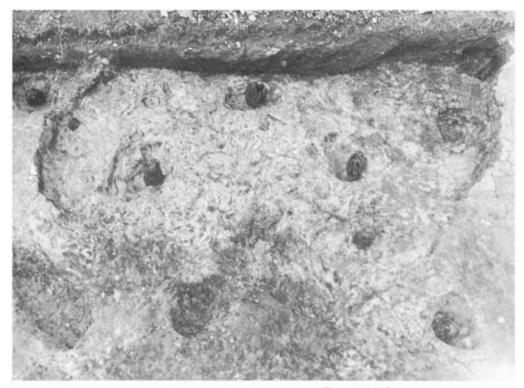


10. 第3号住居址土器出土状况





11. 第3号住居址出土土器



③ 97 /5 4 / 12. 第 4 号住居址



台 全 7/53 13. 第 4 号住居址土器出土状況



14. 第 4 号住居址出土土器





80870598-018

(2) 87/507

15. 第5号住居址



16. 第5号住居址



17. 黒漆高坏出土状況 (木製)

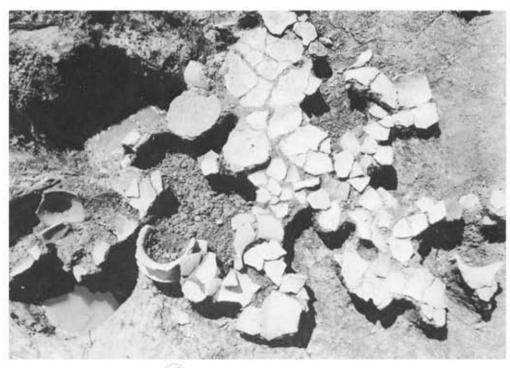
D 37/511-



B) 870598-12 (B)

@ 871527 871697

18. 第9号住居址

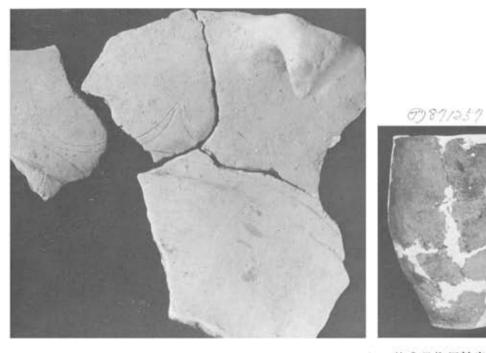


(87/331

19. 第9号住居址土器出土状況

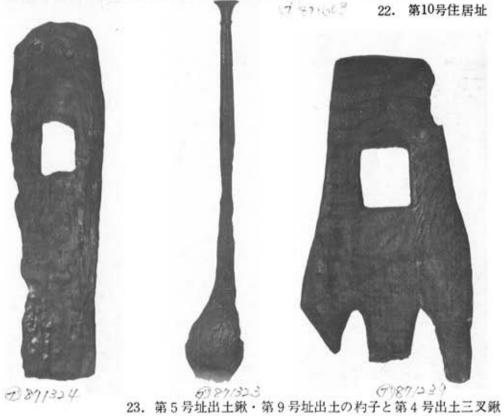


20. 土器の出土状況 (第4号址)



21. 第9号住居址出土の土器







(2) 87/52

24. 第13·14号貯蔵庫



03871503

25. 第13号址鍬の出土状況と鍬



@ 87/722



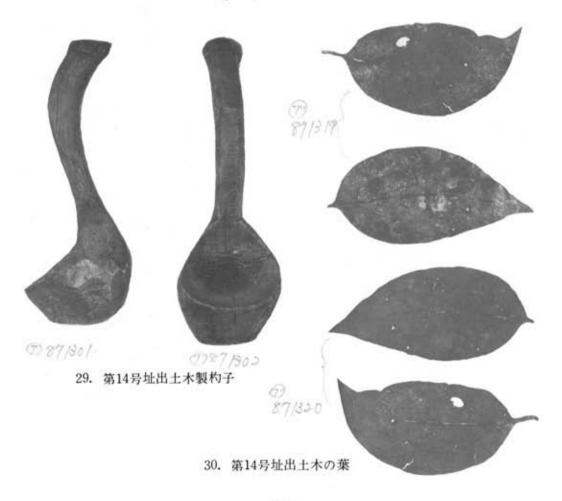
9871515 26. 第14号貯蔵庫



27. 第14号貯蔵庫盤·柱出土状況



28. 第14号貯蔵庫出土木製盤





871593, 871725

31. 第16号貯蔵庫



D871594,871926

32. 第16号址木製織具出土状況



@ ghibo : 187/727

33. 第16号址遗物出土状况



(35)870 600-(31)

34. 第16号址織具の出土状況と織具



087/327







30 870600-(H) , @87/599

37. 小川址と楽器形木製品の出土状況



9) 87/606

3 8760b



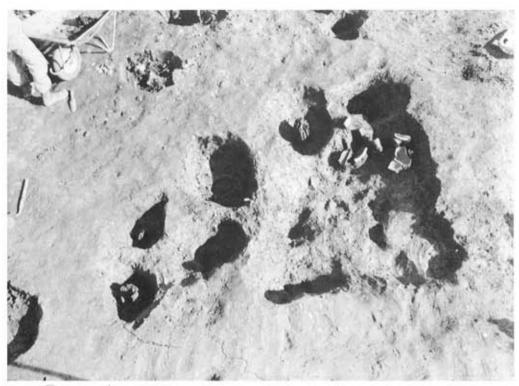


087/3/0

40. 土弾 (第2号址出土)

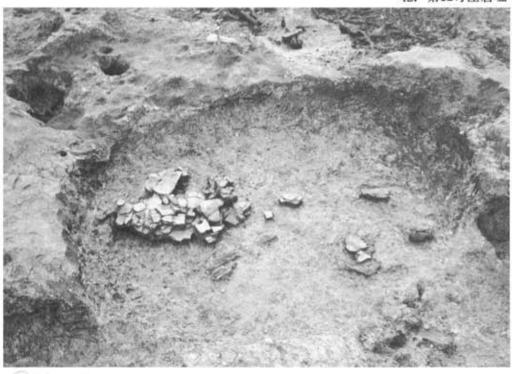
39. 祭祀遺物 (小川址出土)

⑦8/13/0 41. 滑石製石環



@ 877454

42. 第12号住居址



9871488

43. 第19号住居址



90871634, 87166

44. 第22号住居址



G1) 37/654

45. 礎板の状態



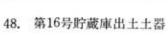
46. 第16号住居址出土土器



47. 第18号住居址出土土器

@87/126







49. 第17号貯蔵庫出土土器



50. 第18号貯蔵庫出土土器



60871260



51. 第20号貯蔵庫出土土器



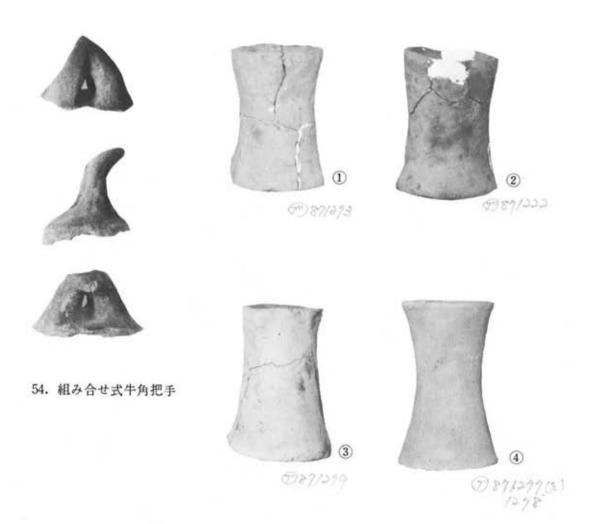
871484

52. 第22~24号住居址・第22号貯蔵庫の状況

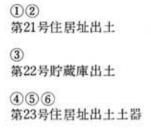


871438

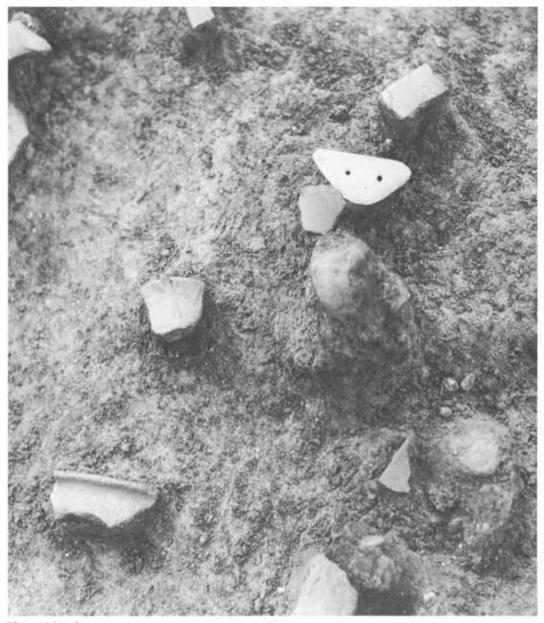
53. 組み合せ牛角把手の出土状況



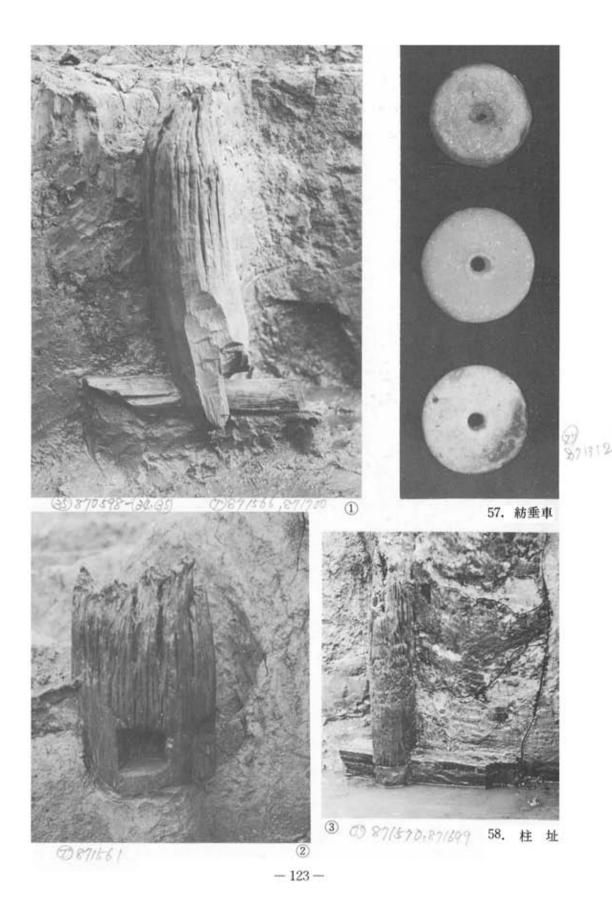








②87/63/ 56. 石庖丁出土状况



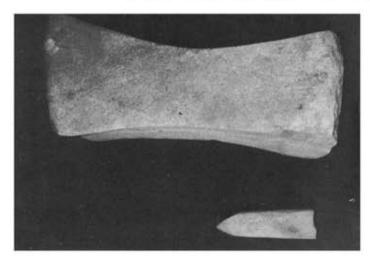


27/6/1

59. 井戸址(土生B'遺跡)







60. 井戸址内出土砥石 (最大のもの)



D871621

61. 第14号貯蔵穴



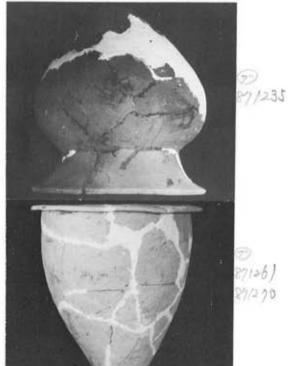
- 125 -





D 871669

64. 合口甕棺



87126) 87/290



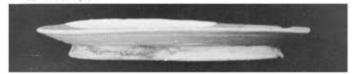
D87149/.

65. Pit 1址



9871492

Pit 3 址土器出土状況



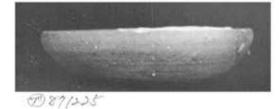
67. Pit 2出土土器

68. Pit 1 址出土土器



69. Pit 1出土土器

@871234

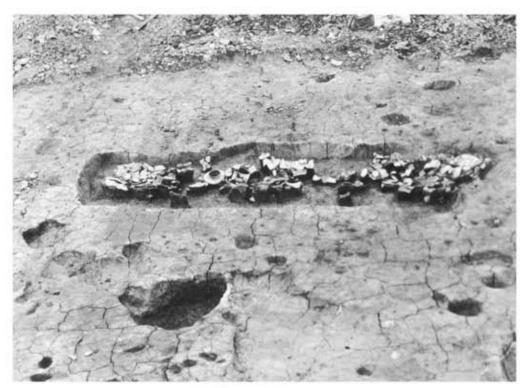


70. Pit 2 出土土器

5787/295



9871219

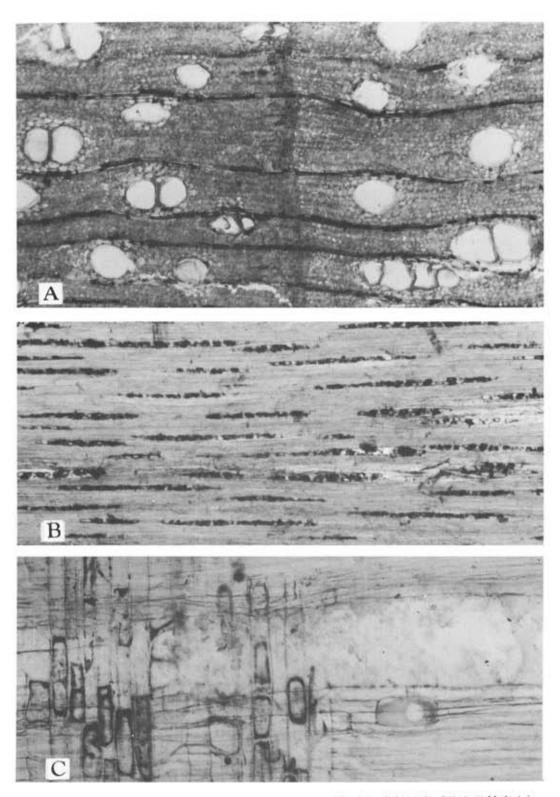


D87/675

71. EW-3 T大形土拡墓



7) 87/682 72. 土拡内土器出土状況



73. 高坏木材写真(第5号址出土)

第 3 部

東宇木遺跡

一 唐津市 鏡・久里地区文化財調査報告書第2集-

本文目次

(1)	発掘調査団	136
(2)	発掘調査の経過	136
Ⅱ・歴	史的環境	139
Ⅲ.東	宇木遺跡	140
(1)	遺 構	142
IV. 東	宇木遺跡の遺物	143
(1)	土 器	143
(2)	石器(石製品・木製品を含む)	150
v. t	す ぴ	153
	挿 図 目 次	
	77 E F X	
第1図	唐津周辺図	138
第2図	鶴崎丘陵周辺地形図	
第3図		140
第4図	東宇木遺跡 A · B区 · · · · · · · · · · · · · · · · ·	
第5図		141
NI O I	井戸址実測図	141 142
第6図	井戸址実測図	141 142 143
	井戸址実測図 東宇木遺跡 D ~ L 区配置図 土層断面図	141 142 143 143
第6図	井戸址実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	141 142 143 143 144
第6図 第7図	井戸址実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	141 142 143 143 144 145
第6図 第7図 第8図	井戸址実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	141 142 143 143 144 145 147

第12図	その他の土器実測図	149
第13図	石器実測図・・・・・	151
第14図	石器・その他実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	152

図版目次

図版1.	遠景(飯盛山より)	158
図版2.	A 区 全景	158
図版3.	A 区 土器出土状況	159
図版4.	土師器壷(二重口縁)出土状況	159
図版5.	井戸址検出状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	160
図版 6.	黑色土器出土状况	160
図版7.	管玉出土状况	161
図版8.	石鏃出土状況	161
図版 9.	弥生式土器	162
図版10.	土師器+宛・坩	163
図版11.	土師器高杯・その他の土器	164
図版12.	土師器壷・甕・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	165
図版13.	石 器	166

Ⅰ 調査の経過

1. 発掘調査団

鏡、久里地区の圃場整備事業は、昭和48年度から実施されており、現在までのところ 半田川右岸部周辺 120haが終了している。佐賀県教育委員会は、唐津湾周辺における考 古学上の重要性を考慮して、当事業の実施に先行し、昭和47年度53ha、48年度75ha、49 年度80ha、50年度50ha、計 258haを対象とした確認調査を実施してきた。その際確認さ れた萬麓、寺の下遺跡は、48年度発掘調査を実施し、山添遺跡は、49年度工事区域から 除外する措置がとられた。

51年度は、唐津市宇木字東宇木の鶴崎丘陵周辺から宇木川右岸にいたる、44haの圃場 整備事業が実施されることとなった。

そこで、県教委はこの地区の発掘調査の主体者となり、事務局を文化課において調査 を実施することになった。発掘調査団は次のとおり編成された。

調査主任 木下 巧 県教委文化課文化財調査係

調 査 員 服部 二朗

"

原田 保則

嘱託

協 カ 唐津市教育委員会、唐津農林事務所、 久里・ 鏡地区土地改良区、地元 有志

2. 発掘調査の経過

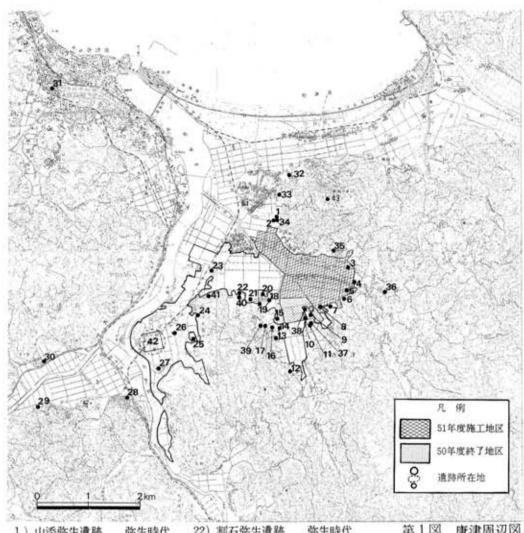
発掘調査は、昭和51年11月から翌年1月にかけて実施した。その結果、縄文時代から 古墳時代における遺物包含屬が確認された。

発掘調査日誌抄

- 11 · 5 器材搬入
- 11.6 丘陵縁辺部にトレンチ1を設ける。
- 11・11 T2、3、4を設ける。耕作土下は地山であって、水田造成時に削平されているものと思われる。
- 11・12 T5の調査。丘陵の裾部の傾斜面がでる。T1内の井戸址と思われる遺構を北側へ拡張する際土器群に当る。
- 11・15 土器群を拡張する。
- 11・20 作業員確保が、ミカン収穫時のため困難。
- 12.6 T1 北側の拡張部分(A区)を掘り下げる。
- 12・7 A区北へ地山の傾斜を考慮し、B区を設定。
- 12.8 井戸址掘り上げ。B区掘り下げ。T1南側にC区設定。
- 12·9 C区掘り下げ。T5隣りの水田にD区設定。

- 12・14 E区の掘り下げ終了。
- 12・15 A・B・C区、井戸址写真撮影。F区以降を4m×8mのグリッドとする。道路上の仮BM(7.354m)から地区内に2ケ所BMをひく。
- 12 · 16 雨天中止
- 12 · 17 D · F 区掘り下げ。A · B 区、井戸址の実測にとりかかる。
- 12·18 H区設定。
- 12·21 J区設定。A·B区実測終了。
- 12 · 22 A · B 区遺物のレベル測定。
- 12・23 L区設定。J区より管玉、黒色土器出土。D・E区写真撮影。
- 12・24 A·B·C区の平板測量。H·J·L区掘り下げ。
- 12·25 A~C区の遺物運搬。
- 12・26~1・5 年末・年始のため作業中止。
- 1・6 G・I 区を設定、H区拡張。T 2~5の圃場平板測量。
- 1・7 K区設定、J区拡張。D~L区の圃場平板測量。
- 1・11 K区より獣骨類出土。
- 1 · 13 L区まで掘り下げ終了。
- 1·14 実測開始。
- 1 · 17 写真撮影。
- 1・18 平板測量終了。各区遺物とりあげ。
- 1・19 土層断面図作成。BM1・2の再点検。
- 1 · 20~3 · 20 遺物整理。

(服部二朗)



1)	口行行为生力	沙王四十八
2)	山添甕棺 〃	4
3)	鶏の尾・井ケ田。	4
4)	撰果場遺跡	*
5)	寺の下 *	古墳時代
6)	岸高支石墓	弥生時代
7)	葉山尻支石墓	4
8)	萬麓遺跡	4
9)	鎮崎弥生遺跡	4
10)	森の下遺跡	古墳時代
11)	泊硝酸生谱跳	弥生時代

9) 鎮崎弥生遺跡	4
東京美 10)森の下遺跡	古墳時代
11) 迫頭弥生遺跡	弥生時:
12) 字木・平尾遺跡	*
13) 森田支石墓	4
14) 宇木・汲田遺跡	*
15) 汲田貝塚	*

16) 瀬戸口支石墓

20) 外圍弥生遺跡 → 21) 田島弥生貝塚 →

22) 割石弥生遺跡 弥生時代 23) 中原弥生遺跡 24) 石ケ崎弥生遺跡 25) 広首弥生遺跡 26) 久里小弥生遺跡 27) 城弥生遺跡 28) 中尾弥生遺跡 29) 石志門田遺跡 30) 千々賀弥生遺跡 31) 桜の馬場遺跡 32) 島田塚古墳 古墳時代 33) 正願寺遺跡 34) 樋の口古墳 35) 杉殿古墳 36) 宮の上古墳 37) 迫頭古墳群 38) 塚サマ古墳

第1図 唐津周辺図

歷史時代

39) 大長崎山古墳群

42) 久里条里遺構

40) 割石古墳群

41) 部田古墳

Ⅱ 歴史的環境

佐賀県の唐津市近郊は、古代における大陸文化の流入地点であって、古来より考古学 界が注目してきたところである。

魏志倭人伝には、「戸数4千余戸、山海に浜して居り、草木茂盛して行くに前なる人を見ず、魚鰒を捕えることを好み、水は深浅となく皆沈没して之を捕る」と記されていて、3世紀頃における唐津湾周辺(未慮国)の状態を伝えている。

松浦川を境にして西方の高原地帯を形成する上場地方と東方の低地帯をなす下場地方 に唐津は分けることができる。上場地方は現在でも畑作を主体とする農業であって、佐 賀県のチベットと俗称されている地域である。

下場地方には、特に宇木川中流域と半田川に狭まれる地域に縄文晩期から弥生中期の 遺跡が密集し、中でも青銅器を共伴する宇木汲田遺跡・柏崎遺跡・鶴崎遺跡などが分布 している。弥生中期以降になると松浦川の中流域にまで遺跡は面的に拡大していく様相 が認められる。

調査区近隣には、史跡葉山尻支石墓、蔥麓遺跡および高岸支石墓が知られている。

古墳時代を迎えると畿内的様相を呈する谷口古墳(前方後円墳)・島田塚(前方後円墳)火の口古墳などが築造され、副葬品も豊富であることが特色である。また、この時期の住居址として寺ノ下遺跡がある。しかし、古墳時代後期の遺跡は夕日山山系および鏡山山系の麓に横穴式石室を内部主体とする円墳が点在しているに過ぎない。この調査区近隣には葉山尻支石墓の近くに横穴式石室をもつ円墳が2基ある。

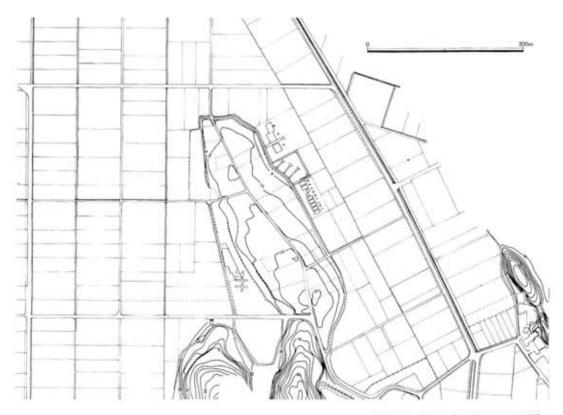
稲作農耕を主体とする弥生文化の伝来地点としていち早く農耕文化を摂取したはずの 唐津における弥生文化が独自性をもつことがなく、また、4世紀後半における朝鮮出兵 を契機として佐賀平野よりも早く畿内文化に接し神功皇后伝説・巾振山伝説などを有し ながらこの地方に強大な政治圏を形成し得なかった要因は何にもとづくものであろうか。 その要因の一つは圃場の狭少さに基づく経済力の弱さにあるのではないかと考えられる。 その意味で、鏡・久里地区の圃場整備事業に伴う埋蔵文化財の調査では、この点につい ても解明の手がかりが得られないものかと考えられるのである。 (木下 巧)

Ⅲ東宇木遺跡

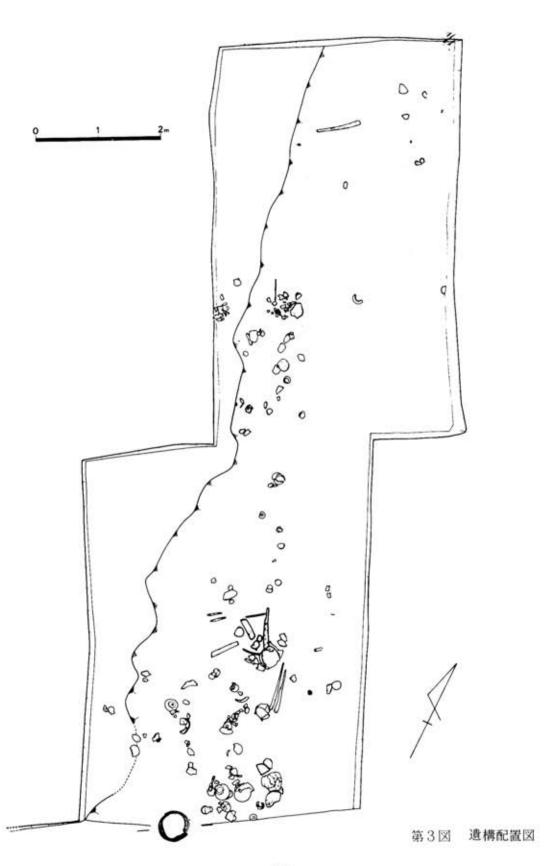
東宇木遺跡は唐津市大字宇木字東宇木に所在する。飯盛山から北に向って延びる舌状台地——通称鶴崎丘陵の北方先端付近東麓の水田に位置する。鶴崎丘陵は標高12m程度の低丘陵で東側に大森川が、西側に宇木川が流れている。水田面は標高7m程度である。現在この丘陵は裾部を削平して、水田とし、丘陵上は蜜柑畑として利用されている。

調査はこの削られた水田部分に5本のトレンチを設定するとともに、基本的に幅4m×8mのグリット方式をも伴せた調査方法をとった。その結果、東字木遺跡は黒色堆積土層中に遺物を包含するものであることが判明した。

第1トレンチを設定した水田にA~C区を設けた(第3図参照)。A~C区では、井戸跡と土師器を主体とする土器類の出土があった。また、A区中央付近よりは角材等の出土もみられたが、その性格は不明である。第2トレンチから第4トレンチまでの田からは何の遺構もまた包含層も確認されなかった。D区を設定した際、必要に応じその北側に第5トレンチを設け、包含層の深さを確認した。D~L区(第5図参照)では、D・E区で丘陵裾線が東にふくれ、F~K区までが西に彎曲し、さらにL区では東にふくれる傾向を示す。D・E区を除いた全区で出土した遺物は裾線外の厚い黒色堆積土から出土した。



第2図 鶴崎丘陵周辺地形図



-141 -

(1) 遺 構

遺構として確認されたものには、第1トレンチの井戸址1基と、K区より検出された 8個の柱穴状のピットのみである。このピットは不揃いであり、柱穴とはなり得ないと 思われるので、ここでは井戸址について概述する。

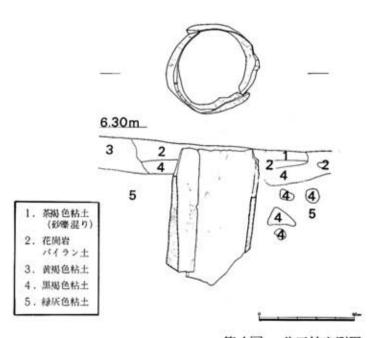
井戸址

井戸址は第1トレンチからA区の間に検出された。井戸枠は長さ約70cm、直径約45cmの木材を縦に2分し、それを厚さ4cmまでくり抜いた後に、両者を合掌させて造ったもので、直径約40cmの円形を呈する。枠材の内面は滑らかに調整され外面には樹皮が残っている。また、2枚の枠材はともに下端部を逆M字状に加工し、内側を尖らしている。また、井戸枠設置の際の掘込み跡が検出されなかったことからみて、この井戸址は掘込み形を枠ぎりぎりに掘ったものか、あるいは枠を打ちこんで設置したのではないかとも考えられる。

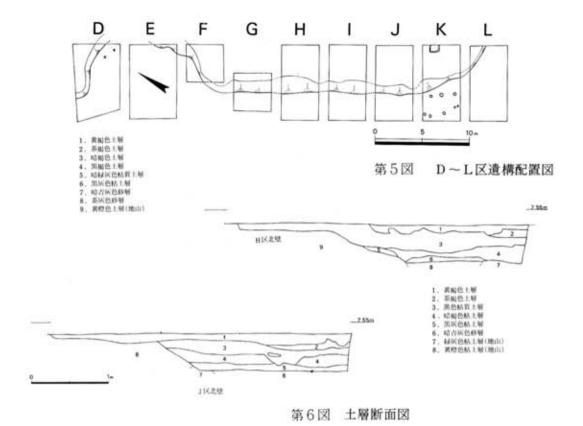
井戸枠の中から弥生土器と思われる小破片が検出されたが、流れ込みの可能性もあり、 また、この井戸址に伴う遺構も検出されていない現段階でこれの時期決定を行なうべき ではないと思われる。

土 層

1層は耕作土下のもので、丘陵裾部を削平したときの土が入っており、攪乱されている。遺物は暗青灰色砂層及び茶灰色砂層の上部以上から検出できる。地山は黄褐色粘土層である。 (原田保則)



第4図 井戸址実測図



Ⅳ 東宇木遺跡の遺物

東字木遺跡から出土した主な遺物には、縄文系土器、弥生式土器、土師器、須恵器などの土器類、石器類、それに木製品などがある。これらの遺物は全て黒褐色から黒色の 堆積土層(一部茶灰色砂層)より検出されており、土器は全体的に摩耗が著しい。

(1) 十 器

弥生式土器 (第7図·図版9)

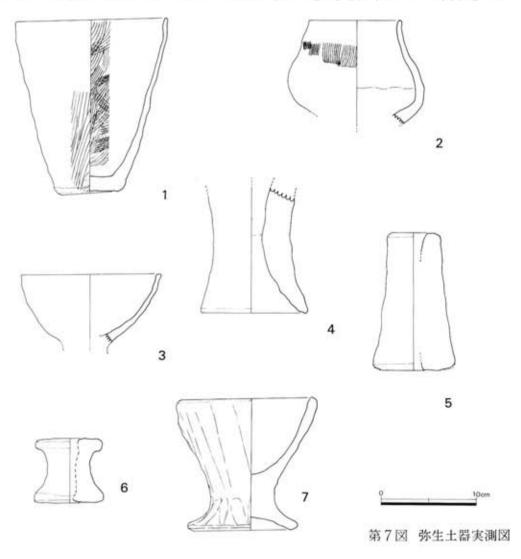
要形土器(第7図1・図版9-4) H区より出土した。平底の底部と直口の口縁部をもつ甕形土器である。体部の外面下半は粗い刷毛目、内面は口縁部から底部付近まで細かい刷毛目調整を行なっている。胎土には砂粒を含むが、比較的緻密であって、灰褐色を呈する。復原口径16.0cm、底径 6.7cm、器高18.2cm。

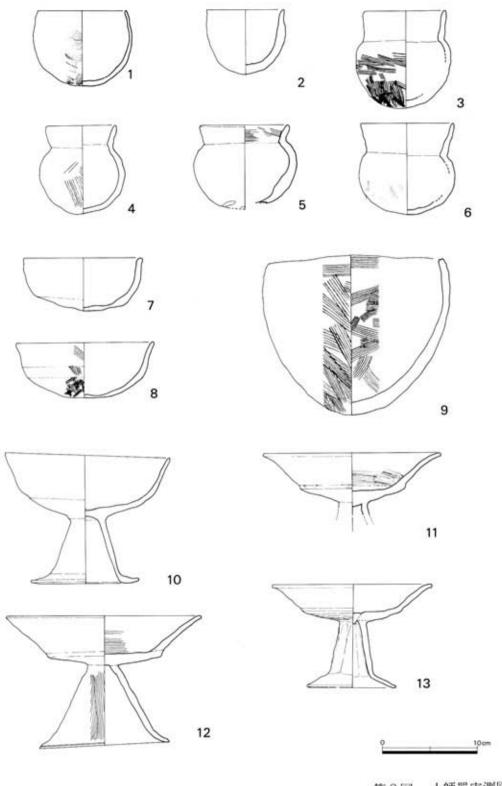
電形土器 (第7図2・図版9-2) H区より出土した。底部を欠損するが、球形の体部に内傾する頸部と直口の口縁部をもつ形態である。体部の器壁は厚ぽったい。体部外面上半の一部に刷毛目調整痕、内面には指押え痕が残る。赤褐色を呈し一部に黒斑部分がある。砂粒を多く含む胎土である。口径9.8cm、最大胴部径14.4cm。

高坏形土器(第7図3・図版9-1) J区より出土した。 脚部を欠損しているが高坏と思われる。 坏部は内骨気味にひらく境形をなす形態で、口縁上端部は丸味をもつ。器面の調整はおそらく撫(横位)によるものと思われる。 外面が黒褐色で内面は赤褐色を呈する。 胎土には砂粒を多く含む。 口径15.0cm。

台付鉢形土器(第7図7・図版9-3) H区より出土した。鉢形土器に脚台を付けた形態である。器面の調整は、鉢部内面が撫、外面が箆による縦位の削り、脚台部は内外面とも指押えと撫によるものと思われる。外面の指押えは1ケ所に左・右から2度行なっており全体的に右斜めに押されている。白灰色を呈する。胎土には砂粒を含む。口径14.6cm、台部径11.5cm、器高13.9cm。

器台形土器(第7図4・図版9-7) D区より出土した。鼓形をなす形態であって、内外面とも指押えによる成形を行なっている。赤褐色を呈し砂粒を含む胎土である。 支脚形土製品A・B A(第7図5・図版9-6) F区より出土した。円筒形を呈するが裾部は上部よりも広く穴が上端から下端へ通る。横断面はやや楕円形を呈す





第8図 土師器実測図

る。器面は撫調整されたと思われる。胎土には砂粒を多く含み、赤褐色を呈する。器高 14.5cm。B(第7図6・図版9-5) H区より出土した。糸巻状をなす形態で穴が 上端から下端へ通る。器面は撫調整されたと思われるが、成形時の撫つけが不充分で、 端部が整っていない。赤褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。器高 6.8cm。

以上の弥生式土器はその特徴から弥生時代後期に属するものと思われる。

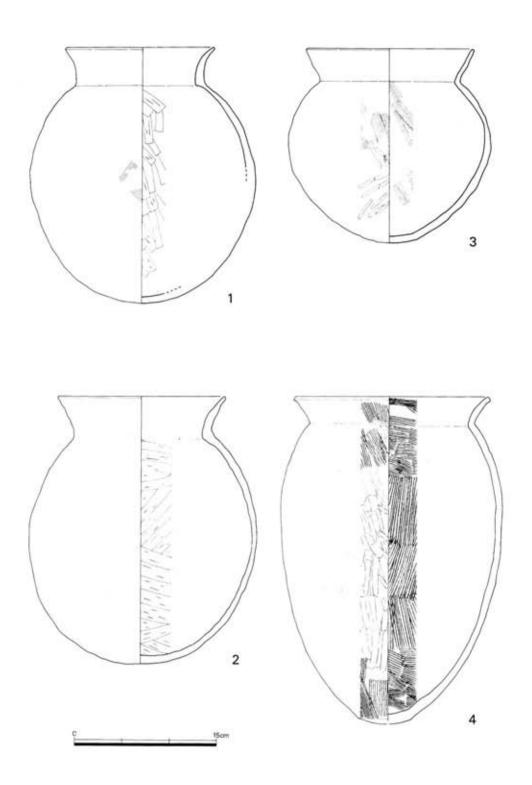
土師器 (第8~10図·図版10~12)

坩形土器A~D A (第8図1・2・図版10−2・6) ともにA区より出土した。 丸底で境形をなす形態である。口縁部は内側へ内傾し、端部を丸くおさめている。外面刷毛目、内面撫調整を行なっている。外面が赤褐色、内面が薄灰白色を呈し、胎土には砂粒を少し多めに含む。②は口縁部が外反し、端部がとがっている。手づくねとみられる。茶褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。口径 8.0cm、最大径 8.3cm、器高 6.9cm。B (第8図3・図版10−4) A区より出土した。ほぼ直立する口頸部と球形・丸底の体部をもつ形態である。体部外面は肩部付近で横方向、底部付近は斜、縦方向の刷毛目調整を行なっている。口径 8.7cm、最大径10.1cm、器高10.4cm。C (第8図4・5・図版10−7・3) それぞれA区・B区より出土した。短く外反する口頸部と球形・丸底の体部をもつ形態である。④は体部外面に斜方向の刷毛目調整、⑤は口縁部内面に横方向の刷毛目調整を行なっている。底部は焼成後の穿孔の可能性がある。④は口径 7.5cm最大径 9.0cm、器高 9.4cm。D (第8図6・図版10−8) B区より出土した。外反する口頸部に半球形の体部がつくもので、最大径と口径がほぼ同値となる形態である。外面には刷毛目調整が行なわれている。口径 9.9cm、最大径10.1cm、器高 9.7cm。

境形土器(第8図7・8・図版10-1・5) ともにA区より出土した。丸底気味の薄い底部と外反する口縁をもつ形態である。⑦の調整は摩耗のためよくわからないが、体部外面の一部に刷毛目が残る。また®は体部外面上部に刷毛目を数ケ所に施し、下半部には粗い刷毛目調整を施す。外面は暗褐色、内面は赤褐色を呈する部分もある。胎土には砂粒を含む。口径14.3cm、器高 5.9cm。

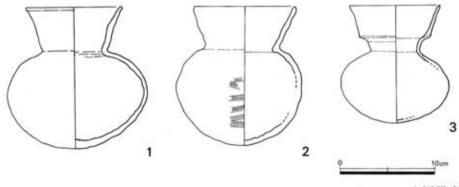
鉢形土器(第8図9・図版11-3) J区より出土した。丸底に内傾する口縁をもつ形態であり、特徴として口唇部上面に溝を有するものである。調整は口縁部付近に横方向の刷毛目、体部以下は斜及び縦方向の刷毛目を施しており、2~3種の刷毛を使用したと思われる。焼成は良好であって、薄赤褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。口径18.5 cm、器高16.9cm。

高坏形土器A~C A(第8図10・図版11-8) A区より出土した。坏部は内特 気味に外反する口縁部をもち身の深い形態である。脚部は柱状部が下方で広がり、さらに裾部で屈接して外反する形態である。調整は摩耗が著しいため不明。薄赤褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。口径17.1cm、裾部径11.3cm、器高13.5cm。 B(第8図11・12・図版11-5・7) それぞれB区・A区より出土した。坏部は大きく外反する形態で、脚部はラッパ状に広がり、裾部でゆるやかに外反する形態である。①は坏部内面に横方向の刷毛目、脚部外面に縦方向の刷毛目調整を行なっており、黄褐色を呈する。胎土に



第9図土師器甕実測図

要形土器(A~C) ①・②はA区より、③・④はそれぞれJ区・D区より出土した。A(第9図1・2・図版12-6・7) 丸底で球形に近い体部に短く外反する口縁のつく形態である。調整は内面が左回りの横方向、あるいは斜位のヘラ削りが行なわれており、①の外面は刷毛目ののち撫調整を行なっている。また②の外面は叩きを行なったようであり、明褐色を呈し、体部下半より底部にかけて煤の付着がみられる。胎土は砂粒を多く含み粗い。口径17.7cm、最大径24.0cm、器高29.0cm。B(第9図3・図版12-4) 丸底の底部にほぼ偏球形の体部と短く外反する口縁をもつ形態である。全体的に摩耗が著しいが、体部外面は叩きのあと、上半は刷毛目で調整を行ない、内面も

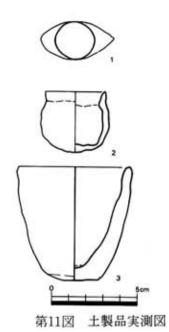


第10図 土師器壷実測図

全体的に下から上へ斜位の刷毛目を行なっているようである。暗褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。口径17.8cm、最大径21.5cm、器高20.5cm。 C (第9図4・図版12-5) 平底気味の丸底で半球状を呈する長胴の体部と短く外反する口縁をもつ形態である。調整は刷毛目のあと指か箆状のもので調整されている。暗褐色を呈し、体部外面の上半部に煤の付着がみられる。胎土に砂粒を含む。口径21.0cm、最大径23.5cm、器高34.5cm。

電形土器A・B これは全てA区より出土した。A(第10図1・2・図版12-1・2) 丸底で球形の体部と外傾する頸部をもつ形態である。内面の調整は体部中位まで箆削りを行なっている。①は外面と内面の頸部までに丹塗りを施している。胎土は赤褐色で砂粒を含むが、精緻である。口径10.0cm、最大径14.8cm、器高15.0cm。B(第10図3・図版4・12-3) 丸底で偏球形の体部に短い頸部と二重口縁をもつ形態である。調整は摩耗のためよくわからないが、体部外面中位上側に刷毛目が一周するようである。内面は撫調整で仕上げている。口径9.6cm、最大径11.5cm、器高12.6cm。

今回出土した土師器は古式土師器を中心に出土しており注目される。

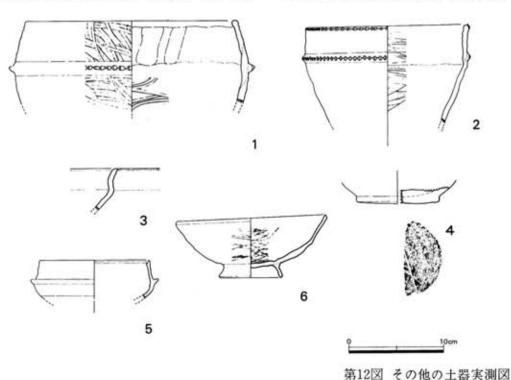


その他の土器類 (第12図・図版11)

縄文系土器(第12図1~4) ①・②(図版11~2)・③はL区より、④はD区より出土した。③は浅鉢形土器の破片で、いわゆる黒色磨研土器といわれるものであって、胎土には雲母片の混入も見られる。器面は磨かれている。①・②は甕で、口縁あるいは体部屈接部付近に凸帯をめぐらし、箆状または指などで刻み目を施した形態である。①の調整は外面が貝穀条痕で、内面が最大部付近より下は条痕を施したあと、口縁部まで撫ている。②の調整は凸帯より下は摩耗が著しく不明だが、口縁部付近は貝穀条痕のあと撫たようであり、内面は口縁から貝穀条痕を施し、その後撫ているようである。②の胎土は白灰色を呈し、砂粒を含む。口径17cm。④は底部で外面に木葉文がみえる。

須恵器坏形土器(第12図5) B区より出土した。立ちあがりは垂直に近く、口唇部に溝を有するものである。体部下半は篦削りが行なわれたと思われ、上半から内面は横撫で調整している。白灰色を呈し、胎土に砂粒を含むが精緻である。復原口径11.6cmで須恵のⅡくらいに編年できるものと思われる。

黒色土器境 (第12図 6 · 図版 6 · 11-1) J区より出土した。内外面とも黒色を



-149 -

呈す、いわゆるB類に属するものである。調整は内外面とも箆磨きが行なわれており、 内面には箆先端による傷のようなものが数本残る。また高台の取り付けは、内側にはり つけの跡が明瞭である。胎土は黒色を呈し、砂粒を含むが精緻である。口径15.6cm、高 台径 6.8cm、器高 6.3cm。

以上、出土土器の概略を述べたが、土器片はそうとうの数量があり、紹介したのはその中の残りのよい、ごく僅かなものである。須恵器、瓦器の類も全体の中では少量であるが出土している。

土製品(第11図 $1 \cdot 2 \cdot 3$) 土製品としては、①のC区より出土した投弾と、B区より出土した②のミニチュア、それにH区より出土した③(図版11-4)のぐいのみ形の手づくね土器がある。①は長さ 4.3cm、最大径 2.3cm、②は口径 3.5cm、器高 3.6cm。③は底径 2.9cm、器高 6.8cm。

(2) 石器 (第13図·図版13)

石斧(第13図1・2・図版13-4・3) ①はK区より出土した。完形品で蛤刃系統に属するものである。安山岩系の石材を使用し、刃部のみを研磨しており、柄取りつけ部は敲打して調整したものと思われる。長さ10.0cm、幅 5.0cm、厚さ 3.0cm。②はD区より出土した。柱状片刃石斧である。安山岩系の石材を使用しており、刃部に弱感の使用痕らしきものを認めることができる。現存長 8.0cm、幅 3.3cm、厚 3.3cm。

石庖丁(第13図3~6・図版13-7・6・9・8) 外特刃半月形態に属するもので両面から研磨した両刃式のものである。石質は多く硬質砂岩系の石材を使用しており、孔は2個で両面より穿孔してあり、使用痕などはほとんど不明である。③と④はそれぞれD区・E区の裾線より内側の黒色土上部より出土したものであり、④には節理線が走る。⑤・⑥はそれぞれG区・I区の裾線より外側の黒色堆積土より出土したもので、⑥はほぼ完形品であり長さ 8.7cm、幅 5.4cm、厚さ 1.0cmである。

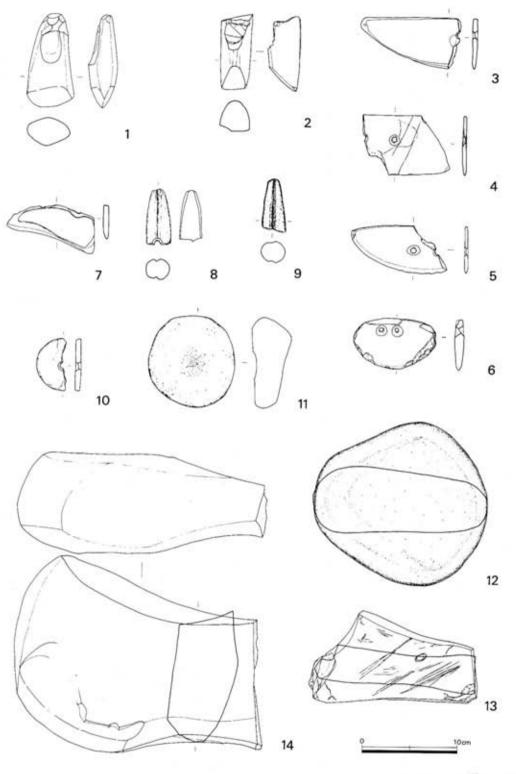
石鎌(第13図7・図版13-10) D区の裾線より内側の黒色土上部より出土した。 刃部は内彎刃形態の両刃式のもので、ほぼ完形品である。石材はスレートで風化及び剝離が著しく、使用痕などは不明である。現存長 9.3cm、幅(基部)3.7cm、厚さ 0.6cm。 石錘(第13図8・9・図版13-1・2) それぞれA区・J区より出土した。円柱 状で一端が尖り気味となり、円錘に近い形態で中央部に孔を穿ち、上部には対象的に溝をつけた形式のものである。ともに砂岩系の石材を使用しており、下半部を欠損している。⑧は孔の部分が残る。現存長 5.9cm、最大幅 2.7cm、厚さ 2.5cm。

紡錘車(第13図10・図版13-5) K区より出土した。角閃岩系の石材を使用している。直径 5.5cm。

凹石(第13図11・図版13-11) D区より出土した。石材は花崗岩系のもので両面を利用しており、そのうち一方はよく使われたのか、凹みが大きい。完形品で径 9.4cm のほぼ円形、最大厚 4.2cm。

石皿 (第13図12) A区より出土した。石材は花崗岩系のもので両面を利用している。完形品で最大長18.3cm、幅17.2cm、厚さ 6.7cm。

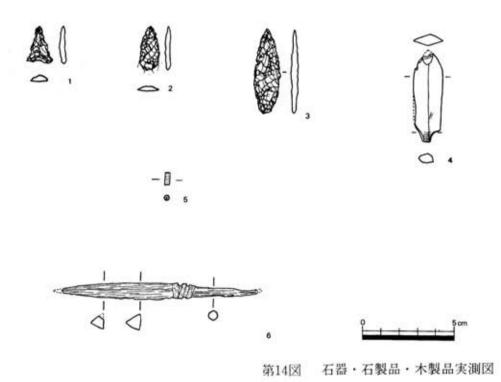
砥石 (第13図13・14・図版13-12・13) ③はA区より出土した。石材は粘板岩系



第13図 石器実測図

のもので、4面を利用している。幅の広い面はよく使用されたようであり、擦痕が残る。現存長17.2cm、幅 9.4cm、厚さ 4.1cm、 $(\Phi$ は J 区より出土した。石材は砂岩系のもので、9つの面取りがある。そのうちの1面は特によく使用されていたらしく、中央が凹んでいる。現存長26.2cm、幅10.7cm、厚さ20.7cm。

石鏃(第14図1~4・図版14~2・1・3・4) ①はE区より出土した。石材は 黒曜石で鋸歯鏃系のものであるが、脚部を欠損する。裏面は偏平である。現存長2.0cm、幅 1.4cm、厚さ0.35cm。②はL区より出土した。石材は黒曜石で抉りの比較的浅い五角形鏃系のもので、裏面に自然面を残す。現存長 2.4cm、幅 1.1cm、厚さ 0.3cm。③と④はB区より出土した。80cm程度の間隔をもち、③と④とのレベル差は④が15cm程下で出土した。③は黒曜石を石材とした柳葉形のものであり、全面に二次加工を行ない端整にしているが、基部を欠損している。現存長 4.6cm、幅 1.4cm、厚さ 0.4cm。④は粘板岩



系の石材で、磨製有茎石鏃である。断面菱形で全面よく磨かれており、茎部には数条の 線が刻まれている。現存長 4.9cm、幅 1.6cm、厚さ 0.7cm。

石製品 (第14図5)

石製品としては、石鍋片などの他、J区より管玉が1個出土した。長さ7.08mm、外径3.00と2.88mm、孔径1.45と1.41mmで、ほぼ真直な孔が穿たれている。薄緑色を呈す碧玉を石材とする。

木製品 (第14図 6)

木製品としては鏃が1点K区より出土している。身部の断面は三角形で、基部は円形

を呈する形態である。板目材を利用したもので、硬質である。また基部には柄に取りつけるための桜皮が巻かれている。先端部と端部及び身部の一部を欠損しているが、ほぼ完形品で、現存長10.7cm、身部最大幅 1.0cm、基部最大径 0.7cm。 (原田保則)

Vむすび

半田盆地を間流する半田川は盆地の中央部で宇木川と合流している。この盆地は少くとも古墳時代前期までは水草が繁茂した沼地であったことが知られるが、いつの時代に陸地化したかは今のところ不明である。従って水田耕作地は谷川畔の狭少な面積に限ららていたものと推察される。このような環境下における東宇木遺跡を形成した人々の生活の場もこの時代と推定される。

東宇木遺跡における生活遺構を明確にすることはできなかった。水田が開発される時点で丘陵端の削平がなされたためである。しかし、寺の下遺跡にみるように小規模な住居址が存在していたものと推察される。ただ、時代は不明であるが井戸址の存在は注目される。丘陵上に存在する住居の近くでは地下水が低く、深い井戸を必要とするがその技術と労力を考慮すると谷川の清水を利用することになろう。しかし、この近くに清流は見当らない。結局、沼渕に小規模な井戸枠を埋め込み濾過水を集める井戸として利用されたものと考えられる。

この遺跡から出土する土器群は、弥生式土器と土師器に大別されるが、量的に土師器の占める量が多い。弥生式土器は弥生時代中期から後期にかける時期の所産になるもので流れ込みと考えられる。土師器は古式土師器の範疇であって、半田の寺ノ下遺跡の時代と考えられる。また、土器の中にはその調整方法に畿内的手法がみられることは、寺ノ下遺跡出土の土器とともに注目される。この地域における土師器には横田下古墳出土のものがあって、興味がもたれるのである。また、佐賀平野で近年確認されてきた古式土師器との系統についての考察も今後の研究課題であろう。

東宇木遺跡は、弥生時代から古墳時代にかけての生活址の一端を物語るものであって、 特に古式土師器の出土は注目されるところである。

鏡・久里地区の圃場整備事業に伴う文化財調査報告書第2集を刊行するのであるが、 この地区の調査が終了した時点で総括的に論攷したい考えである。 (木下 巧)

【付記】

- 1. 本報告書は昭和51年度国庫補助金を得て実施した圃場整備事業にかかる発掘調査の 記録である。
- 2. 本書の作製は県教育委員会文化課文化財調査係で行なった。編集は服部・原田が行 ない、執筆は木下・服部・原田が分担した。
- 遺物実測には主に原田・松尾直子が、Nの(2)の1・2・3を松尾吉高があたり、トレースは服部・原田・松尾・藤原新子が行なった。
- 4. 写真は木下・服部・田平徳栄が撮影した。
- 5. その他、仏坂勝幸・宮崎祐治・藤井信・馬場悦子・江口信子・江平奈保子の各氏の 御協力を得た。厚く謝意を表する。

第 3 部

図

版



1. 飯盛山より



2. A区全景



7 871768 3 A区土器出土状況

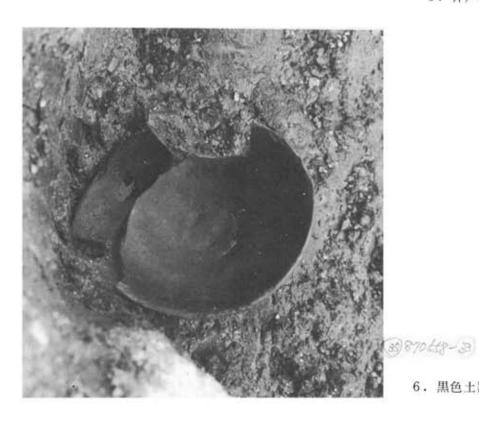


@871755

4. 土師器壷 (二重口縁) 出土状況

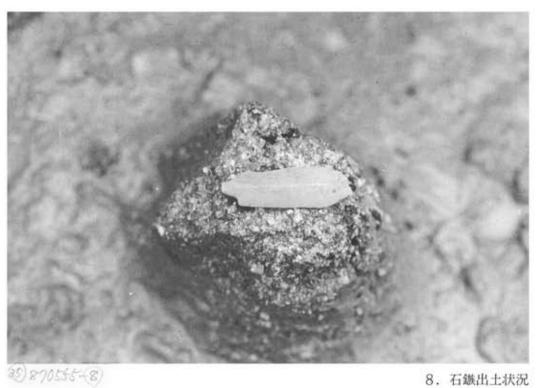


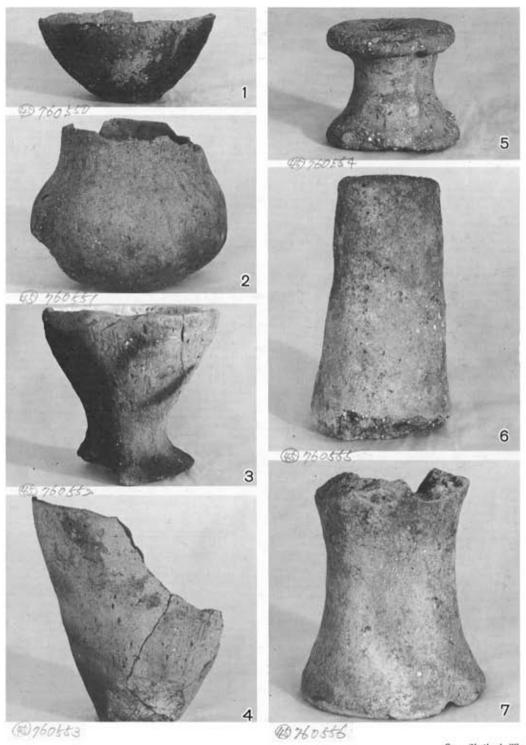
5. 井戸址検出状況



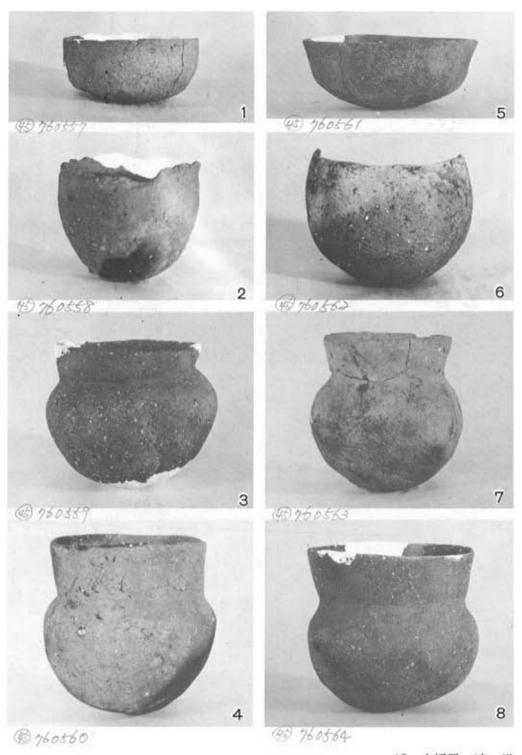
6. 黑色土器出土状況



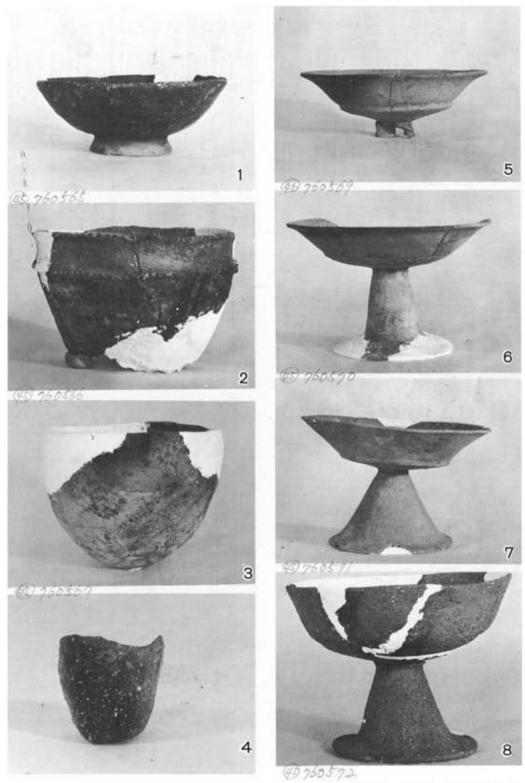




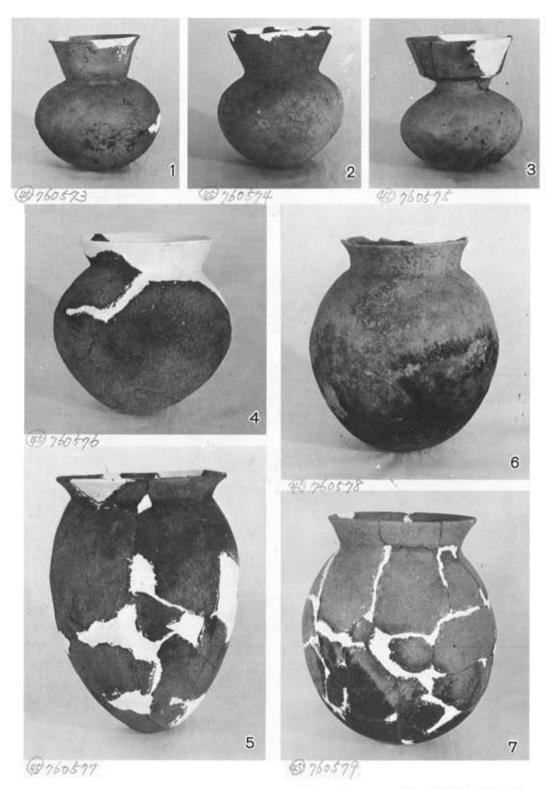
9. 弥生土器



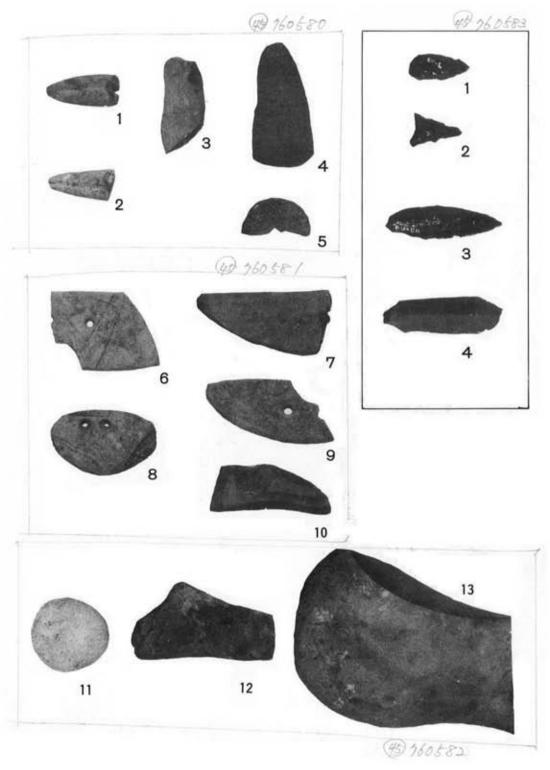
10. 土師器 境・坩



11. 土師器 高坏・その他の土器



12. 土師器 壷・甕



13. 石 器

佐賀県文化財調査報告書第37集

佐賀県農業基盤整備事業に係る 文化財確認調査報告書

昭和52年3月31日 発 行 佐賀県教育委員会 佐賀市城内一丁目 印 刷 福 博 印 刷 佐賀市兵庫町修理田

